
この問題、答えられますか？

河道 秒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この問題、答えられますか？

【Nコード】

N6777V

【作者名】

河道 秒

【あらすじ】

特殊な義眼を持った少年、黒木天真は恩師から一人の金髪の美少女、シャノン＝フォン＝フォスターを預かることになった。ついでに彼女と同居。何ともいびつな関係が築き上げられたのだ。

幼馴染の天音凜の尻にしかれつつ、悪友のサイカ＝リンクスにはやし立てられつつ、義妹の黒木紅音に手を焼かされつつ、天才奇人少女のリリス＝フォーの破天荒さに苦労を感じつつ、シャノンを交えた日々を過ごしていた。

そんな矢先、黒木の周りで異変が起こり始める。彼の住む寮に向か

って銃弾が撃ち込まれたり、シャノンのことを囲うように黒い服の集団がいたり、巫女服の女性、中松沙雪が突撃してきたり。そして、天真はついに踏み込んではいけなところまでできてしまつて？

清々しい朝(?) (前書き)

まずはプロローグです。

清々しい朝(?)

清々しい初夏の朝のはずだが、高校生の住む学生寮にはなんと形容しがたい空気が流れていた。

「今日の朝飯は食パン、スクランブルエッグにベーコン、ソーセージ」

寮の小さなテーブルに並べられた料理。それを見て、ゆっくり椅子に腰掛ける腰掛一人の少女に向かって、俺 黒木天真はにこやかな笑顔を作りながら朝食の献立を言った。

「……まあまあんじゃないの」

しかし、その笑顔を無かったかのようにして、少女は仏頂面で切り返した。

少女の名前はシャノン・フォン・フォスター。艶やかな金髪は朝であるにもかかわらず、その光沢を失っていない。体は華奢であり身長は女性のなかでも低いほうだろう。さらに女性特有の起伏には乏しい。一見すると中学生ぐらいに見えるのだが、れっきとした高校生である(自称)。そして、青い瞳はサファイアを想像させるかのような美しさを持っている。しかし、正面に座った俺を見る目は何かを蔑むような目つきである。

「まあ、文句を言わずに食え」

「あたしに命令すんな。痴れ者くせ者無礼者」

「朝なのによくそんな汚い言葉がポンポン出てくるもんだな」

「汚くなんかない。本当のことを言ったまだよ」

「ひどい言われようだ……」

ちなみにここは日本である。さらに付け加えるとすると横浜である。グローバル化する今の社会、外国人がいて、流暢に日本語をしゃべっても何の問題も無いのだが、ここは学生寮。当然、思春期真っ只中の男女が同室にいることはまず今の世では珍妙であろう。「こんなのが毎日、毎朝続くのかよ……。うつ病になっちまいそう

だ……」

「なんか言った？」

シャノンとは高圧的な態度で俺を見つめた。

「何もございませんよ……だ」

俺は心の中で本当に大変なことになりそうだと大きくため息をついた。

「くそう……師匠め……。なんでこんな厄介事を……。一体今度はいつ来るんだろう……」

シャノンはある俺の恩人から預かっていてほしいと頼まれた人である。断りたかったのだが、断るに断れなかったのだ。

「何よその見るからに嫌らしそうな顔は。気持ち悪い。どうにかして」

「あなたは どうして 刺々しい言葉を どんどん吐けるんでしょうかねえ！？ 豹変っぷりが恐ろしい！」

「なんて言うのかな……本能的に、かな？」

ひまわりが咲いたような笑みを見せるシャノン。俺はどう反応しているか分からず、

「もう学校あるから、行くな……」

と、その場から退散することを決め込んだのだった。

「ガッコウ……？ ああ、イサオが言ってたあの子供が寄ってたかって黒板見る場所ね」

「随分、偏った見方してるな……。学校は単にそういう場所じゃないさ」

「じゃあどういう場所よ？」

「お前、学校行ったことないのか？ やっぱりまだ高校生じゃないふがっ！？」

黒木の顔面の中央に右ストレートが炸裂した。顔から火が出るような痛みがした。

「加減を知りなさいっ！ 痛いじゃねえか！」

「注文が多い。某森の中にある料理店じゃないんだから」

俺が涙を浮かべて懇願するも、シャノンは気だるそうな碧眼をしながらでそれを却下した。

「もう諦めよう……。じゃあ行ってくるからな。外に出て良いけどカギ閉めて行けよ。それと部屋の中のモノだけは壊さないでくれよ」俺は学生カバンを持ち上げ、玄関に向かう。

シャノンは朝飯をつつきながら、

「分かった。テンシンは何時に帰るの？」

（こういうところは素直なんだな。つか、やっぱり大人しければ可愛いな……）

と、俺は心の中で呟いた。彼女は西洋人形のように可愛らしい少女なのだが、たまにとんでもないことを言ったり、目線が鋭かったりとその愛らしさを下げる要素があるのだ。ただそれはいつもではなく、朝が一番ヒドイだけなのだが。

「そう。あれ、少し顔がにやけてるわね、どうしたの？ 随分気持ち悪いけど」

「一言余計だ……。なんでもねえよ。じゃ、行ってくるな」

俺がドアノブに手を掛け、部屋を出るとき、

「……行つてらっしゃい」

呟きに近い彼女の声がかすかに聞こえたのだった。

俺が戸惑っているのも無理はない。戸惑っていないように見えても内心はものすごく戸惑っている。なぜなら、彼女と会った二日前から奇妙な状況が続いているのだから。

主人公体質の男の子（前書き）

第一部の続きです。

主人公体質の男の子

六月の土曜日の朝を、俺は清々しい気持ちで迎えた。カーテンをさつと開け、初夏の日差しを部屋の中へと招き入れる。

「ちょうど良い暖かさだな。授業中寝ちまわないようにしないと…」

…」

俺の席は一番窓際なので、ちょうど眠気を誘う暖かな日だまりが直撃するので、気をつけないと教師に叩き起こされてしまうのだ。

「で、だ。なんでお前はこんな清々しい朝に俺の部屋にいるんだ？」

黒木がさつと後ろを振り返ると、

「……………」

俺の背後には少女が一人。肩のところで切りそろえられた黒絹のような美しさを持った黒髪。背は黒木の肩くらい。学校指定の純白のYシャツに、スカートという出で立ち。薄手のYシャツだから、女性特有の二つの隆起したカタマリが強調されるように大きく感じた。

彼女の名前は、リリス＝フォー。学校で知らぬものはいないというぐらいの有名人である。彼女の特徴は、碧眼である。黒髪なのに碧眼、というのは珍しいだろう。

「……何故、と言われても……」

「それに、俺の部屋のロックはどうやって外した？ そんな音が一切聞こえなかったんだけど……」

「……即興で作った対犯罪用鍵穴のピッキングセット。既存のピッキングセットとアルミを加工して作りました」

「またか……」

俺はこめかみを押さえた。どうしてこんなところでその才能を使ってしまうんだろう、と。

ちなみに彼女は一言で言うと、天才、である。今までの校内の定期テストでは一位を記録し、既に外国の大学への推薦入学が決まっ

ており、おまけにさっきのように即興で犯罪道具を作るのもお茶の子さいさいといったところである。

たまにこうして俺の部屋にもぐりこんで物をたかったり、彼女のヒマをつぶしにくるのである。他の連中の部屋にももぐりこんでいる、らしい。そして彼女はあまり社交的な性格ではないので、友達はい少ない。俺の一つ下の学年だが俺に興味があるらしく、こうしてたまに会ったりするのだ。

「用件はなに？」

「……朝ごはん」

「へ？」

「……朝ごはん、まだ食べてないんです」
何かを懇願するような目線。

「ようは、俺にお前の朝飯を作れと？」

「うん」

普通の女の子の場合ならいやっぽう、これでウハウハだぜ、となるところなんだろうが、相手は美少女であるが天才の奇人。当然、そういう反応は無いわけで。

「俺だつて今からなんですけど……」

「ダメ？」

女の子の武器、上目遣い。だが、こんなのはある人物に毎回食らっている俺はビクともしない。

「ふふふ、この黒木さんの心を動かすような頼み方ができたら良いぞ。チャンスはあと一回だ！」

リリースはむむむ、という声を出しながら考え始めた。

（これだけでも相当クラクラ来てるけどな……）

さすがに天才といえど、思春期真っ盛りの血気盛んな男子の気持ちをキャッチするお願いの仕方なんて、色目使う以外には流石にないだろっ、と俺は考えていた。が、

「……お兄ちゃん、ごはん食べさせて？」

急に声を甘ったるくし、上目遣い。破壊力は半端ではなかった。

男子の回避不能な朝の生理的現象をもう一度、復帰させてしまいうらいの。

俺は正直な話、彼女を侮っていた。しかし、

「む、無理だ……。た、耐えられないッス……」

「私の勝ちですか？」

きょんとした顔で言った。天才はこんなこともやれるのか、と俺は心の中で感嘆していた。

「わ、分かった……。朝飯作るから……ってあと十分で身支度済ませないと遅刻するぞ!？」

「……手伝ったほうが良いですか？」

「いや、お前は良い。大変なことになる……」

「……お腹が空きました」

「あゝもう分かったから！ 今すぐ作ってやるから涙目で上目遣いしないでエエエエ！」

俺は慌ただしくサンドイッチを作りながら遅刻を覚悟したのだった。

ちなみに、騒ぎながらも今日の朝のテレビで見た星座占いで俺かに座は最下位だった。

人生最悪の厄日になります。身体と慢心とお金に注意。ラッキーカラーは金色、自分を見つめなおすと幸運が呼び込めるかも、だそうだ。

その後健闘するも、リリースが途中で寝てしまいそれを朝飯を食べながら起こしていたり、そのピンチを切り抜けダッシュで学校にまで向かっているときに、つい困っていたおばあさんを助けてしまったりと色々なことをしていたらあえなく学校のホームルーム終了のチャイムが聞こえたのだった。

「はあ……」

「お、天真く〜ん！ 今日遅刻かなあ？」

教室に入るなり、男の声が聞こえた。窓際の席のほうからだ。声の主の少年の名前はサイカ・リンクス。名の通り、外人だ。金髪で少年で、顔は地方テレビに出てるようなタレントよりもイケメン面である。それでいて女子にモテない理由があり

（つていうか何気に俺の学校、個性的な外人が多いような気がするんだけど……）

「普段遅刻だけはしない天真くんが今日はなんで遅刻なのかなあ？」

朝の喧騒を聞きながら、俺はカバンを席に置く。

「うるせえ。今日は朝から大変だったんだよ」

彼は俺の隣の席であり、簡単に言うなれば悪友、である。

「そういう人間はだいたいシアワセ体験をしている！」

サイカは世間一般的に言うとかたくである。それも重度の。

「んなワケないだろ……。お前、ゲームのやりすぎね。つたく、バカかお前は」

「で、結局お前は何して遅刻したわけ？ ステキイベントだったら殺す」

「リスに忍び込まれて朝飯を作らされたのが主な原因であとは人助けだ。ほらどこにもそんなステキイベントなんてあるわけが」

そこまで言った瞬間、何人かのクラスの男子の視線が俺に向いていた。この朝の喧騒の中、俺たちの会話を聞いていたクラスメイトたちに一瞬恐怖を覚えた。そして同時に第六感を感じた。このままでは危ない、と。

「ほうあの天才美少女リスちゃんと一緒に朝を過ごしたワケですかほうそうですか……野郎ども」

「なあ……サイカ。なんでそんなに怒ってるんだ？ いやたまたま今日だけだったわけでそんな毎日というわけでは……」

「朝、美少女と過ごせるなんて男の夢でしょうが！」

「知らねえよ！ おいおい周りの奴ら同調すんなって おい、目

つぶしだけは本気でやめろ！　うわあああああああああ！
こうして一時間目の授業が始まるまで俺はサイカたちにもみくち
やにされたのだった。

キーンコーンカーン……

（ああ、この懐かしいような響き……）

「おはよう、やっと起きたのね？」

どこかで聞いたような少女の声がした。

「……ん。あれ？　今何時？」

寝ぼけた頭で俺は尋ねた。

「放課後の二時。寝てたわよ」

どうやら俺は帰りのホームルームの途中で寝てしまったらしい。
授業中に堪えていた眠気のせいだろうか。自分自身、よくもまあ寝
てられるものだと思った。

「んでもって凜はなぜここに……？」

突っ伏していた俺の横には天音凜がいた。目鼻は端正に整ってい
る。首をかしげると茶色に染まっているポニーテールがふわっと揺
れる。彼女は俺の小学校からの仲であり、高校に入ってから一緒に
帰るくらいの仲である。

「え、えと別に……て、天真が起きるのを待ってたわけじゃない……
んだから」

少しきこちなく、モジモジした様子で手をいじりながら言った。
その手をいじる癖は彼女の小学校からの何かを言うときの癖である。
「また癖出てるぞ。早く直せよな。中学校の時から言ってるだろ……」

「わ、分かってるわよ」

「よし、なら良い。帰ろっぜ。待たせちまったな」

「ええ」

一緒に帰る、と言っても俺の寮までの間だけだが。

二人並んで、帰る。他愛のない話をする。それが俺にとって幸せな時間であり、日常である。

「ねえ、ちよつと遊んで行かない？」

凜が唐突に言った。

「良いけど……どこ行くんだ？」

「お昼ごはん、食べに行こう？」

「オーケー。まだ金に余裕はあるしな」

「そう言って月末に無くなるのがオチでしょ」

「すみません」

近くに、ちよつとしたアーケード街があるので、そこに行くことにした。ふと残金がいくらかを確かめるために財布を開けると、

「あ、やべ。下ろすの忘れてた。凜、ちよつとそこで待っていてくれ」

「もう、しつかりしてよ」

近くのATMで金を下ろす。結構人が並んでいたので、時間がかかった。

（少し、遅くなったな。あいつ、時間にはうるさいからな……）

と、気がつくと、凜が数人の男に囲まれていた。

「なあ、ちよつとでいいから俺たちと遊びに行かねえ？」

「いえ……予定が……」

「そんな後でいいじゃん、なあ？」

「そういうわけにも……」

凜はぶつちやけて言う可憐いから、ナンパを受けるのも仕方があるまい。一人や二人のナンパは慣れているという話は聞くが、複数人は彼女にも堪えているらしい。

「ちよつと、アンタたち。やめてあげなよ」

俺は面倒くさそうに話しかける。

「おいおい、お前こいつの男かよ？」

体つきの良い男が言った。

「いいや。友達」

凜が何か言う前に俺がさりとってのけた。俺は喧嘩になっても勝てる自信があったからだ。

「喧嘩売ってんのかぁ！？　口はさんでんじゃねえよ！」

いくらなんでも理不尽すぎるなあ、と俺が思っただけを、意識を一点に集中させる。見ることを、全てのものを捉えてるかのようなイメージ。自分の中のスイッチが切り替わる。

再び目を開くと、男が不意に殴りかかってくる。それを俺は最小限の動きでよけた。なぜなら、相手のパンチがスローに見えたからだ。

「やめてくれ。喧嘩は嫌いなんだ。それに……白昼堂々と……恥づかしいのか？」

「なめんなよ！　全員で掛かれ！」

（困んでなんて汚つたない野郎どもだな……　つーか今日はホントに厄日だ……。さっさと片付けよう）

次々と拳や蹴りが放たれるが、悠々と、最小限の動きだけかわしている。そして、今の俺の右目の色は黒ではなかった。金色。それが俺の今の右目の色だ。

「なんで当たらねんだ！？」

「はあ……」

この右目、動体視力を通常の十倍にできるという代物だ。これは魔法とか、超能力とかそういうものじゃない。機械だ。

俺は昔、右目を失明した。そんな時、ある人に助けられ、その失明した右目に実験段階中のこの義眼が埋め込まれたというワケだ。この義眼の原理は、脳に線を通して、それを義眼に繋げるというもの。視界で捕らえているものは脳に送っている電気信号でしかないのだ。義眼はナノマシンの集合体でできているらしい。普通の肉眼と機能は全く変わらない。普通にモノが見えるが、脳に送る電気信号を変化させ、眼球運動を増大、拡張させることによって動体視力を一時的ではあるが、爆発的にあげることができるのだ。ただそ

れは脳の負担を考えるとごく僅かな時間しか使えない。連続で十五分が限界だ。その動体視力を上げている時だけ目が金色になる、という痛々しいおまけつきだが。金色になる理由は確か、ナノマシンがフル稼働しているからだそうだ。

「もう気は済んだか？」

「この野郎……！」

ゆくりと大きく振りかぶる。十倍の動体視力で見てるのだからものすごく遅く感じた。痛恨の一撃を出そうという気である。俺は能力を使わなければ、喧嘩もさほど強くないし、力も強くないので、戦略的に、そして確実にここから脱出する手口を選ぶ。それは、

「えいつ」

男の弱点に　わかりやすく言うと足と足の間の空間に　蹴りを叩き込んだ。同様にほかの連中にも流れ作業のように股に蹴りを入れていく。動体視力が向上し、パンチの中でもそれをかわしながら、蹴りを叩き込む。

「えいつえいつえいつ」

「あ……ぎっ……」

男ども、その場で股間を押さえながら悶絶。しばらくは痛みが引くだろう。

「大丈夫、そんなに力入れてないから潰れはしないさ」

凜のもとに行つて、ここから離れるように促すと、なぜか彼女の頬がほんの少し朱に染まっていた。

「あ、ありがとう……」

「おう。じゃあ飯食いに行こうぜ」

「わ、わたしを守った、ってこと？」

「うん。どうかな……困っている人は放っておけないしな！　あとは気分だ」

俺が答えると、

「バカ……。今日、天真のおごりね！　わたしを怒らせた罰として」「ええええええええ！　俺なんか悪いこと言ったか！？　だとした

ら謝るぜ……」

「ダメ。今日はおごりだから。あんな人たちに絡まれたのもあなたのせいなんだから」

「う……それを言われると……。分かったよ！ おごってやるよ！」
「わーい！ やったあ！」

こうして横で喜んでいる姿を見ると、つい笑みがもれるのは凜の魅力なんだろうか、と俺は思ったのだった。

「どうしたの？ 何か楽しいことでもあったの？ あ、いつもみたいにえっちな想像してたでしょ」

じとつ、とした目で彼女が俺のほうを見てくる。

「そんなこと考えてないッス。なんでもない。腹減ったから早く行こうぜ」

「ええ」

近くのファミレスに行くことにした。昼時というだけあって混んでいた。学生もちらほらと見えている。凜は結構注文の数が多かった。あまり注文させられると今月がづらい……。

「凜、結構頼んだな。腹減ってるのか」

「ええ、まあ」

これ以後、デザートなるものを注文されないように釘をさしておくことにした。

「これ以上食べると……太る　ゴフッ」

今の珍妙な音は凜が俺の顎をアップパーカットした為、出た音である。顎が痛む。凜ってこんな力が強かったのかと思ひ知らされる。

「なぜ殴られる！？ 俺はただ注意してやっただけなのに！ 理不尽だああああ！」

「次、もう一度さっきのような失礼なことを言ってご覧なさい？ 加減はしないわ」

「今のが加減したというんですか！？ どんだけ怪力！？」

「い、今のが全力よオホホホホ」

「無茶苦茶きこちないしゃべり方になってるぞ。というかお前、日

頃ちゃんと食ってんのか？ 妙に痩せてるように見えるんだが」

「そ、そう？ でもそりゃ、食べてるわよ。食事には気を使っけどね」

「ふうん」

俺も少しは食生活に気をつけようかな、と呑気に注文を待っていると、

「うむ？ 天真か。元気そうで何よりだ」

「え？ 師匠？」

俺の横には師匠 あまみや いさお 雨宮功が立っていた。長身で、肩幅は広い。

凛々しい顔つきで、声は渋い。和服でも着たら似合ってそうなのが、簡素なシャツと、ズボンという組み合わせだ。ちなみに年齢は不詳。趣味は放浪なので一箇所にとどまって何かしているということとは少ない。他のことは一切不明。

師匠は俺の義眼をつけてくれた科学者兼医者であり、人生で一番の恩師である。なぜ先生ではなく、師匠と呼んでいるかというところのほうがかっこいいじゃないか、という師匠の希望からだ。

「今日はどうしたんすか？ 旅行ですか？ それとも研修会か何かですか？」

「いや、今日はお前に用があつて来た。まさかこんな所で会うとは好都合で何より」

「用って？」

「後でいい。それよりこちらのお嬢さんは？」

「天音凜と言います。よろしくお願いします」

凜はきれいなお辞儀をする。さながら、高級レストランのウェイトレスのようだった。

「私は雨宮功。医者だ。天真がいつも世話になっている」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。さつきも助けてくれましたし」

「うむ？ 彼女を何かから助けたのかね、天真？」

「ええまあ……。ナンパしようとしてた奴らがいたんで……」

「良い心がけだ。では天真お前の寮の前で待っているぞ。そちらのお嬢さんもまたよろしく」

と言つて、出て行つたのだった。昔から素っ気なくて、人付き合いもそんなには多くない。言いたいことだけ言つてどこかに行く嵐のような人だ。

「あの人、天真の知り合い？ 師匠、とか言つてたけど」

「あれ、凜会つたことなかったっけか。俺の義眼をつけてくれた人だよ。科学者兼医者つていう無茶苦茶な組み合わせだけど」

凜は俺の右目については知っているのだ。義眼について知っているのは身内の人間と凜ぐらいである。

と、会話をしているうちに目の前のテーブルに料理が並べられる。

「いただきます」

「いただきます」

二人で言つて食べ始める。

この時は何も思わなかっただろう。この後、本当の人生最大最悪の災厄が舞いこんで来るとは思わなかったのだから。

食事を終わらせ、レストランを出る。代金は当然のごとく、俺に払わせる凜。怖いものだ。

「じゃあ俺は帰るから。じゃあな、また今度」

「ええ、またね」

凜は帰る方面が反対なのでここでお別れである。

（そつえば師匠が待つてるとか言つてたな……。何の用なんだろ）
ここから寮までは歩いて十分かからない距離にある。師匠に会うのは久しぶりだ。三年前似合つたのが最後だった……。ような。とにかく久しぶりの再会なのだ。世間話でもしようかな、と考えていると、

「おお、天真。遅かつたな。ガールフレンドとの食事がそんなに楽

しかったか？ まあ、人生一度の青春をそついうふうに謳歌するもの悪くはないだろう」

「が、ガールフレンドとかじゃないですよ、凜は。それで俺に用つてなんですか？」

「この子を預かって欲しい。シャノン」

そう師匠が言うと、彼の後ろおずおずと金髪の少女が出てきた。西洋人形のような端正な顔立ち、白磁のような白い肌、大きなサファイアを連想させる碧眼。首には高級そうなペンダントもかけている。線の細そうなその小さな体は触れただけで壊れてしまいそうだ。青いワンピースは初夏に見合った清々しさを感じさせる。

「この子はシャノン」フォン・フォスター。少し事情があつてな……。俺が預かることになっている」

「そうなんですか」

「何を他人事のような口調で言っているんだ。俺にはこの子を預かれない事情ができた。だからお前に預けることを決めた」

「は？」

つい、素つ頓狂な声が出てしまった。あまりにも急で、頭が現実を追いついていけない。

「お前のその義眼、誰が取り付けてやったんだ？」

師匠には大きな借りがある。俺の義眼をつけてくれたのもそうだし、それを無償でやってくれたのだ。

「師匠のおかげデス」

「なら、その恩返しとでも思ってくれ。この子を預かって欲しい」

「マジな話ですか？」

「大マジだ」

「いつぐらいまで？」

「俺がここに引き取りに来るまでだ」

「うわあ……」

シャノン、という女の子は師匠にくつつきっぱなしでちっとも離れようとする素振りを見せない。よほどなついているように見える。

そんな仕事はあまり背負いたくない。食費がかさんでしまう！

「あ、でも師匠それはそれで問題があるんじゃないですか！？ 管理人に見つかったらタダじゃすみませんし、他の寮生にも迷惑がかかるんじゃない……」

「問題ない。管理人への挨拶は済んである。管理人からもそのことを他の寮生にも伝えるよう、言っておいた」

「……………」

ぬかりない人だった。

シャノンの目つきはなんだか鋭い。俺のせいだろうか。

「ではよろしく頼むぞ。それではな」

と、言つと師匠は走り去っていった。

「ちよつ、師匠！ はあ……」

それで残されたのは俺の目の前にいる少女と、俺だけ。どう切り出そうかと、俺の少ないヴォキャブラリーを漁っている真っ只中だ。そんな時、ギュルルル、という音が二人の静寂の間に鳴り響いた。「腹、減つてる……？」

シャノンはこくりと頷いた。

「冷蔵庫の中には……チャーハンぐらいなら作れそうだ。食べる？」
彼女はまたこくりと頷いた。それがとても可愛らしい仕草に見える。

「じゃ、こつち」

彼女は無言で俺のあとをついてくる。少し後ろを振り返つてもしやべる動作の一つすらしない。しかもその顔がムスツとしているのは気のせいだろうか。

俺の部屋は五階にある。そして俺の心はその五階から飛び降りようとしているかのように心臓の鼓動が早い。というか今になって頭の整理が追いついてきたのだ。

師匠から彼女を シャノンを 預かってほしいと頼まれた。預かって欲しい、ということは同じ屋根の下で寝食を共にするということである。この子だって女の子だ。そんなことになったとした

らまともに寝ていられる自信がない。

「さ、どうぞ……。汚いけどな……」

シャノンは何も言わずに入ってくる。ただ、やっぱり感じるのは俺を見るその眼光が以上に鋭い、ということだ。サファイアのように綺麗だが、氷のように冷たい視線。

（人見知り……。なのか？）

俺は疑問に思いつつも、台所に行く。シャノンはテレビの前にちょこんと座っている。

「テレビ……見たいなら点けても良いぞ……」

彼女はその後もなんだかぼうつとしていた。

俺の包丁とフライパンの音だけが部屋の中に響く。正直な話、すごく居づらい空間だった。と、その時、

「兄さん兄さん来たよなんかご飯食べさせてよ！」

矢継ぎ早に言葉を飛ばしてきたのは俺の義理の妹である、黒木紅^{くろぎ あ}音^{かね}である。

ノックもなしに、この部屋に上がりこんだ我が義妹は玄関から声がして一秒立たないうちに、俺の目の前に姿を現していた。仔犬のようなくりくりとした目にツインテール。首の黒いチョーカーが特徴的で、顔立ちもよく、黙っていれば男子からもてはやされること間違いないのだが、

「兄さん兄さん！ あの可愛い子は誰？ 触っても良い？ 抱きついてても良い？」

「あゝうるさいな！ 頼むからあっち行ってくれ……。今料理中なんだ。つーか何でお前ここに来た？」

「ご飯」

「え？」

「お昼ご飯食べさせてもらうため」

ああ、神様。というか占い師さん。今日は本当に厄日のようです。朝、昼と立て続けに飯を作ってたたり、おごってたったり。さらには奇妙な少女が舞い込んできたり。

うつ病になっちまいそうだ……。

「わ、分かった。……とにかく少し待っていてくれ……」
「じゃ、あの子とお話してくるね！」

紅音はまるで犬のようだと昔から思っている。少しでも目を離すところかに行ってしまうような気がするからだ。見ての通り、興味があると、いつもそこへ行ってしまう。苦労が絶えないのだ。

しかし、そんな性格上からか、興味のあることは極めるようで、博士号を持っているらしい。俺はあまり紅音には干渉しないのでよく分らないのだ。

（まあ、せめて『お兄ちゃん』、と言ってくれる妹が欲しいもんだ……）

「お名前は？」

「……シャノン」

「シャノンちゃん？ 可愛いね、触りたい抱きつきたい」

シャノンも困り果てたような顔をしている（まゆげに変化があったのがわかる）。俺は彼女に助け舟を出してやろうと、ちょうどできたチャーハンを持って行く。

「ほれ、できたぞ。紅音のじゃないからな」

「えええー……」

「ええと、シャノン？ できたから食って良いぞ」

「……うん」

今、初めて彼女の声を聞いた気がする。

ぎこちない手つきで食事を始めるシャノン。なんかじつくり見ると、かわいい。ちっちゃい手、碧眼、太陽を照り返すような金色の髪。こんないるなら妹がいいな、と思いつけていると、

「ねえねえ、兄さん。なんか事情があるの？ 学校の子じゃないみたいだけど……」

「ああ、簡単に事情を説明するとだな……」

今までの経緯をおおざっぱだが紅音に説明した。師匠のこと、これから同棲するかもしれない、という二点。

「わあ……」

「どうすればいいと思う？」

「楽しそう！」

「おい！ 人の話を聞けっ」

「だって楽しそうなんだもん。兄さんの周りはいつも女の子だらけ……妬けちゃうな」

「んなわけあるか」

仮にも、そんなハーレムエンドが迎えられたら俺は幸せ者となると同時にサイカたちに指名手配されること間違いなしだが。

「で、兄さんはどうするの？」

「師匠に言われたしなあ……。弱ったぜ……。あっ」

俺はひらめいた。男子寮にシャノンがいないようにし、かつ信用できそうな人物。それは、

「紅音。シャノンを預かってくれ」

「イヤだ」

あっさりと打ち破られた。素晴らしいと思ったのに。

「となると俺が預かるしかないのか……。シャノン、しばらくここに暮らすことになるけど……。良いか？」

シャノンは少し逡巡し、

「……わかった」

と、頷いた。こうして、彼女との歪な共同生活が始まった。

なぜ、彼女が頷いたのかは分からない。学生寮に興味を持ったのかもしれないし、紅音に興味を持ったのかもしれない。彼女自身が決めたことだ。俺が知る術は無い。そう、思った。もう一つ言いたい。これなんてエロゲ？

「なあ、紅音。なぜ断ったんだ？ お前、別に不自由することは無いだろう？」

「面白そうな展開になりそうだったから！ シャノンちゃんに来てもらうより、ここに来てシャノンちゃんと遊ぶほうが楽しいし」

「はあ……。ホント厄日だな……」

ぱくぱくとチャーハンを食べるシャノン。おいしいのかおいしくないのかどっちなのだろう。さつきから表情に変化が無い。

「うまいか？」

「うん……」

（ふう……。やっと口利いてくれるようになったか……）

「兄さん兄さんシャノンちゃんがチャーハン食べたら一緒に出掛けても良いよね？ 良いよねっ？」

上目遣い。彼女はいつも俺に頼み事をする時こうするのだ。さすがに、長いことやられていたから免疫はついた。しかし、まだ少しそれに逆らえなくて、

「シャノンが良いって言ったらな」

「シャノンちゃん！ お買い物行こうよ！ 楽しいぞ」

「……わかった」

「シャノン、紅音。あまり遅くならないようにな」

「分かってるよ！」

なんか、妹が一人増えた気分だ。

シャノンはチャーハンを平らげ、紅音に連れて行かれるのだった。

「シャノンを振り回すなよー！」

紅音は片手だけを挙げて、玄関をとててつ、と去って行くのだった。

「疲れた……」

彼女たちを見送ったらどつと疲れが出てきた。少し昼寝でもするでしょう。そうして俺は、まどろみに、意識を、落とした。

……ピン、ポーン……。

「ん……あ？」

気付けば空が赤く染まっていた。あの子たちはもう帰ってきているのだろうか。さっきのドアホンはシャノンだろうか。

「はいはい……今行きますよ……」

寝起きで働かない頭と体を起こし、玄関へ向かう。扉を開けると「よう、天真。なんだ？ その顔。寝てたのか」

「なんだサイカか……」

「なんだとはなんだ。それとも他に誰か来るのかよ？」

「ん……まあ、な」

なんでこういう時に限ってサイカが来て、凶星を突かれるのだろう。本当に厄日である。

「何か隠し事でもしているのか！？ いや、今の反応だと女の子に違うないや絶対そうだ！ どんな美少女なんだ吐け！ 吐かなきゃ殴ってやる」

「やめんか！ 来るのは義理の妹だ！ お前には何も関係ないだろ

……」

シャノンのことは伏せておくことにした。バレたら何されるか分かったものじゃない。そして、拳をぶるぶる震わせるサイカ。そんなに体をわなわなさせる意味がわからない。

「義妹なんて……夢のシュチュエーションを味わっているのか！

お前は！」

「お前……思考が残念だな。ゲームの中の女の子みたいに可愛くないぞ？ 犬みたいにすぐどこか行くわ、急に押しかけて飯をたかるわ。世話が焼けるだけだぞ」

「世話してええええええええ！ というかお前の妹さんはとても可愛いつていう学校のウワサがある。会いたい。会わせて！ お願いこの通り！」

ドン！ とコンクリートの地面に地響きまでも立てるサイカのきれいな土下座。こんなことでそこまで土下座ができるなんて、なんて小さい人間なんだろう……。

「待つてれば来るから！ こんな玄関先で土下座しないでくれ。変

な目で見られるから」

「ありがとう！ お前は親友だ！」

サイカは顔を輝かせ、俺の手を取ってくる。なんか目から涙が溢れようとしている。そこまで嬉しいのか。

（紅音は有名人なのか……？ 学年が別だと分かんないな）

「それにしても遅いな、紅音のやつ……。ちよつと見てくる」

「俺も行って良いか？」

「別に良いけど。妹見てもあんなはしゃぐなよ」

「おう」

どこに行つたのだろう。中華街にでも行つたのか、あるいは海のほうに行つたのか。紅音が行きそうなところなんて無数にあるわけで、わかるわけもないのだ。

「あ、ケータイがあるじゃん」

そう言つたのはサイカだった。俺は多少なりとも冷静さを失つていたようだ。文明の利器、ケータイ。是非、ご利用させてもらおうじゃ

『電源切れです充電してください』

俺のケータイの液晶画面に映つた無慈悲なる通告。

「おいおい……。俺は不幸体質なんて持つてないんだから……」

これで通信手段はなくなった。俺は妹のケータイの番号まで覚えてるほど記憶力も良くないし、シスコンではないからサイカにケータイを借りて居場所を聞くこともできない。

「サイカ。見つけるまで少し時間がかかると思うんだが良いか？」

「もちろん！ 美少女と会つたためならたとえ火の中水の中」

「アホだ……」

しょうがない。街を一通り歩いて見つけれなかったら寮に戻る。いや、もう彼女たちは寮に帰っているかもしれない。

（なんだかんだで俺も過保護なのかな……。直したほうが良いな）

「とにかくだ。探すぞ。シャノンを迷子にさせたら大目玉喰らつちまう……」

「え？ シヤノンって言ったか？ いまいち聞こえなかった」

「いや、聞こえなくて良い！ こっちの話だから！」

「ふーん……怪しいなあ」

サイカがこちらをジト目で見ているので、この話はさっさと切り上げたほうが良さそうだ。

「うるせえ。さっさと行くぞ」

まずは最寄りの駅に行つて、その後はデパート周辺で探すとしてよ
う。

特にサイカと目ばしい会話もなく、駅に着いた。周りを見回して
も紅音らしき人物は見当たらない。

「ん？ あれリリスじゃないか」

「……？」

俺たちの目の前にいつの間にかリリスが立っていた。気配を消す、
とはこのようなことなのだろうか。

「……わたしの顔に何かついてますか？」

「いや、何も」

「……そちらの金髪でアホ面をしている人は？」

サイカのほうを指さして言った。容赦のない女の子である。天才
は思ったことを口に出してしまうのか。

「サイカ＝リンクス。よろしくな、リリス＝フォーさん」

糾弾されても、爽やかな顔で言った。人格の変わりようが恐ろし
い。女の子を前にすると彼はここまで豹変するのか、と思い知らさ
れた。

「……なぜ、わたしの名前を知っているんですか？ ストーカーさ
ん？ それとも変態さん？」

「ああそうだ。こいつは変態さんだ」

「ち、違う！ 俺は変態さんじゃないぜ。あははは……」

「それよりリリス。俺の妹見なかったか？ お前、紅音のクラスメ
イトたる。顔くらいは知ってるよな」

「……はい。でも見てません。あなたの紅音さんは迷子なんですか

？ それとも家出？」

「あなたの、は余計だ。どっちかっていうと迷子に近い、かな……」

「……見つけたら連絡します」

「そうしてくれると助かる。じゃあな」

次はデパートに探しに行くか。

「ほら、サイカ行くぞ。シャノ　じゃなくて妹に会いたいんだろ？　とつと来い」

「分かったよ……」

サイカが珍しく、やけに静かだ。

「どうしたんだよ。さつきかららしくないぞ。リリースに惚れたのか？　あいつは奇人だからな、よしておいたほうがいいぞ」

「なんで……なんでお前はそんなに美少女を呼び込めるんだああああああ！」

「そんなことかよ！」

「お前は主人公体質か！　ええ！？」

「そんな体質は持ってないし、持とうと思ったこともないつ。俺は普通で平和な毎日が続けばそれで良いんだ。いくら変わり映えがなくてもな」

とは言ったもののこれからの俺のの学生生活に何らかの変化があることは間違いないだろう。なぜなら、シャノンが同居人になったからだ。平穏な毎日を願う俺とは裏腹に、シャノンとの生活に期待をしている俺がいた。

「くそう……。俺もお前みたいな美少女引きつけ体質を持つてからカッコいいセリフを吐きたいもんだぜ」

「お前はまず言動から変えろ。黙ってれば一匹や二匹……じゃなかった。女の子の一人や二人すぐに引き付けるだろ」

「最初の一匹二匹の数え方おかしいよね……？」

「気にするな」

俺はサイカを置き去りにし、とつと歩く。駅からデパートはさほど離れていないので歩いて行ける。

「というか天真、いつもこんな妹さん搜索してるのか？ それとも今日は何か大事な用事があったり？」

「い、いや。そんなことないさあはははは」

いけない。サイカにシャノンのことを勘付かれるとこいつをなだめるのに面倒だ。

「これといった用事はないんだけど……。なんか……アレだ、アレ。そう、気分だ気分」

「俺になんか隠し事してる？ 顔にそう書いてあるぞ」

「いや別に……何も……」

デパートの広場の近くらしく、少しうるさくなってきた。

「ま、別に深くは追求しないけどさ、可愛い女の子が知り合いにいたら紹介するように。美少女であれば、なんでもオーケー」

「お前は一生画面にハアハアしてる」

「グ、グサリ……お前は俺の親友だと！ 一緒に寝食をともにした仲じゃないか！ どうして裏切るんだああああっ！」

「抱きつくな！ 離れろっ」

そういえば、一年生のときのルームメイトはこいつだった。でも、二年生になったら家の事情やら何やらで自宅通学になったのだった。すっかり忘れていた。

ただ、なぜか近くを通った若い女子グループが「キャー」と黄色い声をあげているのは何故だろう。近くに有名人でもいるのか。そのグループ、少し離れたところで止まってこっちを見てるんですけど……。俺は彼女たちに何もしてないはずだ。

「天真のリア充！ ヒモ男になってしまえ！」

「はいはい、そうですね。そんなこと言っただったらここでお別れしてしましましょうかね」

「すみませんでした！ 美少女に会わせてください！」

「既に美少女と決定してるのかお前は。というかお前のプライドって低いな……一度ならず二度までも土下座するなんて。大したやつだ」

サイカのプライドはどのくらいなのだろう。気になるところである。

「そんな公衆の面前で何やってるの？ 漫才？」

俺の背後で凜の声がしたので、振り返ると、やっぱり凜がいた。

「凜、何してんだこんな所で。買い物の帰りか？ それとも行く途中か？」

「う、うん……。まあね……。ところでその土下座してる人は、サイカ君？ 何があつたの？」

サイカは物理学的にありえないスピードで土下座の状態から気をつけの状態になり、

「天音さん。朝も夕方も変わらぬ素晴らしいお姿に俺は見惚れてしまいます！ それに幼馴染にその世話を焼く点！ 素晴らしいですっ！」

「え、ええ……。あ、ありがとう、気持ちだけ受け取っておくわ。サイカ君……」

引きつった笑みで返す凜。サイカにさえ笑顔を振りまくとは、変なところで律儀な人間である。凜はサイカのことは嫌いではないらしいが、苦手だそうだ、

俺と凜とサイカはクラスメイトなのだ。おそらく凜がナンパを回避するための術を身につけたのはサイカをほぼ毎日あしらっていたためだろう。

「そういえば、凜。紅音見なかったか？ 見たら教えて欲しいんだが……」

俺と凜が幼馴染であると同時に、紅音も凜とは幼馴染である。昔は三人でよく遊んだものだ。

「見かけたわよ。港のほうに向かっていたけど……でもどうしたの？ 迷子なの？」

それでは、次は港のほうを探して見るとしよう。まだそこにいるかもしれない。

「いや、そういうわけでもないんだ……。サイカ、凜が困ってる

ぞ。どうにかしてやれ」

俺は少し面白くなりそうだったため、煽りを入れる。その瞬間、凜から、殺気が出て、が口だけで、

『コロス』

と言っているのは気のせいに違いないだろう。そうに決まってるんだ。

「わ、わたしお夕飯の手伝いしなきゃいけないから帰るね！ それじゃあ！」

「天音さん、また明日」

サイカも変なところで律儀である。

「サイカ、いつも思うんだけど、なんで引き留めたりしないの？ 変だぜ」

「しつこい人は嫌いだろう？ それを順守してるだけさ。それこそリア充への道であり、ハーレムエンドへの道！」

「最後の一言が無ければカッコいいんだけどな……」

やはり、ダメ人はダメってことだ。

「よし、次は港だ。女に釣られてどっか行くなよ。お前まで迷子になつたら困っちゃうから」

「お前は保護者か！ 世話焼き天真クン。天音さんの影響なのか、その世話焼きっぷりは」

「俺は世話焼きなんかじゃねえよ」

会話をしながら、港のほうへ向かって進む。心なしか、塩っ気のある涼しい風が吹いてきた。

「誰がどう見たって世話焼きにしか見えないな。最初はなんだかなだ言いながら面倒臭そうにするけど、最後にはやってるんだよ、お前は」

「うぐ……そうかもしれない」

思い返してみるとそうだ。今日の朝のリリスの時だって、シャノンの時だって、今の紅音だって、結局はやることになってるのだ。不思議なものだ。世話焼き、という意識は無いのだが。

「ていうかよくそこまで俺を観察してたな。お前、意外と鋭かったり？」

「いんや。そんなことはない。見てれば誰でも分かるぜ」
「そうか」

だいぶ陽も暮れてきた。少し急いで港まで行かないと夕飯に間に合わない。

「おお……。綺麗だ」

港まで来ると、まさに映画でも見てるかのような景色が目に入っ
た。目に映る景色はすべてが美しいオレンジ色。夕焼けの太陽が海
の水面に照り返され、太陽が二つあるように思わせる幻想的な景色。
最近海は汚染も始まっているが、それを一瞬でも忘れさせてく
れるような景色だった。

「あれ……。あいつ……」

俺の少し先にシャノンが立っていた。彼女の横に立つ。

彼女は美しい景色を見ているのではなかった。その碧眼はどこを
見ているのだろうか分からないのだ。夕陽を目にするその宝石のよ
うな目には一体何が映っているのだろうか。ちよっと、気になった。
サイカのことは気にせず彼女に、

「シャノン。こんなところで何してるんだ？ 紅音はどうした？

あいつお前をほったらかしにしてどっか行ったのか」

「うっん……。違う。ここで考え事してた。アカネとはここで別れ
た」

「へえ……。紅音とは楽しかったか？」

「うん。この町のことよく教えてくれた。テンシンのことも教えて
くれた」

「あいつ、お前に余計なこと吹き込んでないだろうな」

「わからない」

「だよな」

どこか、悲しげで、儚くて、すぐにどこかに消えてしまいそうな
そんな印象をシャノンの表情から抱いた。

「じゃ、帰ろうぜ。陽が暮れちまうからな」

「わかった」

というか俺はなんでこんなに親しげに話してるのだろうか。まだ会って一日も経っていないというのに。これが、世話焼きと呼ばれる原因なのかもしれない。

「おい、天真。なんだそのちっこ可愛い子は？ しかも今帰るって言った……？」

やはりこの男、首を突っ込んできたか。学校でウワサになるのもイヤなので、

「あ、あんなところに紅音 俺の妹が」

「どこだっ！？」

反応が速すぎる。

「あっちにいるな」

あさつての方向を示す俺にサイカは何の疑問も持たず、

「待っててください！ 今行きます！」

ぶおおおお、という人間なら本来立てることの無いであろう効果音と、ドップラー効果によるサイカの叫びがだんだん低くなっていくのを背に俺たちは帰路に着いた。

「買い物して帰るか……。シャノンはどうしてくるか？ それとも寮に戻る？」

「買い物する」

「そうか」

寮の近くのスーパーで買い物を済ませる。シャノンはスーパーの中をきよろきよろしながら興味津々に見ていた。

「なあ、シャノン。買い物来るのって初めてなのか？」

「うん」

少々鋭い目つきをしながら言う。俺はそんなシャノンの身体を上

から下へと見て、

「少し失礼かもしれないけどさ、シャノンって、中学生？　小学生？」

「女性に年齢を聞く男はダメな証拠をさらけ出している。そして、年齢を聞かれたらは怒っていいとイサオが言っていた」

「ごふっ……！」

シャノンの頭突きが俺の鳩尾に炸裂した。俺はその場であまりの衝撃にうずくまって悶絶する。そんな小さな身体のどこにこんな力が秘められているのかは謎だ。

「あたしはアカネと同じ年齢」

師匠も変なことを吹き込むものだ。それに紅音とさっきまで一緒に色々なことを話していたらしいので、余計な知識がシャノンの頭の中に入ってしまったことだろう。まともな教育をするのは大変なのだと認識させられる。

「え……。ウソだろ……」

紅音よりも身長の高いシャノンが俺の一つ下の年齢。本当にお人形さんみたいに小さくて、身体つきもさほどグラマラスではないというのに。

俺はよろよろと立ち上がり、

「わ、悪かったよ……。いきなり歳なんか聞いたりしてごめん……。でも今度からは力加減を覚えてくれないか……」

「善処するわ」

この前思ったことを撤回するでしょう。やっぱり、こんな妹はいらない。危険である。

ただ、シャノンの表情がとても怒っているようには見えなくて、少しだけ違和感を感じた。

「シャノン、ここに来たばっかなんだからそんなに一人で勝手に出歩くなよ。迷子になってもらっちゃ困るからな」

「むむむ……。分かった」

少しだけシャノンの表情に変化が出た気がした。困ったような顔

をして言ったのだから。そして、彼女は商品を買う物がこに入れていく俺の横に並び、

「そういえば、テンシン。さっきアカネから聞いたんだけど、テンシンは『お兄ちゃん』と呼ばれるのが好きなの？」

「ふえっ！？ そんなことないさ……あはははははは」

何か口に飲み物を含んでいたら確実にマンガのように液体を盛大に嘔き出していただであろう。雑念はついさっき消したばかりのはずなのに……！

「気になっただけだから違うなら別にいい」

「あ、そ……」

とんでもないことを言うやつだ。今の発言からしてサイカが好きそうな方面の知識は無さそうだ。

買った物を済ませ、寮へと戻った。いつもなら味気ない空間なのだが、シャノンがいることで変わったような気がする、のだが、

「お前は……」

俺は部屋に入るや否や、忌々しげに呟いた。今のはシャノンに対する呟きではない。

「……何か問題でも？」

この、常識知らずの天才黒髪少女に向けて言ったのだ。今日だけで俺の前に三回姿を現している。こいつにじっとしているというのは無理な注文なのだろうか。

「で、お前は何をしに来たんだ……。まさか朝と同じ、飯を食わせるとか言っくんじゃないよな？」

「……話が早くて助かります」

「俺の食費が……。シャノンの分で大変になるって言うのに……」

シャノンは何が起きたか分かっていらず、俺の横で頭の上に？マークを浮かべている。すると、リリースは、

「……いくら？」

「え？」

「……だから食費はいくら払えばいいんですか？ おにい」

「分かった！ 飯は食わせてやるから、その先はストップ！」

人の趣味を勝手にばらされてもらっては困るのだ。これからのためにも、シャノンには極力この方面の知識を与えないように注意しないといけない。

「……じゃあ、口止め料に一つ提案があります」

「なんだ？」

他人なら知らないはずであろう、

「あなたの目を研究させてください」

俺は別にリリスの前で義眼の力を使ったりはしていないはずだ。なのに彼女どうして知っているのだ、という疑問が焦りよりも先に浮かんでくる。俺の心情を分かったように彼女は、

「あなたの眼球運動に少しだけ違和感がありました。そこから推測すると、義眼であるという事が分かります。……でもその義眼はプラスチックでもガラスでもないから興味が湧いたんです。それに両目とも機能しているようですし」

この推測力と思考力には恐れ入るものだ。さすが天才と呼ばれるだけの所以である。

「け、研究って、一体何をするおつもりなのでしょう……」

リリスは俺の一つ下の学年だが、敬語になった。俺が想像するリリスの本性は、手術台にくくりつけられて動けない俺を目の前にしてメスか何かの刃物を持ち、にやにやしながら俺の目に切り込みを入れる、そんなイメージだ。

「ただ少し見せて欲しいだけです。そのうちかいぞ レポートでも書きます」

「言いかけた言葉がとても恐ろしかったのですがそれは無視して大丈夫なのか！？」

リリスの言葉の先が俺の予想しているものではないことを切に願おう。

「大丈夫……なはずです」

「自信無さ気に言うのをやめてください……。はあ……」

俺は疲労を吐き出したいという願いから大きくため息をつく。

「分かった。俺の目は今度見せてやる。機会があればな、だから今は飯ができるまでシャノンの相手をしていてくれないか？」

シャノンだつて今日からここに住むのだから知り合いを作つておいても損は無いだろ。リリスは不思議な人間だが、同い年で女の子同士なのだから話は弾むであらう。

俺は渴いた喉を潤すために、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出して飲んでみると、

「……この子は誰ですか？ あなたの子ども？ 相手は幼馴染の天音先輩ですか？」

「ブブブッ！？」

今度こそ盛大に吹いてしまった。気管に飲んだ水が少し入り、咳き込んでしまう。

「テンシン、大丈夫？」

「……黒木さん、大丈夫ですか？」

「けほつ、けほつ……。リリス、お前はいきなりなんてことを言うんだ……」

「いえ、思ったことを口にただけですが」

「じゃあ今度から考えてから発言しような」

俺はリリスのお世話係か。シャノンとリリス二人合わせて何が悪いのか分からず、頭の上に？マークを浮かべている。

「もう大丈夫だ……。あつちに行つて休んでいいぜ。あ、手伝いとかがいらなからな」

「分かった」

「……了解」

本当に厄日というか疲れる日というか……イヤになってしまふな。こんなときは料理作つて、気を紛らわそう。

「今日はハンバーグだ」

「はんばーぐ？」

向こうにいたシャノンが聞いてくる。

「なんだ、お前ハンバーグ食ったことないのか」

こくりと頷く。俺は彼女がまともな食生活を送っているのか気になった。師匠は一体何を食べさせていたのだろうか……。

「うーん……上手く説明できないけど、まあ食べてみれば分かる」

「そうなんだ。じゃ、待ってるね」

期待には答えなければいけない。肉はお金の問題でどうすることもできない。ならば、ソースで勝負するしかない。材料には、赤ワインと、ケチャップをハンバーグを焼いた後のフライパンに入れて作る。

なぜ学生寮なのに赤ワインがあるのかは聞かないで欲しい。そうさ、料理のためだ。そういうことにしよう。

まもなくして、

「できた……」

付けあわせを作るのに少し手間取ってしまったから、時間がかかった。

「……わたしは空腹なので……いただきます」

「早っ！ いつの間に座ったんだ！？ それに勝手に食べるな。みんなで食べたほうが美味いだろ」

「……あなたの言う事にも一理ありますね。わかりました」

「シャノン、早く食べようぜ。冷めると飯が不味くなる」

「これがハンバーグ……」

目を輝かせながら、感嘆の声をあげるシャノン。本当にはじめて見たようだ。

「それじゃ、いただきます」

「い、いただきます」

「……いただきます」

三人で食べ始める。これが普通の女の子二人に挟まれて食べていたらもう昇天できるものの、天才奇人に詳細不明の少女なのでそん

なに嬉しくはないが、

(なんか……少し変わってて楽しいな……)

今までは一人だった空間が人が増えただけで、これだけ変わるものかと実感させられた。

「どうだ、シャノン、リリス。うまいか？　口に合ってれば嬉しいんだけど……」

シャノンは俺の言葉を無視して、フォークを不器用に扱ってハンバーグにかぶりついている。あとでちゃんとした食べ方を教えないといけないな。

「……おいしいです。黒木さんの料理は意外にもおいしいです」

「意外にもっていうワードが気になったけど、まあ喜んでくれればそれで良いや……おい、リリス。口にソースがついてるぞ」

ティッシュでリリスの口についたソースを拭いてやると、彼女の頬が赤くなつた。どうしてだ。俺は怒らせるようなことはしてないはずなのだが……。

「リリス、俺なんか悪いことしたか？　したなら謝るんだけど……」

「……もういいですっ」

ぷいっと横を向くリリス。乙女心は複雑なんだよ、と凜が昔言っていたのだが、そのようだ。リリスが怒った理由が分からない。

「おい、シャノン。お前食い方が違うぞ。こう食べるんだ」

「イヤだ。あたしはこれで食べるのっ！」

「ダメだ。これから一緒に暮らすんだからちゃんと食事のマナーは覚えないとダメだぞ」

「イヤだったらイヤだ！」

誰に似たんだこの強情さは。おそらく師匠だろう。師匠はクールに見えても案外強情だったりするのだ。師匠と一緒にいることでその強情さが伝染してしまったようだ。

「ダメだったらダメだ！　くそう、俺が直々に教えてやる」

フォークを左手で持たせ、ナイフを右手に持たせる。じかに彼女の肌に触ると、とてもすべすべしていて、手は小さい。こうして手

を握っているとやはり女の子なのだ、と意識してしまう。

「これで、良い。次からはこうやって食べるんだぞ、分かったか？」
「うん」

シャノンはいきりにナイフばかりを見つめていた。ナイフも初めて見るのだろうか。それともただ食用ナイフに興味があるからなのかは分からなかった。

「どうした、シャノン？　なんかボーっとしてるぞ」
「ううん、何でもない」

順調に食べ進めるシャノン。飲み込みが速くて助かる。

「……黒木さん、あなたの鼻の下が少し伸びてるように感じるのはわたしの気のせいですか？」

「そ、そんなことないぞ！」

「……それに一緒に暮らすというのはどういうことですか？　天音先輩が怒りますよ？　不倫ですか？」

「どれも違う！　お前、凜とはただの幼馴染なんだ、勘違いするなよ……」

「……あなたはある意味においてとてもすごい感性の持ち主ですよ」
「よく分かりますが……。シャノンは事情があって預かってるだけだ」
「なんかすごいジト目で見られてるが気にしないでおこー。後輩にこんな目をされる先輩というのもおかしな光景である。」

「……ごちそうさまでした。わたしはではこれにて。それと黒木さん……襲ってはいけませんよ？」

「信用ないツスね、俺！　襲うワケないだろうが！」

「……まあ良いです。それではさようなら」

「ああ……。またな、リリース」

彼女はそう言うと言配を消したのだった。気が付くとシャノンが後ろに立っていた。

「ねえ、テンシン。あのひとの会話で一体何を話していたの？　分からなかったんだけど、襲うってどういうこと？」

「い、いいや！　知らなくていい、知らないならいいんだ！」

「ふうん……」

そんな純粋な少女を不純な知識からごまかすために俺は台所へ向かい、洗い物をはじめのだった。これから大変なことになりそうだ。

「ふう……。ってあれ？」

いつの間にかシャノンソファはソファで規則正しい寝息を立てていた。うずくまるように横になっていて、ソファの半分も占めていない。とても小さくて、不思議な雰囲気を持つシャノン。

「まったく……。しょうがないやつだな」

彼女をこうして見ていると自然と笑みがこぼれてしまう。俺は彼女に布団をかけてやり、眠らせておくことにした。

「そういえば……シャノンの着替えってどうしよう……」

男が女性の下着を買いに行くという絶対にレジで気まづくなってしまうような選択肢はできるだけ避けたい。否、避けなければいけない。となると、どうしたものか、と思案していると、ドン！と玄関のほうで大きな物音がした。

「なんだ……？」

扉を開けると、ピンク色の可愛いスニーカーが俺の玄関の前に置かれていた。

『雨宮 功 より』

スニーカーにはそう書かれていた。おそらくシャノンの着替えやら何やらが入っているのだろう。見透かしたかのようなタイミングで置いていつてくれる人だ。

「問題は解決、と」

スーツを部屋の中に入れ、俺は一安心すると、一日の日課になっていることをするためにもう一度外に出る。

「すつ……。はあ……」

まず、大きく深呼吸。目を瞑り、右目に意識を集中させる。見る
ことだけを。全てのものを捉えるかのようなイメージ。そうして、
再び、目をゆっくりと開く。

「ん……」

ひとまず成功したようだ。義眼を動体視力を上げるモードにする
ためには意識しなければできない。それはとても難しいことなのだ。
つけてから半年はこのモードに移行できなかった。故に、毎日一回、
こうしてモードを切り替える練習をしているのだ。

「少し、試してみるか……」

ナノマシンは眼球運動を増幅、拡張させるものだ。視力とて例外
ではないというのが俺の推理である。そして、俺が実践しようとし
ているのは視力の強化だ。現状では最高で3・0まで上がる。

目を瞑る。意識を集中ではなく、拡大する。そしてイメージする
のは望遠鏡。どこまでもどこまでも見えるような一枚のレンズを頭
の中で作り上げる。そのレンズは俺の義眼。

「くっ……」

再び目を開ける。あまり進歩はしてないようだった。

「はあ……。しょうがないか。今度この理論が正しいかどうか師匠
に聞かなきゃな……」

俺は少し鬱になる。そんな時に、向こうのビルから俺の頭に亜音
速で向かってくる物体

（銃弾！？）

動体視力は上がっても運動能力が上がったわけではないので、全
力で伏せる。すると、さっきまで俺の頭があつた場所に銃弾が通り
過ぎていった。動体視力を上げていなかったらまず死んでいただろ
う。

「はあ、はあ……。なんだっていうんだ……！」

壁には銃弾がめり込んでいた。あれを頭に受けたら、ここで俺は
血と脳みそをぶちまけて倒れているところだった。でもなんで俺が
殺されかけなきゃいけないんだ。漫画の世界ではないのだし、日本

でライフルの一つや二つをぶっ放したらそこへすぐにも警察が来たっておかしくはない。

俺はそう思って、部屋に戻ろうとしたが、足がすくんでしばらくは動けそうになかった。今日はいろんな意味で眠れなさそうだ。

ボーイミーツガール(ズ)

チュン……チュン……。

「あ……うつ……」

スズメの声で起きられるなんてなんと清々しいことだろうか。いや、実際寝たのは一時間前だが。睡眠時間一時間のせいで思考がおかしくなっているのかもしれないな。とにかく布団から脱出して、朝飯を作らないと。

寝られなかった理由は二つ。第一にシャノンが同じ部屋にいること。相手は女の子なので、思春期真っ盛りの男が意識してしまうのもしょうがないことだ。第二に昨日の夜のこと。いきなり、銃で狙撃されて安心して眠れるわけもないからだ。

昨日は限界時間まで義眼の能力を使っていたので、頭がズキズキと痛む。フィードバックは抑えられないものなのか。

「うつ……。頭痛え……。シャノンはまだ起きてないか」

彼女は寝相が悪いようだが、ソファからずり落ちたりはしていない。大の字になって、顔が半分ずり落ちてるが、足をソファの背もたれ部分にかけて器用に落ちないようにしているのだが

(やべえ……。このままだと見える、な)

彼女の服装はワンピースなので、足を盛大に開くと見えてしまう。(落ちて着け俺……！ 昨日は何もなかったじゃないか……。平常心だ平常心、諸行無常有為転変、羊がそこに約一匹ほど……。よし。落ち着いてきたな)

なんとか無防備なシャノンという難関をくぐり抜け、台所へ移動する。今日の朝飯はハムの賞味期限が明日なのでサンドイッチにすることを決めた。

俺は朝の占いだけは欠かさず見ている。日曜日であろうとあのテレビの占いはやるのだ。占いを全て信じてるわけではないが、小さい頃によくそのコーナーを見ていたので習慣になってしまったのだ。

テレビをつけると女子アナウンサーの声が出て、

『八位は、かに座のあなた！ 今日新しい出会いがあるかも。でも周りに注意。ラッキーアイテムは巫女服、誰かに親切に接すると幸せな出来事が起こるかも！』

昨日よりはマシな順位だ。昨日は本当に当たってたからな。飯をたかられるわ、女の子を預かれと命令されるわ、銃弾でねらわれるわ、と本当に災厄が降りかかってきたのだから。でも、巫女服って

……。

「きやう……ん？」

今の小動物が発するような声はなんだ。びつくりして、包丁がずれそうになったじゃないか。

「シャノン、起きたのか？ おはよう。朝飯ならもうすぐできるぞ」

「ふえ？」

寝ぼけてるような声。

「朝飯だ、朝飯。今日はハムサンドだからな。手抜きとか言わないでくれよ」

「あさ……」

「そうだ、朝の八時だ。俺は今日寝不足だからあんま苦労かけさせるな……ってシャノン？ そっちには何もなし」

ドスン！ 俺の声も届かず、シャノンはそのまま壁に激突。寝ぼけてソファからそのまま前進したからだ。

「痛い……」

「おいおい、大丈夫か？ 怪我とかしてないか？ 痛みが引いたらすぐに言っただぞ」

「……わかった」

痛いからなのか、彼女は若干仏頂面である。朝は苦手なのだろうか。

「ああそうだ、シャノン。師匠からお前の荷物とかが届いたぞ。玄関先においてあるスニーカーがそれだから、取ってきてくれないか？」

「あア？」

今の声の主はシャノン、なんだよな？ ものすごい凄んだ声だったか、大丈夫なのだろうか。

「シャノン、喉も打ったんじゃないのか？ 声がおかしいぞ」

「どこもおかしくなんてない。触らないで。痴れ者くせ者無礼者」

「……シャノン？ すごく怖いんですけど……大丈夫か？」

一体なんだ……！？ この人格の変わりようは！ シャノンって多重人格者なのか！？ 俺がそう啞然していると、

「何よ、その文句がありそうな目は」

「い、いやいや、何でもないッス」

「そう」

彼女の周りに何とも言わせないオーラが漂っている。まさか、シャノンは朝だから不機嫌なのか……。

「シャノン？ なんでそんなに不機嫌なんだ？」

「ん？ 昨日は様子見よ、様子見。でまあ、普通の人間だったから警戒する必要もないかな、と思ってね」

「こ、怖え……」

「イサオに言われたの。人間を判断しなさいって。だからそうしてみたの……というか荷物とって来なきゃ」

「今、ハムサンドができるからもう少し待ってろ。師匠……シャノンにいったい何を教えるつもりなんだ？」

すごく謎である。本当にあの人の考えることはわからないのだ。考えながらも、今日の朝飯が出来た。休日はゆっくりできて実にいい。

「今日はこの後近くの交番にでも行くか……シャノンはどうする？」
「ううん……」

その声はどこから出ているんだ。不思議すぎる声だ。

「……一応ついて行く。それと今日の夕食はハンバーグが良い」

「そんなに気に入ったのかよ、ハンバーグ……今日は別のものだ」
するとシャノンは、ムスッ。頬をリスのように膨らませてむくれ

ていた。実に微笑ましい光景である。

「でもテンシンなぜ交番に行くの？ 落し物とかしたの？」

「ん？ えっと……」

昨日の夜のことをシャノンに聞かせて不安にさせては彼女が安心して夜に眠れなくなってしまう。あの寝顔を壊すわけにはいけない。そう思い、

「ああ、落し物をしたんだ。昨日犬に取られちゃってさ……まったくあの犬どこ行っただろうな」

「ふうん」

彼女はあまり興味がなさそうに聞き流した。俺が交番に行く理由は当然昨日の夜の件のことについてだ。

やはり、このままというのも安心しきれず、結局聞きに行くことにしたのだ。

「食い終わったし、さっさと行くか」

そう呟いて、俺は玄関を抜けた。

抜けた玄関先に銃弾がめり込んだ跡はあったのだが、銃弾はどこにも、なかった。

「え？ それは本当ですか？」

「ええ、近頃そんな事件は起きていませんが……でもただこの頃行方不明の搜索届けが多いことはありますが……」

「分かりました……手間を取らせて申し訳ありません」

昨日の夜に発砲事件などがないか聞いてみたが、警官にはない、と言われてしまった。

「一体どうなってるんだ……」

行方不明事件か。シャノンがそういう目にあわないようにしてやらないといけないな。

俺は交番から出て、外に待たせていたシャノンと帰るつもりだった。

たのだが、

「うおっ」

「きゃっ………すいません」

人とぶつかってしまっただけ。しかも相手は女の子だ。顔から見て、歳は俺とさほど変わらないように見える。そして俺は違和感を感じた。

「あいたたた………」

「大丈夫？」

俺はその少女に手を差し伸べる。彼女の髪はストレートで毛先に少しパーマがかかっている。そして彼女の服装が、巫女服だったのだ。占いのラッキーアイテムなのだが……なぜ巫女服を着ているんだ？

「あ、ありがとう………」

「どういたしまして」

その少女は何だかモジモジして、この場から離れようとしなかった。その空気に乗せられたかのように俺もその場から離れられなかった。しかしなぜ、巫女服なんだ？ コスプレというやつか。サイカが見たら狂喜乱舞して踊り狂ってしまいそうなのだが。

「あ！ そうだ！ そのお二人さん、一つお尋ねしたいことがあるんだけど」

シャノンと俺はそろっては首をかしげた。

「な、なんででしょうか？」

「ずい、と顔を近づけられる。香水をつけているのか、甘い香りがした。」

「ここはどこ？」

「え？」

「いやー、新横浜に行こうとしたらどこにも新横浜、っていう地名がなくて困ってたの。だからどうやって行けばいいか教えてくれると嬉しいなあって」

巫女服で新横浜。一体何の用があるんだ。気になるが、触れない

でおい。

「えと、ここは横浜ですよ？ 新横浜はもつと遠く……」

「うんうんそうなのか……ってええ！？ ということはわたし間違ってたの！？」

ノリツツコミが炸裂した。しかも手をばたつかせてあたふたしている。

「電車で行けば良いんじゃない……」

別に巫女服で電車に乗っても犯罪というわけでも無さそうだが。

「そうだ！ その手があった！ じゃ、君ありがとうね！」

ビューン、という効果音が出そうな走り方で俺の目の前から立ち去っていった。嵐のような人だった。そういう点では師匠と似てるかもしれない。

「ねえ、テンシン……今の何？」

「俺にも分かんねえや」

シャノンはいぶかしげな表情で俺に聞くのだった。

「シャノン、どっか行きたいところがあるなら連れて行ってやるけど……ってあれ？」

謎の女性が通り過ぎて行ったあと、俺たちは適当に街をぶらついてたわけなのだが、さっきまで横にいたはずのシャノンがいなくなっていた。

「うわぁ……二日連続で迷子搜索かよ……さてどこに行ったのか」

さほど遠くに入っていないはずだからすぐに見つけられると思うのだが、彼女はいくアテもなく歩いてそうなので探しにくい。さらに近所では行方不明事件が多いって聞いてしまったのですこし不安になる。俺がそう途方にくれていると、

「あー！ さっきの子だぁ！」

この声は……

「あ、新横浜に行こうとしてた……」

「ゴメン、名乗ってなかったね。わたし、中松沙雪。なかまつ さゆき 職業は巫女です」

今は着替えているようで どこで着替えたんだという疑問は無視して デニムに黒のジャケット、足の露出の多いファッション。モデル勝りの足の長さだ。気になったのは右肩に包帯らしき白い布が巻いてあったことだ。包帯じゃなくてさらし巻きなのだろうか。まあ、仕事を持っているということは少なくとも俺よりは年上なのか。というか職業のことは最初から分かっている。

「は、はあ……。俺は黒木天真」

この人、見る限り最寄りの駅にたどり着けなかったようだ。なぜならここは駅とは反対方向にある場所なのだから。

「そつえばさつきキミの横にいたお人形さんみたいな子、いたよ？ 迷子なの？」

「え、どこですか？」

「こつちこつち。わたしの勤め先の神社の近くにいたの」

こんな所に神社なんかあったか？ 俺は覚えていないが、中松さんが言うにはあるのだろう。というかこのこと知ってたんだな。

「あ、シャノン……ッ!？」

鳥居にシャノンはもたれかかっているのだが、周りにいる人間がおかしい。黒ずくめのスーツにサングラス。夏にスーツを着ているという点とさらに身体つきがいいという点。そして、シャノンを囲むようにその黒ずくめたちが立っているのだ。数は七人。

「中松さん、ここで待っていてください。なんだか妙です」

「え……うん」

目を瞑り、動体視力を十倍に上げる。黒ずくめに接触するのは危険だ。行方不明事件に關与しているのかもしれない。シャノンを連れてさつさと帰るほうが無難であろう。

「シャノン」

「あ、テンシン。迷子にならないでよ……あたしが探しちゃったじゃない」

シャノンの認識だと、自分は迷子になっていないようだ。

「さ、帰ろうぜ。もうすぐ昼飯の時間だからな」

「うん」

周りの黒ずくめたちは……微動だにしていない。動体視力だけでなく、意識しないでも視力が上がるようだ。一人の黒ずくめが目だけでこちらを見ているのが分かったのだから。

「じゃ、行くか」

シャノンの手を引いて、神社から立ち去った。

「ねえ、テンシン……」

「ああ、分かってる」

なぜシャノンが俺に聞いたのか理由はただ一つ。

「うーん……」

俺のとなりにいる中松さんである。

「あの……中松さん？」

「あー、中松さんなんて堅苦しい呼び方じゃなくて沙雪さんで良いよ、少年」

「えーと……沙雪さん？ 何で俺たちのあとをつけてくるんでしょうか？」

「だって！ 君が電車に乗れば、新横浜に行けるって行ったんじゃない！ 結局駅なんてなかったんだから、責任とってよ！」

「ええええ……」

なんと理不尽な。まあそれはそうだろう。沙雪さんは駅と反対方向を歩いていたのだから、たどり着くはずもない。彼女はよくある方向音痴の持ち主なのだろうか。

「それにしても……その子、可愛いねえ……抱きしめて持って帰りたいなっちゃん」

「うっ……」

シャノンが怯えている。沙雪さんみたいな人は苦手なのだろうか。

「でさ、黒木くん。駅はどっち？ わたし的にはあっちだと思うんだ！」

「というか沙雪さん、あの神社の巫女さんなんですよ？ だって道も」

「え！？ キミ、もしかしてオタク、っていう子？ 巫女服なら今すぐにでも見せてあげるよっ」

「人の話を最後まで聞いてください」

「どうしてキミまであの人と同じこと言うかな……。わたし人の話はちゃんと聞くようにしてるよう……」

「だとしたらこの人には常識というものを教えたほうが良さそうなのだが、手間は取りたくないのですささと駅の場所を教えようとして、

「ここから真つすぐ行くと大きな通りに出ます。出たら右に道なりに進めば駅に着きます」

「はい」

「本当に分かったのだろうか、と心配してしまう。なんだか……紅音の世話をしているみたいに思えてくるのだ。

「なんなら一緒にいて行きましようか？」

「ありがと。じゃあ途中まで良いよっ」

「分かりました」

結局、途中までついて行くこととなった。

「ねえ、テンシン」

「なんだ？」

「テンシンで女たらし、という人種だったりするの？」

「なんでそんなこと知ってるのかな……。俺は女たらしといえるほどモテないし、妹系な女の子は寄り付いて来ないんだ」

「妹系……？ それでも、昨日から見て友達に女が多いような気がする。男で親しそうなのはあの金髪だけだった」

「つい口が滑ってしまった。余談だが、中学生の時にも凜に同じことを言われたような気がする。『八方美人とはまさに天真のことよ

ね！ 女の子連れまわしてそんなに気持ちいいのかしら！ 少しは直したら？」と、罵倒を浴びせられた。

サイカはなんとなく気が合うから友達なわけなのだ。

「これもイサオが教えてくれた」

「師匠に今度会ったら、少し説教しておこう。シャノンに余計な知識を増やすのはやめろって」

「でもイサオは、これは一般常識だぞ、って教えてくれたよ？」

「ぐぬぬぬ……ってあれ？ 沙雪さん？」

いない。ついさっきまで俺の横にいたのに。どうしてこう人がいなくなるんだ。

「天真？ 何してるの？」

「凜！ ちょうどいいところに！ この子をしばらく見ていてくれ！」

すぐにも探さないと、あの人すぐ駅から離れてしまいそうだったので、走って探す。明らかに怪しい建物と建物のあいだに小さな通りがあったので、そこに入ったのだろう。

「ちよつ、天真！ 待ってよ！ ってもう行っちゃったし……しよ
うがない、か」

「……？」

「この子かしら……」

入った裏通り文字通り太陽の当たっていない地球の裏側がごとく、太陽光が建物に隠れて薄暗くどこか不気味さを感じさせる空間だった。

「ホントに沙雪さん、どこ行っただ……探すのは面倒だつていうのに」

さっきから走っているが、こんなにこの建物って長かったのか？

裏通りつていうと意外と短いイメージがあるんだが……

「あわわわ……」

薄暗くてよく見えないが、あれはおそらく沙雪さんだろう。声と雰囲気で彼女だと分かる。

「沙雪さん」

「うきや!？」

「そんな子ザルみたいな声出さないで下さいよ……離れたらダメでしょう、あなた方向音痴なんですから」

「ちっ、違うもん! わたし方向音痴じゃないもん! 楽しそうだったからここに入っただけだもん」

子供ですか、あなたは。まあ、無事に越したことはないのですさとこの人を連れ戻してシャノンと合流しなければいけないし、凜に何を言われても大丈夫なように心の準備をしておかなければ。

「さっさと、行きましょう。シャノンたちも待つてるんですから」

「黒木くん」

「はい?」

「手、つないで」

「別にいいですけど……なんですか? 子供じゃあるまいし」

「理由なんかはどうでもいいですよ。あ、でも、暗い道が怖いわけなんてないんだよ?」

薄暗いから沙雪さんの表情はあまり見えないが、今の表情を見ればなら良いな、と俺は反射的に思ってしまったのである。

なんだかおかしくて自然に笑いがこみあげてきたので、少し笑って俺はうなずいた。素直にそう言えいいものを、と女の子らしさを見せた沙雪さんへ心の中でばやいた。

つないだ手の感触は懐かしさを感じさせ、柔らかい肌のすべすべした感触に俺は不覚にもドキッとさせられてしまったのであった。手をつないだまましばらく歩くともとの通りに出た。

「あーら? 天真。おかえりなさい」

「げっ、凜……」

「人を見た瞬間にげっ、ってどれだけ失礼なの！勝手にシャノンちゃんをわたしに押し付けて！拳句の果てには女の子と手つないで帰ってくる！」

「こ、これには深あいワケがありましてですね……」

「問答無用言語道断！シャノンちゃん、こういう男にだけはついて行っちゃダメよ？」

「分かった。ありがとう、リン」

凜とシャノンはすでに仲良くなっていたようでとても良いことなのだが、目の前の凜をどうにかしないと俺の命までもが脅かされるハメになってしまう。

「いやあ……シャノンと仲が良さそうで何よりだ」

「ふん！天真なんかもう知らない！シャノンちゃん、行きましょ」

シャノンは凜に手なずけられたかのように彼女のあとをついて行ったのだった。なんともむなし気持ちになる。俺の横には方向音痴のドジっ子っぽい沙雪さんがいるだけだ。こうなったら最後までついて行くことにしようか。

「あら。フラれちゃったねえ……まあ、そんなこともあるよつ！青春なんてまだまだこれからさ、少年！」

「年上からの教訓、ありがたく頂戴します……」

「どうするの？あの子たち追いかけて行ったほうがいいんじゃない？わたしなら大丈夫！」

「あなたはあきらかに大丈夫じゃないです。まあ、シャノンの面倒は凜がしばらくは見てくれそうだし、沙雪さんについていきますよ」

「おおー！さすが女たらし！」

「違いよ！」

この人と会話すると疲れる。ある意味、リリースと共通する点があるようにも感じられる。

「えと、駅まででしたよね？じゃあ、そこまで案内しますよ。沙雪さん、三歳児同然ですから、目が離せないんです」

「わたしってそういう認識されてたの……？」

紅音が犬だとすれば、沙雪さんはさっき言ったように三歳児から幼稚園児のどれかではないだろうか。その時期の子どもはたいいどこかを駆けずり回っているものだ。公園とかによくいる子どもたちの中に混じれそうな気がする。

「こっちですよ」

両手を横に広げて、とててと近づいてくる。

「ちよつと唐突なこと聞くけどいいかな？」

「なんです？」

「雨宮功博士って知ってる？ 知ってる人は知ってるんだけど……知ってたら教えて欲しいな」

「師匠？ 沙雪さん、師匠のこと知ってるんですか……あの人一体何してるんだ……」

「知らないんなら良いの。わたしと雨宮博士は私が学生時代の人に一時期、一緒に研究をしたことがあるの。人間について、ね」

そこで彼女は俺に始めて不敵な微笑を向けた。

「難しいことはよく分からないんだけど……師匠ってすごいんですか？ 俺、あの人のことあんまり知らなくて」

「そうよねー。雨宮博士ってばいつもはぐらかしてばかりなんだもん！ そんなとこ無きゃカッコいい人なんだけどね、それに頭の中で何考えてるか分からないんだもの」

彼女との意外な共通点が見つかった。師匠の知り合いだとは。巫女さんでも学生時代はそんなこともしていたのか。

「そういえば、巫女さんの仕事してるだけで食っていけるもんなんですか？」

「そんなわけないよお。アルバイトしてるね。占い師とか、コンビニだったりするな。でも一番きついのは占い師だね、朝早すぎだから」

俺にはただ一つ、もしかして、という疑問と期待が浮かんた。

「もしかして、朝八時くらいにやってる星座占いって……」

「あ、それたぶんわたしのだ」

「うわあ……」

なんかすごく妙な縁だ。それにしても、巫女さんって占いもできるのか。万能だな。俺の知識だと巫女はお祓い棒みたいなものを持って舞踊するだけかと思っていたのだ。

そうこうしてるうちに駅の前に着いた。ここまで来れば大丈夫だろう。

「じゃあ、俺はこれで」

「うん、ありがとうね！ 黒木くんっ、またどこかで！」

そう言い残して彼女はまた嵐のように去っていくのだった。

台風一過。嵐が過ぎればしばらくは晴れという名の幸運が続くものだと俺は今このときまで勘違いしていた。沙雪さんという嵐の後にはさらに別の嵐が俺に舞い降りたのだ。俺は今寮の自分の部屋に帰っているのだが、背筋をぴんと立てて正座中なのである。

「天真？ 聞いている！？ 聞いてなかったでしょっ」

「そ、そんなことないですよ！ 聞いてました！」

シャノンが日本茶をすすっている横で俺は説教という名の言葉の嵐を凜にぶつけられていた。

「ウソね。顔にそう書いてあるもの。昔からそうだったわよね！」

他の女の子の話は聞いてもわたしの話は聞かなかったことだったあるし！」

「俺は聖徳太子じゃないんだ…… 限度があるだろう」

「そのときの状況説明をしたほうが良いかしら？」

怪しげな笑み。そこには俺に対する憎悪の念がこめられているような気がした。

「いえ、遠慮します」

「というか、二日連続で押し付けしてるじゃない！ 昨日はサイカくんを押し付けようとしたし！」

あれは面白半分だったな。なんか俺、糾弾されすぎなような気がする。

「でも、凜。いつそのこと俺のことをそんなに気にかけなくて良いんじゃないのか？ 無視しろ、ってことじゃなくてさ」

そう言ったあと凜は癖の手いじりをおどおどした様子で始めた。

俺が未だに分かっていないのがこの癖が発動するタイミングだ。

「で、でも、そういうわけには、いかないし？ ほら、やっぱり天真つてさ、放っておくと、その、色々と……」

「お前は世話焼き女房かってんだ」

「によ、女房っ！？」

彼女は瞬間で顔を真っ赤にし、とっさに掴んだイスがへこんだ。

これ、ある一種の芸じゃないか？ 並みのバーベル上げの選手よりは力があると思われる。

「リン、顔が赤いよ？ 日本茶が熱かったの？」

「そ、そういうわけじゃないの！ オホホホ」

「その笑顔、なんだかとても不自然で逆に怖いんだがな……」

「リンの顔が赤い理由が分からないの。テンシン、教えて」

「いや、俺も分からない。なあ凜、なんでそんなに顔赤いんだ？

お前まさか熱でもあるんじゃない……」

凜のおでこに手をつけると至って普通の体温だ。熱は無いらしいが……。

「……！ ツ……！？」

「どうしたんだ凜？ さつきから大人しいけど……」

「あわわわ！ な、なんでもないっ！ は、話が逸れてるじゃない！」

ほかほか、という効果音が一番しっくり来るような強さで俺の胸を殴りつけてくる凜。どうしたんだ、凜はたしか結構な怪力だったのはずなのにどうしてこんな弱体化しているんだ？ 弱体化させる方法があるなら教えて欲しいものだ。

「このっ、バカ」

女の子最大の武器、上目遣い。不覚にも俺の心臓がドクン、と大きく波打ってしまった。

「ま、まあ、そのなんだ……もう説教はこれくらいで良いだろ？ 凜の休みをこれ以上つぶすのも気が引けるというかなんというか……」

「そうねっ、しょうがないわね。あ、でも帰る前にシャノンちゃんに渡したいものがあるんだけど……天真は出ててくれない？」

シャノンと凜は意気投合しているようだし、ガールズトークみたいな時間を取らせてやったほうが良いだろう。シャノンに少しでも早くここに慣れてもらうことにもなる。

「まあ、良いけどさ。俺が戻ってくるまでは家にいてくれないか？

俺、少し買い物あるし」

「オッケー。じゃ行つてらっしゃい」

凜がシャノンに秘密で渡したいものって何なのだろうと密かに考えながら俺は外へと出た。

俺はスーパーのある駅周辺とは反対方向へと足を向けた。買い物、というのはウソで、俺の本当の目的はもう一度あの神社に行くことだった。

目的はあそこに常時黒ずくめのスーツの人間がいるのかどうかを確かめるためだ。あの光景は奇妙だった。まるでシャノンを監視しているように見えて、それを払拭したかったのだ。

「やっぱりいないか……」

神社の周りをざっと見ても黒ずくめのスーツの人間など一人もいなかった。この見解は俺の自意識過剰か？ たまたま黒いスーツの人が休んでいたからかもしれない。銃弾なんか飛んできたから少しおかしくなっていたのだろう。

俺は目頭を押さえる。

「帰るか……」

帰り道、リリースと会った。実験台にさせられた。
唐突だが、事実である。こんな感じの会話だった。

「あ、黒木さん。ちょうどいい所に」

「ん？ リリースか」

「これを受け取ってください」

この言葉は別のシチュエーションで言われたものだな、と思いつつリリースに渡された箱を受け取る。

「開けていいのか？」

「どうぞ」

中から出てきたのは革製のような黒い手袋だった。

「これは？」

「試作品の筋力増大装置です。手にはめなくてもいいですからとにかく常に身に付けてください。あなたは実験どうぶ……いえ、実験台なんですから」

そう告げると俺の目の前からいつの間にか消えていた。

ということなのだ。説明不足ではないかと言われるかもしれないが事実なのだからしょうがない。これ以上でもこれ以下でもないのだ。天才奇人には困まらされるばかりである。

ひとまずこの正体不明の黒手袋をポケットの中にねじ込み、寮へと帰ってるわけなのだ。それにしても俺ってよく試作品を掴まされるな……試作品ロボットとも思われているのだろうか。

「なあ、その兄ちゃん」

ふと横から声をかけられた。声の主はスキンヘッドで、少し浅黒い肌には師匠以上の身体つきの　まあ一言で言ってしまうとゴツい男だった。

彼からは強者のオーラが出ているような感じがする。俺はその雰囲気を押されながらも答える。

「な、なんですか？」

「ちよつとこつち来てくんねえ？ 聞きてえことがあんだよ」

来なかつたら脅されると思ったので、彼の言うことに一応従った。体勢を作っていない状態で殴り合いをするには分が悪いからだ。彼に案内されるたのは沙雪さんと通ったところに似てる、裏通りだった。唯一違うのはそれほど暗くないという点だ。

「こ、こんなところで一体何を……」

「まあ、そんな警戒すんなって。俺は来栖だ。聞きたいことはだな…… お前さん、雨宮功^{くわみ}つて男を知ってるよな？ 今、そいつはどこだ？」

「知らないつす。俺はあの人のことをあまり知りませんから」

そう答えた瞬間、来栖の目つきが鋭くなった。俺は危険を感じ、右目を瞑る。

「いやさ、あんま強引な手は使いたくねえんだ…… だから 答えてくんねえかな？」

「ホントに知らないんですつてば」

瞬間、来栖の巨体からフックが放たれたが、俺はそれを最低限の動きでかわした。ただ、普通の人間より拳の速度が速い！

「上から半殺しにしても聞き出せって言われてんのよ。だからさあ…… 加減できねえんだ」

「上つてなんだよ！？ 一体俺が何したつてんだ！ 俺に何の用がある！？」

再度、フック。俺の鼻の数センチ先で強靱な拳がビュン、という音を立てて空を裂く。俺はバックステップで来栖と距離をとる。殴り合いは慣れているが相手の格が違いすぎる。一発でも喰らったら即アウトだろう。

しかし、なぜ殴打なのだ？ 俺から苦痛によって師匠のことを聞きたければ凶器でも使えばいいのに。

「まあ、理解し始めてるだろうけどよお、あんま騒ぎを起こしたくねえんだ。外傷も目立たないようにしろつて」

確かに殴打なら服の内側に青アザを作れるから目立ちはしない。

「でもさ、俺が警察に通報するとしたら？」

「あそこに捕まるほど俺たちはへましねえよ」

俺、たち　？　複数人いるってことか？　一体何の目的で？

師匠に何が？

数々の疑問が頭の中で駆け巡る。こんなときでも頭がこんなに早く回るなんて自分でも驚きだ。しかし、この来栖とかいう男、よくしゃべるな。探りを入れるのにはもってこいの人物なのかもしれない。

「はあっ……はあっ……！　師匠に何の用があるんだ？」

「ちよいとあいつは上ともめたらしくてな、抜けたんだよ。『研究者』を」

「抜けた？　『研究者』？」

「おつとまずい。これ以上しゃべる義理はねえ」

右アッパーが放たれるが、かわす。かわせたのだが拳速がどんどん速くなっているのだ。さすがに最低限の動きで回避を図るのは難しくなってきた。

下手に攻めたらカウンターを喰らうし、この義眼の駆動時間以内に倒さなければ半殺し確定なのだ。どうする。ギリギリの活路を考えろ。次々と来栖の巨体から放たれる拳を回避しながら、考える。防戦一方では時間と体力だけを削るだけなのだ。

わらにもすがる思いで、俺は手袋を左手にはめた。ウェットスーツのように肌にぴったりする構造のものだった。来栖はそれをはめたことスキを突いて蹴りを放つ。これは回避しきれない　！

「とつた！」

「ッ！？」

ドスッ！　鈍い音が鳴る。かろうじてガードはできたものの、代償にした右腕が軋み、悲鳴を上げる。蹴りは拳よりはるかに威力が高いというが、こんなものを正面から受けたら最悪一発で気絶するほどの威力だった。

体勢が崩れた俺に追撃を加えるべく、来栖が距離を詰める。おそらくこの動きはボクシングで培われたものだ。

それは暴力の嵐だった。やはり、蹴りは苦手なのか拳で俺のガードしてる両手を打つ。このままでは腕が持たなくなる。ただでさえ蹴りによるダメージが大きいのだ。

「がんばってんじゃねえか！ あア！？」

「ちつくしょおおおおおおおおおッ！」

絶体絶命。その言葉が相応しい状況だった。玉碎覚悟で俺は手袋をはめた左の拳を来栖の拳に叩きつける！

「ッ！」

来栖の表情が苦痛の色に歪んだ。俺はそんなに身体を鍛えてるわけじゃない。せいぜい高校生の筋肉より少しだけ筋肉がついているような身体だ。どうやらこの手袋はホントに俺の筋肉を増大させてくれるらしい。そして、俺の左手には反動があまり無い。

あとでリリースにご褒美をあげなければいけなくなったな。

（いけるぜ、この手袋！ これならギリギリの活路を見出せる！）

両手にはめたいところだが、そこまでの余裕は無い。右腕で防御体制をとりつつ、左手でほんの少しのスキを突いて攻撃するのが得策だ。

「良い拳じゃねえかよオ……俄然やる気が出るってもんだな。

こっちも本気でやらせてもらおうか」

来栖がそう言った瞬間、彼の全身の筋肉が一回り太くなった。その太さはまるで丸太くらいにまで膨れていった。どういう原理なんだ？ 筋力を増大させる器具なんて聞いたことが無い。まあ、俺のはめてる手袋はそれらしいのだが。

（くそ！ あと駆動時間はあと何分残ってやがる！？ 時間はかけていられないんだ！）

「ハアッ！」

来栖のまるでゴリラのようにまでなつた肉体が俺に襲い掛かる。転がるようにかわすと、彼は俺の後ろにあったコンクリートの壁に

小さな亀裂を入れた。速すぎて、この義眼でも少しブレが生じた。

「なんなんだよ！ お前は！」

「昨日の一番が今日の一番だとは限らねえ。科学においても同じことが言えんだよ」

「何が言いたい！？」

「それが分からないならお前はここで情報だけ吐いて消えちまいな！」

スキができなくなった。さっきまでは五発に一発は大きく振りかぶっていたのに……！ スキ 相手が大きい力を出す瞬間を狙えれば！

「よく持ちこたえるなあ！ 久しぶりに楽しいぜえ！」

高速の拳を回避しつつ、俺は頭を巡らせてそして、たった一つの回答にたどり着いた。

「オラア！ もらった！」

「ぐツ！？」

回避しきれない拳を受けきれず、体勢を崩す。

「終わりだ！」

そこで来栖は俺との決着をつけるべく、大きく右腕をふりかぶる！

これで俺の勝利は決定した。

「なっ！？」

来栖が驚嘆の声を上げる。

なぜなら、俺が整えることのできないはずの体勢を整えていたからだ。

来栖は典型的な真っ直ぐで正々堂々勝負する男だ。俺に対してわざわざ警告はしたし、筋肉を何らかの作用により増幅させるという

秘策を最後まで取っておく点。この二点からだいたい的人格を割り出せる。こういう人間はたいいてい最後の一撃、というものをカッコよく、盛大に終わらせようとする傾向がある。それは今まで経験してきたケンカで分かったものだ。

ならその場面を誘導させてしまえば良い。拳をわざと受け、わざとよろけたように見せる。そうすれば来栖は必殺の拳を出してくるはずだ。一種賭けではあったがこれしかギリギリの活路が見出せなかったのだ。

「ギリギリの活路は見出した！ これで終わりだ！」

俺は来るすの懷に潜り込み、左拳を全力で彼の顔に打ち込む！

「ッ！？ がっ……」

そして、来栖は壁に激突し、そのまま気絶した。それと同じようなタイミングで俺の右目が能力稼働時間の限界に達し、元に戻った。全身に押し寄せる倦怠感と、右腕の打撲、義眼の能力を使ったことによるフィードバックの頭痛。それらのせいで俺の意識は朦朧としていた。

「はあっ……はあっ……！」

一刻も早くここから出ないと、起きた来栖に半殺しにされてしまう。俺はふらふらとした足取りでそこから立ち去ったのだった。

ここはどこだ。今までどこを歩いたのか、どのくらい歩いたのかさえ分からない。ただただ、来栖から離れるよう、俺は何も考えずに歩いた。気付けば、空はオレンジ色になっていた。

全身を襲う疲労が限界に達し、俺はその場で壁を背もたれにして、へたりこんだ。だんだん思考能力が回復してきたので、周囲を見回す。見たことがあるところだが、寮からは相当離れているところだ。バスで帰ったほうがいいかもしれない。

「……はあ」

肺の中の全ての空気を搾り出したように大きくため息をした。昨日の夜の銃弾といい、来栖といい、あまりにも俺の周りで異変が起きすぎている。原因は……。

（そんなことどうでもいいや……とにかく帰ったら、凜に詫び入れて、飯食って、すぐ寝よう……。それにしても久しぶりに本気で身体動かしたな……）

ここからバス停はすぐ近くにあるようだ。駅に行つてそこから帰るとするか。

「つてあれ？ 右目が……」

右目が見えていない。携帯のカメラ機能で自分の顔を見てても、あまり異常は見られない。

「使いすぎたか……今度から少し抑えるか」

打撲の痛みは消えてきたが、頭痛がひどい。まるで頭をハンマーで小突かれているかのような感覚。右目のことはひとまず置いて、帰ろう……。

「天真、ずいぶん遅かったじゃない。どこ行つてたの？」

「まあ、色々あつたんだよ……色々と。あれ、シャノンはどこにいるんだ？」

凜に来栖のことを言つて、余計な心配はかけさせたくないのだ。

彼女が一度心配し始めると、泣くくらいまでいつてしまう。泣かせたくはない。なんせ幼馴染なのだから。

「シャノンちゃんなら今お昼寝中」

彼女はソファでスヤスヤと寝息を立てていた。作り物とも間違えてもおかしくは無さそうだった。

「なんか……こう見ると、自分の子どもみたいに見えるな……つて大袈裟か。凜？」

「……………ウエディングドレス……………」

うわ言のように呟いた。頬を少し赤らめ、目線が明後日の方向を

向いている。シャノンに対して母性愛でも抱いたのだろうか。それとも何かに思いを馳せているのか。俺には全くわからなかった。

「おーい。りーん。帰ってこーい」

「うわっぷ！？ 何かしら天真？ 別にお嫁さんのことを考えてたわけじゃ……」

「お嫁さん？ お前の将来の夢なのか？」

「そつ、そんなわけ……」

凜は顔を俯かせる。

「俺はお前の夢を笑ったりはしねえよ」

「……ありがとう。でも話すのは今度ね」

凜は満面とも言える笑みを俺へと向けた。俺はその顔につい、ドキツとしてしまい、

「ちよつ、ちよつと水飲んでくる」

そこまで俺は動揺していたのか、くるつと方向転換しようとした瞬間、足をもつれさせてそのまま前のめりに倒れてしまい。

凜を押し倒すような形を取ってしまい、鼻息がかかる距離まで顔を近づけた体勢になってしまった。はつきり言って非常に不味い状況だった。あらゆる意味において。

しかしなぜかお互い離れることが出来ず、そのままの状態が続いていたときだった。

「兄さん兄さん、遊びに……兄さん？ 凜さん？ 何してるのかな？」

紅音が登場。これはどうすればいい……！ 頭が沸騰しそうにまで熱くなって、上手く回転できない。そして彼女はなんだかジトツとした目つきで俺を見ている。

「ふじゅんいせーこーゆーはダメなんだって、りっちゃんが言ってたよ？ でも今兄さんたちは……あわわわわ！」

「ご、誤解だ！ これには深ああいワケがあつてだな……」

「兄さん昼ドラに出てる、浮気したことを取り繕うダンナさんみたいな言い方になってるよ？」

「……ん？ テンシン、薄っすらだけどリンと組み敷いていたような気がするの。あたしの気のせい？ 幻覚かな」

シャノンさん、紅音と同じように俺のことをジト目で見ないでください。怖いです。

ついでにシャノンさんも起きたようです。凜は……いない！？

一体どこに消えたんだ。シャノンと紅音は俺に注目しっぱなしで凜のことを見ていなかっただろう。おそらくこの部屋のどこかに隠れていることは間違いないのだが、それよりもこの窮地をどう切り抜けるかが問題だ。

「兄さん、これは問題だよ？ 凜さんに手を出すって……分かってたけど！ こんな時間にやらなくても良いじゃん！」

「テンシン、リンを傷つけるのはいけないと思う」

「二人とも、落ち着け。深呼吸だ。深呼吸をするんだ。お前たちは今、冷静な状況判断が出来ていないんだ！ 落ち着けば俺の話が分かるはず！」

その後、シャノンの俺を見る目が若干鋭くなったのと、紅音公認の変態になったのだった。

その後は何ら変哲もなく終わり、シャノンはまた可愛い寝顔でソファに横たわっている。今俺は外に出て、いつもの日課をしようと思った。右目は食事をしているときに回復した。のだが、

「……ん？ あれ？」

切り替わらない。連続十五分が限界なんじゃなくて、一日十五分が限界ということなのかもしれない、と思い俺は部屋へと早足で戻った。

玄関に置いてあるシャノンのスニーカーの下に普通の封筒が落ちていた。拾って差出人や宛先を見てみると、

「なんだ、これ？」

なかった。ただの入れ物かもしれない。俺は、つい、興味本位でその封筒の中身を覗いてしまった。そこには、

『D・D・Project

Homicide arms report No. 21』

と書かれていた。他にも数枚の紙がある。俺は携帯でその英語の意味を翻訳して 後悔した。

『D・D計画、殺人兵器21番の報告書』

頭のページ以外は全部日本語で書かれていた。

『検体番号21番の報告書

1・基本的人体の問題 基本的構造には問題見られず。身体能力は現状、レベル3。改善の余地有。

2・投薬上の問題 日常生活においては投薬の必然性は見られず。』

俺はそこで読むのをやめた。意味が分からなかった。そして、本能的に恐怖を感じた。殺人兵器？ D・D計画？ 一体何がなんだか分からなかった。

銃による狙撃、来栖の師匠についての質問、この報告書。最近起こったこれらは、果たしてつながりを持っているのだろうか？

D・D Project（前書き）

続きます。もうすぐゴールだと思います……。

D・D Project

話は一番初めに戻るのだが、とにかく今すごく戸惑っているのだ。いろんなことに頭を巡らせつつ、いつものように教室の扉をくぐる。しかしなぜか今日の教室はやけに騒がしい。とくに男子が。

「なあ、サイカ。この騒ぎは一体」

「おうおう天真くんじゃないか……この前の話はあとでするとして一体なんだ！？　なぜ、お前の、席に、リリスちゃんが座っている！？」

「は？」

そう、群がりの中心は俺の席だったのだ。そこには何事もないようにリリスがぴんと背筋を伸ばして座っていた。

「おい、リリス。ちよつと来い」

「……こんな群衆の前で平然とわたしを連れ去ってあんなことやこんなことをやろうとするなんて、流石紅音さん公認の変態さんですね」

「紅音エ……まあいい。それはそうとこんな朝早くから何の用だ？」
教室の外へと一旦出る。クラスメイトの視線が刺さって痛いのはこの際、気にしないほうが良いだろう。

「……手袋、使われましたか？　使われたのでしたら是非感想を聞かせて欲しいのですが」

この子、さつきとは比べ物にならないほど目が輝いています。やはり興味がある分野になると人は誰しも気分が高揚するということなのか。

「あれがあつたおかげで助かった。あれ、お前の言うとおりホントに筋力が上がったよ」

「実験成功ですねっ！」

リリスってこんなに分かりやすく喜ぶ娘だったのか。なんだか意外な一面を見た気がする。

「じゃあ、実験台になった報酬として一つ聞きたい。人造人間は作れるのか？」

無駄でも良かった。だが、聞いてみないことには始まらない。昨日の報告書。それだけが気になっていた。俺が尋ねると、リリスはいつものような無機質な表情に戻り、

「そちらの方面はよく分かりませんが……その研究をやっている機関がいくつかあると聞いたことがあります。しかし、人造人間と言っても言い方にもよります。遺伝子を改造する方法、人工的に作った子宮内で育てる方法、ウワサだけでも様々な種類があるんです」

「そうか……ありがと、助かった」

「……ど、どういたしまして。というよりなぜ唐突にそんなことを聞いたのですか？」

「いいや、特にはなんでもないんだ」

これは俺の問題。他人を巻き込む理由は何もない。そう思い、俺は教室へと戻った。

俺は授業中、あの報告書のことばかりを考えていた。核心に触れたいという好奇心、核心に触れてはいけないという本能から来る恐怖心。この二つが俺の中で混ざり合ってワケが分からなくなっていた。

（師匠を捕まえれば……でもこの町にはいつまでいるかも分からない……探すだけ探してみるか）

「おい、天真、天真！」

「……ん？ 悪い考え事してた。なんだ？」

サイカが小声で話しかけてくる。教師に見つからずに、会話をするなんて俺たちにとっては造作も無いことだ。

「リリスちゃんとは付き合っているのか？ 明らかに仲良さそうだったじゃん！ それにあんま仲良くしてるとファンクラブのやつらに反感買っぞ」

「俺とリリスは付き合っただけなんかいらない。なに？ アイツのファンクラブなんてあったのか」

「当然！ 一年生の美少女ランキングで紅音ちゃんと同格なんだお。すごいだろ」

「そんなにアイツ人気あるのか……でも友達見かけないけど」

「リリスちゃんは影から見守って楽しむタイプだろ常考」

「マズい。サイカの美少女演説のスイツチが入ってしまったようだ。こうなつたからには止める手立ては無い。大人しく聞くとしよう。」

「良いか！ 美少女というものは出会わなければまずフラグは立たん！ そして、美少女との出会いのあとはふれあいが必要なんだよお！」

「リンクス、授業の邪魔をするというなら出て行ってもらうぞ」

「先生！ 俺は今大事な話をしているんです！ あなたもまだ結婚していないでしょう！？ この話は聞いていて損は無いはずっ！」

クラスの連中の大半はまたか、という感じでみんな笑っていた。

教師（独身）も呆れかえった表情でサイカを見ていた。なんとも平和な光景である。

「出て行け」

「まだだ！ まだ……ってうわあ先生やめ うわああああ……」

その後、サイカはキレた教師に職員室に連れて行かれたのだという。

今日の授業もいつもと変わらず、終わりを迎える。今日も天気は一日中晴れ渡っていた。俺は教室を出る前に凜に声をかけた。

「凜、今日は一緒に帰れない。気が向いたらでいいんだけど、シャノンの相手をしてやってくれると嬉しい。あいつも寂しがってるだろっし」

「わかった。わたしはこのあと予定無いし、あんたの部屋行くわ。」

鍵は？」

「シャノンに預けた。もし、居なかったら俺にメールよろしく」

「うん、わかった」

「夜までには戻る。お前はできるだけシャノンと一緒に頼む」

俺はそう言い残して教室を後にした。

そう、俺は心なしにシャノンが関わっているという可能性を考えていた。俺はそれをその可能性を拒んでいた。あの子に、あのあどけない寝顔を見せるような子があんな物騒なモノに関わってほしくないからだ。

あの報告書が入った封筒は学生力バンに入っている。あの書類にはとにかく怖くてあまり覗きたくない。しかし、まずは師匠を探して話を聞かなければ始まらない。今、俺は三日前に師匠に会ったアーケード街のあたりを歩いていて。

「……いない、か」

無意識のうちに俺は早歩きで師匠を探していた。心の奥底では恐怖を感じて焦っているのかもしれない。仕方ないことであろう。何せ、自分の命が二度も脅かされたのだから。

「うにや？ 黒木くん、こんなとこで何してんの？」

「沙雪さん？ どうしたんです？」

沙雪さんが目の前でおぼつかない足取りを取りながら歩いていた。「いやあ……わたしさ、神社からの帰りで、買い物して行こうと思っただけ……スパーってどこ？」

「このまま真っ直ぐで、二つ目の信号を……ってあまり頭に入って無さそうなので案内しますよ」

「そうやってわたしを裏通りへ連れて行って、人には言えない既成事実を作る気だねっ!？」

「俺は変態じゃない！ しかもなぜそんな発想になるんですか！

ああ……くそ、占いで俺は今日何位でしたっけ……今日は見れなかったんですよ」

沙雪さんは懷から何かのメモ帳を取り出し、

「君はかに座だったね。今日は確か11位で『不運な出会いがあるかも。今日は大人しくしたほうが吉。ラッキーカラーは白、何も考えない時間があると心にゆとりが出来ます』だって」

占いとは正反対のことをしてるな、今の俺。

「あなたが占ったんですから、だって、っておかしいでしょ……」

「あ、そうだねっ！ まあそんなことはどうでもよくスルーして、スーパー行こうよ！ こうなったらちゃんと買い物に付き合ってもらうよっ」

「どんな理由！？」

「とにかく早く行こうよー！」

俺の腕を引っ張ってただっ子のようにせがむ沙雪さん。あなた大人でしょう。

「分かりましたから……腕引つ張んないでください腕掴まないでください胴体掴まないでください」

「三連撃だ！」

騒々しくも俺は沙雪さんをスーパーまで案内することにした。師匠を探しながらでも、沙雪さんは連れて行けるからな。

俺は善意で沙雪さんに付き合ってたが 後悔した。

「あわわわ……ごめんなさい……」

上の棚の物を取り出そうとしたら、沙雪さんが他の棚に並んでいる物を床にぶちまけて店員に謝っているのだ。これは一度目ではない。三度目である。

他人のふりをしたいのだがそれを一回やったら沙雪さんが涙目でやめてよう、と懇願してきたのでそういうワケにもいかない状況なのだ。

「はあ……なんでわたしこうなるのかな……」

「それが沙雪さんの短所で、長所でもあるんですよ、多分」

「ありがとう、黒木くん……君みたいなのが弟に居たら良いなあ」

「俺、姉はあんまり欲しくありませんけど」

「むー、失礼だなっ。わたしだって君の教育を指導してあげることぐらい朝飯前だよっ？」

「沙雪さん……寝不足じゃない、ですよネ？」

「寝言は寝て言え、と言いたんだねっ!? ひどいな、わたしに
対して刺々しいよう」

「そんなこと無いと思いますよ? というより、買い物は済んだん
ですか。こんなことやってると陽が暮れちまいます……」

彼女の買い物がこには棚の物を倒しながらも苦悩して手に入れた
生活雑貨が諸々入っている。この人、レジまで災厄を持っていくつ
もりではないだろうかと心の底から心配した。

だが、その心配は消え去り、沙雪さんは会計を済ませたようで、

「ありがとねっ、付き合ってもらったりして」

「俺も暇でしたから。沙雪さん、師匠を 雨宮師匠を見かけませ
んでしたか?」

「うーん、わたしも探してるんだけどね……見つからないよ」

「そうですか……携帯の番号交換しません? 探してる人は一致し
てるし、必要以外のときに連絡取ったりしませんから」

「君が女たらしと呼ばれる理由が分かった気がするよっ、まあ携帯
の番号なら良いけど」

沙雪さんと携帯の番号を交換した。これで搜索効率上がること
は間違いないだろう。

彼女とはここで別れることとなった駅までたどり着けるか心配だ
ったが、どうやら自宅は徒歩で帰るらしく問題は無いそうだ。少し
は沙雪さんを信じてやろう。

今日は陽も暮れてきたので引き上げたほうが良さそうだ。このま
ま捜して見つかるという確証も無いし、何よりもおそらく部屋に
居るであろう、凜をいつまでも放っておくワケにはいけない。

帰り道に何ら特異なところは無い。昨日のような来栖みたいな身
体つきの人はいないし、怪しげな裏通りもなるべく通らないで帰り
たい。

「ただいま……」

部屋に入るとと凜とシャノンが寝ていた。シャノンを抱くように
凜が寝ていて、その様子はさながら親子に見える。

「疲れて寝ちまったか……飯でも、作ってやるか」

凧の好きな和風料理でいいだろう。シャノンはハンバーグが良いと暴れるかもしれないが。

「……ん？ て、て、ててて、天真っ！？」

「噛みすぎだ……今、起きたか？ 今から飯作ることなんだけどさ、お前も食ってけよ。シャノンのことのお礼だ」

「そっ、それは良いけど……！ 帰ってきたなら言つてよね……恥ずかしいじゃない……ブツブツ」

「いやあ、二人ともあまりにも気持ち良さそうに寝てらから起こすのも野暮かなって……。貴重な寝顔も見れたし」

「はわっう！？ ちよつと洗面所借りるわねっ！」

女の子は寝顔を見られたくないのか。あどけなさが滲み出て可愛いとは思うのだが。まあ今度からは気をつけよう。

それと、凧が三十分くらい洗面所にこもっていたのだ。流石に長いなと思つて洗面所の扉の前で、

『今は入らないでっ！ あ、あと五分もしたら落ち着くからっ！』

とのことだった。乙女心は男には分からないのだと感じた瞬間だった。

ちょうどシャノンが起きるころには夕飯が出来上がっていた。

「シャノン、今日は凧とどんなことしてたんだ？ それと時間通りに帰れなくてゴメンな」

「今日は……リンに少女マンガについていうのを読ませてもらった。あれはなかなか面白かったよ」

「え、そんなの読んだのか……年頃の女の子だもんな。良かったなシャノン」

「うん」

朝の刺々しさがウソのようだ。くそっ、いつそのこと朝が来なければいい。そうすれば、精神的に痛めつけられることも無いのに。

「そっだ、シャノンちゃんってお箸持てる？ 外国の子だから持てるとは思わないんだけど……」

「ハシの持ち方はイサオに教わったから大丈夫だよ、リン」

彼女は凜の前で箸が持てることを披露した。

「ずいぶんしっかりしてるのね、雨宮さん。シャノンちゃんもちゃんとしてるし」

「いや、シャノンのはたまにとんでもないこと言うんだよね……しかも元凶は師匠と紅音なんだ」

「テンシン。やっぱりアカネの言ってたテンシンの趣味嗜好はウソなの？」

「ああ、ウソだ。あいつの言うことは簡単に信じちゃいけない絶対人には隠したいことが一つや二つはあるってもんだ。さつき凜が洗面所にこもっていたのも然り、俺の理想郷のこと然り。

シャノンは上手にご飯を口に運んでいる。

「シャノンちゃんのほうが礼儀作法が出来たりしてね」

「それはないな。もしそれが現実になったら俺は礼儀作法の道を極めてやるぜ」

「ふふふつ、天真もまだまだ子どもじゃない」

「う、うるせえよ……」

こんな　こんな、一年から見たらちっぽけに過ぎない一日が今は大切に思えたのだった。

凜も程よい時間で帰った。シャノンはよほど凜になついているらしく、リン、次はいつ来るの？　と言ってきたほどだった。

シャノンは今、風呂に入っている。そして俺は今　あの報告書を手に取っていた。

『D・D Project』

一体なんなんだ。プロジェクトというのだから何かの計画であることは間違いない。それも殺人に関する何か。

（シャノンが寝付いてからこれを読むとしよう。これは俺の問題だ。誰も巻き込みはしない）

封筒を机の中にしまう。俺の部屋は洗面所とトイレが同じところにある。そして、バスルームはその隣である。洗面所で顔を洗おうと出て行くと、

「シャノンっ!？」

バスタオル姿のシャノンが出てきたところだった。白い肌にはまだ水滴がついていて、バスタオルも体にびったりくっついている。それがまだ未成熟ではあるが女性特有のラインを醸し出していて扇情的に見える。

「わ、悪い！ わざとじゃなくてだな！ これはそのアクシデントだ！ アクシデント！」

手をアタフタさせていると 俺は一体どうやったのか分からないが 指の先にバスタオルが引っかかり、ばさり。

「え」

「っ！」

バスタオルが外れてコンマ数秒と経たぬうちにシャノンはとんでもない力で俺の顎を思いっきりアッパーカットした。そのおかげでシャノンの裸は見えなかったものの、あまりにも威力が強くて気絶してしまった。

頭がくらくらする。顎ってしっかり守らないといけない部分だったんだな。今回は学習になった。

「痛った……しゃ、シャノン……」

まるで汚物を見るかのような目で俺を見ていた。昨日よりいっそう増した無言の圧力がかかっている。そして彼女の視線は絶対零度に限りなく近い温度で俺を見ていた。

すでに服は着ているようだ。

「テンシン……」

「申し訳ないッス！ ごめんなさい！ まことに申し訳ございませんん！」

その場で土下座に方向転換。地に頭をこすり付けるような感じだ。

サイカ、今お前の土下座してるときの気持ちが痛いほどに分かる。

「へんたい……ふんだ」

その後三十分俺はシャノンに謝り続けてやっと目線を合わせてもらえようになったのだった。

そして、俺は少しばかりひりひりと痛む顎をさすりながら報告書に向き合っていた。シャノンは怒り疲れたのか気持ち良さそうに寝ている。

「D・Dプロジェクトは『研究者』によって研究、実用化へ向けて進行する計画である……次もまだあるな」

今のところちゃんと封筒の中の紙の順番を並び替えて、その順序通りに読んでいる。読んでいるときは恐怖感が身体をおおう。

おそらく今俺が読んでいるのは『D・D計画』の概要についてだろう。恐ろしく細かく書いてある。封筒の中の紙は概要、内容、結論の紙に分けられるようだった。

「この計画の構想は2002年には既に完成していたが、多大なる費用と人材が必要とされたため計画の実行が遅れた。計画の発案者は雨宮功である、だと……!？」

同姓同名か？ それとも。

概要の紙はここで途切れていた。他の紙も目を通して見たが他には目ばしいものは見つからなかった。特に後半のなんかは何を書いているのかさっぱりだった。

ただ、確定したことが一つある。これは表向きの科学ではないということ。俺みたいな一介の高校生が目に入れてはいけないモノなのだ。

「くそッ……! 師匠は何か知っているのか……それさえも分からないじゃないかッ……!」

捨てるか……こんなものは捨てたほうがマシだ。捨てる人目に触れる可能性がある。これは俺の問題。他人を巻き込む理由は何も無い。

だから、明日焼き払ってしまおう。そう思って俺は床に入った。

「ふぁ……最近眠りが浅いのかな……清々しくねえな」

今日は食パンで良いか。俺も連日精神的に疲れてるから一日ぐらいサボってもいいだろう。というか料理でサボるのは一年ぶりだったりする。

「シャノン、起きろー」

「あたしに命令すんな……んむむ……」

朝モードのスイッチが入ったようだ。俺の精神的体力よ、シャノンの口撃から耐えるのだ。

「朝飯、食べるぞ」

「はんばーぐ……」

ソファからむくりと起き上がり眠たそうな目をこする。

「朝からそんなもの食えるかっての。今日はパンだ」

「むう……眠いよう」

今日はなんだか大人しい……？ よし、このまま行けば俺は無傷で学校に登校できる。

「俺もうそろそろ学校に行くぞー」

「やだ」

「え？」

「……あたしもガツコウいく。行きたい」

「あのな、お前は正式なここの住人でもないんだし、居候の身なんだからそんなことはできないんだぞ？ 入学届もとってきてないのに」

「にゆうがく……とどけ？ あるかもしれない……」

シャノンは眠たそうな顔をしながらスーツケースを漁りに行ったようだ。さて、俺は朝飯食う前に着替えを済ませるか。

俺が着替えを済ませた頃にシャノンが、

「テンシン。にゆうがくとどけてこれ？」

「……なんで入ってたんだ。まあ師匠の送りつけてきたスーツケース

だからもう驚く気力も起きないが」

「じゃあこれでガツコウ行けるの!？」

「たぶんな。シャノン、お前、制服入ってないかスーツケースの中
見てみる。凜が着てるようなやつだ」

「あつた」

「はやッ!」

まあ師匠のことだからおそらく入学手続きもすんなりと進むだろ
う。一体どの範囲まで手回ししてるんだか……。

「シャノン、パン食って学校行くぞ!」

「うんっ!」

その時俺は初めてシャノンの笑顔を見た。

早めに家を出て、シャノンと学校に行く。事務室に入ると、表情
穏やかなお姉さんが、

「シャノン!! フォン!! フォスターさん? はい、今日からこの学
校の生徒さんですよー」

予想していたが、ここまでとは思わなかった。早すぎだろう、普
通、一般人ならそう思うはずだ。思わなかったらそいつは異常か、
師匠と同じような手を考えた人間かのどちらかだ。

「クラスは黒木くんのクラスね。あ、でもまだ行つてはダメよ、フ
ォスターさん。色々聞かなきゃいけないことがあるから」

「わかった」

「じゃ、シャノン。俺は先に行つて待つてるからな」

「うん!」

今はこの時を大切にしよう。唯一、心の中の不安を消し去ってく
れるこの時を。

「よう、サイカ。エサは……飯は食ったか?」

「俺は動物じゃねえよ!? あ、そうそう、天真聞いたか? 転校
生の話。とんでもない美少女が下の学年に今日から来るらしいぜ」

「へえ……」

「なんだよ、無関心だな。そうだよな! お前は常に周りに美少女

「が居るもんな！」

「勘違いをするな、低脳サルが」

「ヒドイ言われようだ……っ！ かお前今日ご機嫌な。何かあったのか？」

「いや、別に何も。いつもどおりさ」

「変なやつ」

そうするとタイミングよく、教師がホームルームを始めた。凜もちゃんと来ているな。ちよつとドッキリさせてやろうと思ってあえて知らせなかったのだ。

「えー今日は授業の前にみんなに嬉しいお知らせだ。フォスター入れ」

とことこと歩いてくる。金髪に宝石のサファイアのような碧眼。高校二年生とは思いがたい身長だ。

「シャノン」フォンスターです。今日からよろしく願います」

おお、なんという素晴らしい棒読み。どうせあの事務のお姉さんにぶっくらばうすぎて即興で練習して覚えさせたのだろう。あとで礼を言っておくか。

「じゃあ、フォスターは天音の隣の席だ」

とてててと凜の元へと走って行くシャノン。凜も驚いている。

そして、俺の横で、

「なんだ……！？ あの金髪ストレートのロリ美少女は！ 天真？

お前知り合いだよな」

「断定かい……っ！ お前少しだけシャノンのこと見たことあるよな」

「ああ、あのウソつかれたときに見たあの女の子か」

「そ、その女の子だ」

教師は何かを忘れたらしく、一時退室したようだ。シャノンは凜に抱きついていて。あれで授業受けるのか。そして、クラスの男子の半数の視線がシャノンに、残りは、俺に。

「お前ら……ちよつと待て。誤解をしている！ 待ておい教師が帰

「ってくる可能性を考えないのかクソ活路が見えねえええええ！」

教室に俺の叫び声がこだました。来るのはある程度の日常で良い。

激しいのはとても疲れるんだ。今の俺の状況のようにね。

今日一日の授業は転校生も入ってクラスの雰囲気が高揚していたためか、みんな周りがあまり見えていなかった。見ているのはシャノンだけである。それも授業中まで凜の膝に乗っている、だ。しかし、サイカいわく、

「ゆ、百合属性！？ あれは美少女ランキングに大きく変動をもたらすぞ……」

らしい。美少女ランキングか。その投票のときは俺も一票誰かに入れるとするかな。

そして、生徒たちの待ち待った休み時間。シャノンと凜は学食のようだ。サイカも消えてるし、今日は一人で食べようかと思ったとき、

「兄さん兄さん！ シャノンちゃんがこの学校に入ってたって本当！？」

「紅音さん、先輩方の視線が集まっていますよ。あのシスコンめ、つて」

リリースと紅音が昼飯を持ち寄って教室に入ってきた。

「基本的に俺のせいなんです……んで紅音はシャノンに会いに来たのか。それは残念だったな、今シャノンは凜と一緒に学食に行ってるよ」

「えええええー！ でも帰ってくるよねっ！ そのときに会ったからお持ち帰りしてもいいかな！？」

「ダメに決まってるんだろ、アホかお前は」

「黒木さんアホか、と言った瞬間、男性陣の視線が厳しくなりまして。あの変態め、って」

「それはお前の思っていることだろ!？」

「…… おおっと少々、余計な一言でしたね。申し訳ありません、事実を突きつけて」

「紅音よ、お前はこいつのペースについていけるのか？」

リリスのおエースについていけるやつなんてそうそう居ないのだから。

「うん」

「類は友を呼ぶ、か……」

変人の天才は変人の天才と仲良くなるのだな、学習したよ。

「リっちゃんつてば辛口コメントだねー。さすがだよ」

「たまにしか登校して来ないのでからこのくらいやっておかないとストレスが溜まってしまいますからね。まあ紅音さんは溜まりそうもありませんが」

「ノーテンキつて言いたいんだね！？ 失礼だなあ……あたしだってあんなことやこんなことで疲れてるんだよ？」

「その言い回しはやめろ……変な勘違いをするから」

「黒木さん変態ですね」

しょうがないだろ、思春期なんだから。

「そなの？ じゃあ、具体的に言うとな、棒を入れたり、出したりするの」

「ぶばっ」

な、何を言ってるんだい？ 紅音さんや、冗談はおよしなされ、と言いたかったが声が出なかった。

「掃除機つて疲れるよね……」

「掃除機かよ！？」

「……黒木さん、なんだと思ったのですか？ 棒を入れたり、出したりで一体何を連想なされたのですか？」

にやり。してやつたりと言う顔だ。

「別に何も……」

俺は落ち着きを取り戻す。危ない危ない。もう少しで変態に変態を重ねるところだった。

「あ、そういえばね、この前迷子になっちゃったんだよ……ちょっと怖かった」

やっぱり沙雪さんと紅音って似てるなあ、と俺は心の中で思った。言動までそっくりとは驚いたものだ。話かたとかも似ている。

「紅音さん、伝えておきたいことが。黒木さんの趣味については

」

「兄さんって妹系、っていうのが好きなんですよ。でもあたしにはいつも冷たいんだよ！ 矛盾してるよね」

「紅音さん、それはですね　モゴモゴ」

俺はとっさにリリスの口を塞いだ。だから簡単に人の趣味とかを暴露するんじゃない。恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ。

「リリス、それ以上しゃべらないでくれ……これ以上クラスメイトの目線が厳しくなったら辛いんだ」

「……しょうがないですね。許して差し上げましょう」

後輩に頭を下げる俺って一体……？　そうして時間は過ぎていった。

その後、一週間は何も俺の周りで変わったことは起きなかった。

機能していなかった右目の能力も回復したし、来栖との闘いで負った傷も癒えた。幸い、周りのやつらには傷のことをとやかく言われなかった。

変化があったのは休日のことだった。シャノンと凜やその周りの友達にこの町を案内してもらっているから部屋には居ない。彼女との生活にも慣れてきたってものだ。

その時、俺のケータイの着信音が響いた。電話だ。

「はい、もしもし？」

『あ、黒木くん！？　今暇！？』

沙雪さんの透き通った声だ。しかし、その美しい声にも若干の焦燥が見られるような気がした。

「俺は暇ですけど……どうかしたんですか？　相当焦ってるみたいですけど」

『雨宮博士、見つけたのっ！　場所はメールで伝えるけど、今行け

る？ わたし、この後大事な講演会があつてちよつと追えそうになるの。だから彼を捕まえたら中松が捜してた、つて伝えてね！ よろしくつ！」

「あ、いやその……」

ブツツ。一方的にしゃべって一方的に電話を切るとはなんとも沙雪さんらしい。今度会つたらいたずらしてやろう。電話を切つてからほとんど間髪なく、メールが送られてきた。

師匠の目撃場所は部屋から結構近い。赤レンガ倉庫のずいぶん先のほうだな。走っていいこう。師匠に会って聞きたいことは山ほどあるのだから。

「たしか、この辺だな……」

赤レンガはレストランなどがあり、休日は観光客などで混雑するのだ。しかし、そのわりに人が少なく　というより他に人がいないに近いかもしれない　送られてきた地図を拡大するとこのあたりで師匠を見たらしいのだが……。

「どこだ？　ったく、臭いし、師匠は手間かけさせるし……」

人氣が少ないから見つかりやすいとは思うのだが　そう考えて倉庫と倉庫の間を曲がつた瞬間、吐きそうになった。

人の、死体があつた。仰向けに倒れ、赤黒い血がその人の体からあふれ出ていて、未だアスファルトに赤いシミを広げ続けている。お腹辺りには野球ボールほどの大きさの穴があつて、そこから血が滲み出る。腕は無く、引きちぎられたような跡があり、白い骨と非常に細い肉の線　筋肉だ　が何本も何本も見えている。その傷口が凄惨さを物語っていた。

俺の心拍数が一瞬で跳ね上がる。

そして、俺は、気付いてしまった。その死体が師匠のものであることに。身体つきや、服が同じだったのだ。

「そん……な……師匠が……死んだ……のか……！？」

「そうだ。雨宮は俺が殺したんだよ」

声のするほうを見ると、来栖がいた。ただ、彼の体は人間のもの

ではないように見えた。片目は炎のように赤く光り、腕はまるで千年前から生えているような木の幹のように太い。肩幅は前回会った時の二倍くらいになっていて、足も腕と同じくらい太い。

「なん……で……どうしてッ……なんでお前が……ここにいるんだよ……！」

「理由かぁ……お前と雨宮を殺す、それだけだ」

俺は右目に意識を集中させる。

「意味わかんねえよ！ それになんだ！？ そのお前の身体は！ 一体何したっていうんだッ……」

「お前はこれから死ぬんだかなあ……話してやろう」

明らかに前とは違う。来栖の身体もそうだが、雰囲気が違う。前は俺に対して敵意を持たず、ケン力を楽しんでいたようにも思えた。しかし、今は何か狂氣的なモノに取り憑かれているような

「お前は真実に近づきすぎた」

右目はしっかりと機能している。数日前みたいな不具合もない。死に一步近づいたせい、頭が上手く回り始める感触がした。

「真実？ あのD・D計画というやつか……？」

「そうだ。プロジェクトとは一般人には触れちゃなれねえシロモノなわけなんだよ……それをお前は見ちまったんだ」

「はッ……あれは全部本物だったってワケか……あの報告書は全部焼き払ったぞ」

三日前に公園で焚き火して、テストと一緒に燃やしたのだ。俺は偽りの余裕を見せながら、黒い手袋をポケットから出して両手にはめる。

「正解だな。そんなお前に問題だ。ロボット兵器より強い兵器って何か分かるか？」

「核兵器か……？」

「あつてる事はあつてるんだが……そんなモンじゃねえ……正解はなあ……人間だよ、人間」

来栖はニヤリと顔が引き裂かれたような笑いを浮かべ、

「人間は考えることが出来る。ロボットは限界がある。コストも開発費も開発に時間もかかる。でも人間は違えんだ。普段は脳の半分以下の機能しか使ってねえんだ」

「いちいち遠まわしだな……そういうのは嫌いなんだ、俺」

「人間の脳を最大に近い、出力を出して、人体改造やったらどうなると思う？ それは一種の兵器になるんだぜ」

「人間兵器、とでも？」

「頭は良いんだな、黒木。俺もその一例、実験動物だ。薬品ツケにされて、頭をバツクリ開かれてよお、変なものの脳みそ中に埋められて……。そのせいでこんな身体になったってワケだ」

あのD・D計画の紙に、『Homicide arms』って書いてあったな。殺人兵器。人間が兵器と化すというワケか。

「あはははっ……」

現実味がなさ過ぎる現実でつい笑いがこぼれてしまった。おかしすぎるからな。

「狂っちゃったか？ 冥土には良い土産だろう……それじゃ 死んでくれ」

殺人的ともいえる圧倒的なスピード。一秒も経たないうちに懷に入られた。弾丸のごとき掌底が叩き込まれる。

「がっ、……あああああああああああああああ！」

五、六メートルほど吹き飛ばされた。一瞬呼吸が出来なかった。

肺の中の空気を強制的に吐き出させられ、身体が酸素を欲しがってあえいでいた。

（死ぬ……！ 絶対に、必ず、百パー死ぬ……！ くっそ！ 大通りに逃げて人目の多いところにッ……！）

「赤レンガには人は来ねえ。機械から脳に干渉する音波を出してんだ。お前は脳に変な電気信号送ってっから影響がないんだと」

「はあっ……はあっ……！」

「走れるのかあ、流石だな……けど簡単には殺さねえ！ 俺を敗者にさせたお前に地獄を味合わせてやる！」

「ば、バケモノがつ……！」

来栖は俺を苦しめるためにわざと遅く走っている。こいつ、執念深いタイプだったか……！ 予測が外れた！

（チツ……今回は戦術が通用するような相手じゃない！ 次元が違いすぎる！ 今にもぶっ倒れそうだっていうのにッ……）

喰らったのはたった一撃なのだ。そこらのボクサーなんかでもまともに受けたら一発ノックアウトだろう。

近くにあった工事で使うであろう、二メートル弱の鉄骨を見つけた。それを手に取り横に薙ぐ。いくら力が強いとはいえ、肉体が鋼のように硬くなったわけではあるまい。もともとは、人間なんだ

！

「うつ、オoooooooooooooooooooo！」

リリスによると、この手袋にも欠点はあるらしい。試作品のため壊れる可能性があること、出力できる運動量に限界があること。重さ二百キロの物が限界だという。それ以上は手袋が過負荷に耐えられなくなり、壊れてしまうという。

俺が横に薙いだ鉄骨は見事に来栖の身体に直撃し、鈍い音を響かせた。

「このまま潰れるオoooooooooooooooooooo！」

横に薙ぎ続ける。もう少して彼の体が倉庫に激突しようかというとき、鉄骨の勢いが急に止まった。まるで高速で走っていた車が急ブレーキをかけてしまったかのようなのだ。

「俺は兵器なんだよ。こんなチャチなもんじゃ殺せねえっての。せめて銃二発くらいだったら死ねるかもな」

彼は片手で止めていた。そしてそれを針金のように造作も無く曲げたのだ。

「……あ……」

俺の驚愕は声にならなかった。俺の手元を鉄骨が離れ、アスファルトにズドン！ という轟音を立てた。しかし、この鉄骨だって軽く百キロは超えているはずだ。それを結構な勢いで振り回したのだ。

「もう遊びはおしまいだ。死ね」

死の恐怖との闘い。俺にとって来栖は今、死へと誘う死神と化している。二、三回でもあの攻撃を喰らえば即人肉ミンチ決定だ。切り抜けられない。

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無
理。死又死又死又死又死又死又死又死又死又
死又死又死又死又死又。

「この前までの威勢はどうしたア!？」

恐怖で足がすくみ、上手く身動きが取れなくてぎこちない動きになっている。暴力の嵐というよりは凶器の嵐と表現したほうが適切だ。頭を通過する高速の拳は耳に空を切る音を聞かせるほどに狂気的な暴力だった。

「だあッ！」

コンマ数秒のスキを見切り、来栖の手から逃れるべく足を潰しにいったが、ホルスターに当たっただけで身体的ダメージは与えられなかった。そして、そこから首への一撃へと、繋げる！

「だあつ！」

「けほっ……やってくれんじゃねえか……やっぱお前、面白いわ」

まるで効いていなかった。いや、まるで、ではなく効いていないのだらう。

「スキだらけだぜ!？」

「はっ……!？」

ゴムのようになら蹴りが死角から放たれたが、ギリギリのタイミングで右手のガードが間に合った。その代償に、右手の手袋が破

れて機能しなくなった。

無駄な抵抗でも、バックステップをして距離をとる。こんな距離、一秒足らずで縮められてしまうだろう。

「真実に、近づいた……とか言ってたけどつ、その真実ってお前のことなのか!?」

「違うな」

「じゃあなんだ!? 何が『真実』なんだ!」

「死ぬやつに教えてももう得はねえんだよ!」

来栖は近くにあった石ころをサッカーキックで蹴ると、亜音速で俺の右肩に突き刺さった。

「がああああああああああっ!?!」

「フン……もつと苦しめ」

俺はその場に倒れる。

もう、立つ気力も起きない。見る気力も起きない。聞く気力も起きない。息をする気力だって失せてきた。肩から血がだらしくこぼれていく。

「もう終わりでいいよな?」

「がっ……あがつ……」

「脳をぶちまけて死ね!」

来栖の足が俺の頭を踏み潰し、中身をぶちまけ なかった。俺は聞こえなかった。見えなかった。分からなかった。何が起こったのか。

ダンッ! ダンッ! ダンッ!

「お前……キサマ……!」

恐る恐る顔を上げてみると、そこにいたのは銃を軍人のような綺麗なフォームで持っている、シャノンだった。

「クソ……が……! こんなところで……!」

来栖が大量の血を吐き出し、後ろに倒れた。俺は今の力で精一杯の力を振り絞って、よろよろと立ち上がった。

まず見えたのは来栖の死体。腹、左胸、肩、頭。そこに五ミリく

らしい小さな穴が開いていた。

「シャ、ノン？」

彼女の片手には来栖のホルスターに入っていた自動式拳銃が握られ、そのまま立ち尽くし、小さな、可愛い口から一言も発しよとはせず、俺に視線をあわせることも無い。俺は危ない足取りで彼女のもとへと近づき、

「シャノン……危なかったろ？」

俺はそう囁いて、シャノンの頭を撫でた。感触なんか分からなかったけど、温かった。

「お前がどうしてここに来たかなんてどうでもいい。お前が無事であれば、それでいい。お前は女の子なんだ……」

「違うっ……あたしは……」

「違わない。お前はシャノン」フォン「フォスターだ。それ以下でも以上でもない」

ボロボロの体で、シャノンに血を付着させながらも、俺は続けた。「だから、もうこんなことには関わるな……これは俺の問題だ。お前を巻き込む理由は何もない。だから、だから……！」

「……何？」

「お前は俺が責任をもって守ってみせる。師匠からのお願い事だからな……だから、もう泣いていいんだ……」

シャノンの顔は見えなかったが、鼻息と息遣いが荒かった。

年端も行かぬたった一人の少女が人を一人殺めたのだから、怖くて当然だ。

「うつ……わあああああああああああ！」

「帰ったら、みんなとハンバーグ食おうな……」

シャノンは子どものように泣き出し、俺はそれをなだめながら、彼女が泣きやんだころには意識を失っていた。

.....
.....
.....。

「この子は随分無理したようだねえ……」

(ここはどこだ……？ 俺は一体……)

雨宮が倒されたときにシャノンがあの中にいて、それからの記憶が無いのだ。この鼻をつく薬品の匂いはおそらく病院だろう。

「うん？ 目を覚ましたようだね、あ、君は下がっていいよ」

「俺……」

「肩に小石が入っていたから治しておいたよ。雨宮のお弟子さん」

初老の温和そうな顔をした医師だった。

「し、師匠と何か……痛ッ……！」

「しばらくは痛むだろうね。雨宮については今度話をしようじゃないか。それと絶対安静だよ？」

その医者が出て行くとき、

「雨宮は生きている。もうすぐ来る」

と呟いて病室から出て行ったのだった。

あの時の死体あれはまさしく師匠のものだ。死人は生き返ったりはしない。生きているなんて有り得ないのだ、アニメやマンガの世界じゃないのだから。

D・D計画の概要を知ったら殺されるとか来栖が言っていたような気がする。それにD・D計画に関して大事なことに気付いた気がするのだが……。しかし、あの時の記憶が曖昧で、ほとんど覚えていない。恐怖と殴られたせいか、上手く回っていたと思っていた脳があまり機能していなかったようだ。

「頭が……痛い……」

能力使用によるフィードバックがまだ続いている。このごろこのフィードバックの頭痛の時間が長くなっていつているような気がする。気のせいだと良いのだが。

「あれからどれくらい経った……？」

首を回すと、ベッドの横に俺の携帯がご丁寧に置いてあった。それを見ると、俺が倒れてから二日経っていた。こりゃ、マズいな。凜に涙目で怒られて、紅音に耳元でピーピー言われるに違いない。

俺がそう考えると、コンコン。

「あ……」

「よう。元気だったか？」

病室に入ってきたのはシャノンだった。二日前より顔がやつれて疲れているように見える。つややかな金髪は今はぼさぼさで、目の下にはくまがあった。彼女のその顔を垣間見て俺は、情けなくなってしまった。居候に心配かけさせるような家主、ホントに情けない。「俺がいない間、飯食ったか？ 風呂もちゃんと入ったか？ 学校には遅刻してないよな？」

まるで俺が親じゃないか。世話焼きもほどにしなないと、と内心自分に対して呆れてしまう。

「……はんばーぐ、食べてないよっ……学校には行けなかった」「どうして？」

「二日間、ここに来てたから……心配した……」

なんでそんな俺のことなんか気にしなくても良いだろう、という思いを俺は口に出さなかった。

「ごめんな。帰ったら、ハンバーグ作ってやるから……でも、なんでそんな俺のこと……」

「分かんない……分からないよっ！ なんだか、胸が苦しくて……！」

「それ以上言わせるのは、野暮というものだ。天真」

聞き覚えのある声が俺の名を呼んだ。死んだはずの人間が、師匠が、病室のドアに背を預けて、五体満足で立っていた。

「なん、で……」

「シャノン、このメモに書いてあるものをスーパーで買ってこないか。ハンバーグの材料だ」

おそらく、彼女に聞かれてはマズい内容があるのだろう。彼女は師匠の気持ちを推し量ったように、

「う、うん……分かった」

シャノンはずたずたという足取りで、出て行った。俺は全ての考えを吹き飛ばされたような、そんな気分だった。

「なぜ、生きている？ という顔をしているな。答えてやろう。あれは義体、偽の人間の身体だ。俺は医者だからな、随分作るのに時間はかかったが、ああいうのはできる」

「……聞きたいことが山ほど」

「D・D計画」

「あれは一体なんなんですか……！？ 殺人兵器だの、真実だの、『研究者』だの！ 意味が分からない！」

「良いか。これからお前に告げることは全て事実だ」

彼は俺の横に座り、

「D・D計画は人間を改造することから始まり、最終的には人間を、人間を殺すための人間を作り出すことが目的だ。ようは、人造人間製造計画だ」

「それはアンタが計画したのか……？」

「その通りだ。それとお前にも薄々分かってきてるのであろう？」

「……………」

そうだ、思い出した。あの時、俺が気付いたことは……

「そして、D・D計画で生み出されたのが、シャノンだ。D・D計画のレポートは俺が抜き忘れていた。そして、お前が狙われた理由はあのレポートを読んだことと、シャノンに近づいていたからだ。計画がバレてしまうことを『研究者』の連中は危惧していた」

俺は気付いたときには頭が沸騰しそうになって、師匠の胸ぐらに掴みかかっていた。

「さつきから黙って聞いていれば！ なんだよ、アンタはシャノンが人間じゃないとでも言うのかよ！？」

「似て非なる者、と言った所か」

「シャノン、この世でたった一人の女の子だろうが！ それをア
ンタは否定するのかよッ！」

「レポートにも書いてあったろう？ あれは検体番号十二番だから、
シャノンという名の個体は今までに十一体作られてきた」

彼の声はどこまでもどこまでも無感情で、まるで冬の海のように
冷たかった。顔は生気が抜けたようだった。いつもの無表情とは違
う、無表情だった。

「ふざけんな！ しかもそれはアンタらの問題だろ！ なんでシャ
ノンが巻き込まれなきゃいけないんだよ！？」

「さつきも言っただろう。同じことを言わせるな……彼女はおそら
く人類で始めての人造人間だ。しかも人を殺すためのな。殺しに関
しては機械よりも上だから、戦争してる国が欲しがる。もう少しす
れば量産もできるようになる」

それで銃が使えたのか。しかし、だとしたらなぜ、普段はあんな
に温厚なのだろうか。考えたくもないが、殺すことに特化している
のなら感情を持たないようにさせるべきだ。もし、万が一にも殺す
ことに躊躇いを覚えてしまっただけは使い物にならないからだ。

「アンタ、そのD・D計画とやらをやってる『研究者』を抜けたと
か言ってたけど……」

「あの男がそう言ったのか……ああ、俺はシャノンを連れてあそこ
から脱走した。おかげで今は逃亡生活を送るハメになってしまった」
これで分かった。この男はどこまでも表情に出ない男だ。

「師匠、計画を立案したことを後悔してるんだな？」

「……アホ弟子が。誰がそんなことを言った」

「シャノンに感情を植え付けたのはアンタなんだろう？ 世の中の常
識も、箸の使い方を教えたのもアンタなんだろう？」

彼は俺から目を逸らした。計画の立案者なら、一番彼女のことを
よく知っているはずだ。そして、彼女を連れて逃げている中で、色
々なことを教えたのだろう。シャノンからはイサオから教えてもら
った、ということが度々あった。この人は、シャノンにとって父の

ような存在なのだろうか。

「なら、アンタはD・D計画なんていうアホらしいことをやめようとしたってことになる。その『研究者』っていうところは未だにそれをやってるのか？」

「ああ。残った連中はみんなおかしくなり始めてる。人間を作る、などという行為は同じ人間には大きすぎたのだ」

「このまま計画が続けば、ホントの、シャノンの顔をした殺人兵器が生まれるってことなんですか？」

「そうだな……」

ヒートアップした頭が冷えてきた。めちやくちゃになりかけていた頭で状況を頭の中で整理していく。

「どうすれば……どうすれば、彼女を救えるんですか……！」

「お前一人が動いたところで、何も変わらん」

「やってみなきゃ分からない！ どうすれば計画を壊せるんだ！」

「面倒な弟子を持ったものだ……『研究者』のリーダーが全てを指示しているはずだ。そいつ以外は下働きに近いくらいで、計画の詳細を知らん。リーダーを潰して、やつらのアジトを焼き払ってしまえばなんとかなるのだが……」

「難しいんですか……？」

「当然だ。バレてはいけないことだからな。警戒も並大抵ではあるまい……それでどうするつもりだ？」

「そのリーダーぶっ倒して計画も潰す」

「無理だな。組織というものは一枚岩ではない」

「リーダーを殺してでも……俺は計画を潰してみせる」

「それはエゴだ。人殺しを正当化させようとしている」

「エゴでも構わねえ！ ホントはアンタら大人の問題なんだ。シャノンが巻き込まれて良いわけがないんだ」

俺はいつでも自分のために動いてる、独善者なんだ。

「ご都合主義も良いところだな、弟子よ……まあその覚悟には応じてやろうではないか」

師匠は一呼吸置いて、

「しかし、なぜそんなに守りたがる？ 自らの命を危険にさらして
まですることか」

「俺がやりたいからです。同情しているだけなのかもしれない……
だとしても俺は自分のやりたいことをやります。それに俺はシャノ
ンの保護者みたいなもんですから、守るのは保護者の役目でしょう
？」

フン、と師匠は鼻で笑ったが、それは嘲笑ではないだろう。

「それと、携帯の電話番号をください。いつでも連絡が取れるよう
に」

「良いだろう」

師匠の電話番号を交換すると、彼はおもむろに立ち上がり、

「一旦帰る。ではな」

「あ、師匠、もう一つ」

「なんだ」

「この右目の義眼に関する資料を置いてってください。資料がな
ければ師匠の口からこれについて説明してください。分かってない
ことが多いので」

彼は何も言わずに、懷からA4サイズの紙束を無造作に俺の横に
置いて、病室から立ち去った。

すれ違いざまに、図ったようなタイミングで医師が入ってきた。

「雨宮は私の後輩なんだ。で、君の退院時期だけど……元氣そうだ
ったね。様子見て、明日退院で良いかな？」

「はい、ありがとうございます」

どうやら、早めに元の場所に帰れそうだ。でも、本当に帰るのは
まだまだ先だ。シャノンの問題を解決しないといけないのだから。

今日は安静に、との医者からの忠告なので動きたくても動けない
身体をもてあましていた俺は師匠の置いていった資料に目を通すこ
とにしたのだった。

「分かりにくい……」

専門用語が入りすぎていて、よく分からん。分かることを要約すると、こういうことになる。

この義眼は、通常モードでの使用は何も問題にはならない。しかし、動体視力を上げるモードを使い続けると義眼自体の機能が停止する恐れがある。さらに一五分以上連続で使用した場合には脳に多大な損傷をもたらす可能性もある。なお、これは試作機のため、問題の前例が無く何が起こるかは一切不明である。

「うわあ……」

この義眼の能力を好き勝手使いすぎたのか……？ 脳に損傷って……。しかし、ポジティブにこれを捉えれば、まだまだ未知の可能性があるということにもなるのだが。

（どちらにしろ、なるべく使わないようにしろってワケか……。大きい力には同等のリスクが付くんだな）

そうこうしているうちに外の景色は黒くなっていった。久しぶりの飯だ。病院食だが、腹が減っているから何でも美味しく感じるはず

「まずっ……」

明日は豪華な夕食にしようと決め込んで俺は床についた。

習慣というものは良いのか恐ろしいのか分からない。いつものような時間で起きたのだが、着るべき制服が無かったので少々、焦ってしまったのだ。なんだか清々しくない朝だ。

昼ごろに全ての処理が終わり、病院を抜けることが出来た。寮に帰ったときは いや、それはそのときに考えよう。凜の鬼のような恐ろしい形相が目に見えかぶ。

「ただいまー」

ギィ、重苦しい音を立てながら玄関を開く。二日前とほとんど部屋の状態は変わっておらず、汚かったので掃除をすることにした。小一時間掃除すると、あらかた片付いた。もういいかな、と思つて腰を下ろしたとき、玄関の扉が開く音がした。

「今日はちゃんと学校行つたみたいだな」

「テンシン……ちゃんと戻ってきたんだ……みんな心配してたんだよ？ リンだつて紅音だつて……！」

「お詫びと言つちやなんだけどさ、今日は夕食に皆呼ぼう。サイカとかもさ」

「……分かつた」

シャノンなんだかむすつとしていて、でも、とても満足げな顔をしながらうなずいた。

「んじゃ、軽く買い物でも」

「軽く、ですつて？」

後ろから殺気。活路は……見えない。

「おかえりなさい……あなたはまた、面倒なことに首を突っ込んだみたいね……！」

「ま、まあ、待て凜。これには事情があるんだ……しゃ、シャノンも見てることだし、R118指定を受けるような暴力的なことはやめたほうが……」

「関係ないわーっ！」

活路を見出せず、一方的にやられると思ったら、拳は飛んでこなかつた。

「つて思ったけど、もう良いわ。呆れちゃった。バカは死んでも治らないつて言うし、ホントいつものことだもんね……じゃ、一つ約束して。それで許したげる」

「何だ？」

「必ず、この部屋に戻つてくること。それだけ」

「……分かつたよ」

分らないところで、優しい幼馴染である。でも、そこが凜の良いところでもあるんだけどな。

「それと、凜。今日パーティーをやる予定なんだけど、来るか？」

「良いけど……ここで？」

俺の部屋をなめ回すように見てから、冷たい目線で言い放った。

「そ、掃除はしたんだぞ！ 料理に問題はないから。それに、大事なのは心なんだぞ！」

「……まあ良いけど。もう少しちゃんと掃除しなさいよ。なんなら手伝ってあげても、良いけど？」

凜よ、なぜそこでいつもの癖が出て、もしもじするんだ。

「そうしてくれると助かるな。あ、でも女の子には色んなやらなきやいけないことがあるんだろ？ 家に戻ってろよ。良いパーティーにすっからさ」

「うーん……分かったわ。期待してる……はあ」

「どうした、凜。ため息なんてついて」

「な、なんでもないわ！ じゃあねっ」

「お、おう」

なんか挙動不審な感じの凜だった。どうしてだろう、と思いつつ、パーティーに呼ぶメンバーにメールを出したのだった。

シャノンの要望から、ハンバーグパーティーなる変哲なモノをやることになった俺は下準備中であつた。この肉のカタマリを何個こねたんだ、俺……。そして、そのシャノンかというと、

「すう……」

気持ち良さそうにお昼寝中だった。それにしてもよく寝るなあ、シャノンのやつ。この頃寝不足だったのかもしれないから、しょうがないか。俺のせいでもあるんだし。

「さて、これくらいで良いか……」

「……わたしとしてはもう少し増やして欲しいところですが」

この怪しい登場の仕方はリリスしかいないだろう、だって俺、ちやんとドアロックしたぜ？

「お前は普通にドア本を押して入ることが出来ないのか。お前、通報されてもおかしくないぜ」

「……変態さんが何を言うのですか。黒木さんは変態なんですから通報されてもおかしくないですよ」

「そっくりそのまま返された！ 頼むから大人しくしてくれ……」

もう少しで皆来るはずだから」

下準備はこれで終了だ。あとはみんなが来てからハンバーグを焼けば終わりだ（サイドメニューは近くのスーパーのできているモノを買ってある）。

「兄さん兄さん、来ちゃったよシャノンちゃんはどこ持って帰っても良い!?」

「はいはい、来てくれてありがとう、シャノンは寝てる持ち帰りは出来ません」

義妹の雪崩のような質問攻めの処理には慣れているので処理は冷静に出来た。そして続いて、

「お、天真がエプロンかけてるじゃん！ ギャハハハこりや笑える！」

「殺すぞこの野郎」

「いやいやアリガトネ、こんな合コンのようなパーティーに呼んでもらっちゃって！ 気分ウハウハだぜ」

「帰るか？」

「つれないこと言わないでよぉ」

「キモい、近づくな」

シャノンの顔を覗き込んでいたリリスが気付いたように、

「……ああ、あの時の変態さんですね、そうですか二人はそんな関係だったのですか……ポッ」

「俺は変態じゃないよ、リリスさん？」

「おいなんだポッって」

「……いえ……別に」

一体なんだ……俺とサイカの会話を見て面白いとでも思ったのかあれからリリスがニヤニヤしているように見えるのは気のせいだろうか……。

「あなたが黒木紅音さんだね？」

出た、サイカの超紳士モードもとい、下心丸出しモード。人間とは怖いものだ、人格の豹変ができるのだから。

「うんそうだよ」

「天真にはいつも世話になってるよ。あなたから見た天真はどうかな？」

「うーん、変態さんで、よく怪我する人」

「そうなんだ、じゃあ」

「オラ、テメエ兄がいる前で妹口説いてんじゃねえぞ」

「ほら、天真。後ろに天音さんが立っているじゃないか。女性の前のルールをわきまえたらどうなんだい？」

サイカにアイアンクローを決めているのに、彼は作り笑顔を崩していない。なんてやつだ。

「おう、凜。お前で最後だ」

「あら、みんな早いね。シャノンちゃん、寝起き？」

「テンシン、早くハンバーグ作りなさいよ、ド変態」

「ひい！ 寝起きシャノン！ 分かった今作るから！」

「十秒以内ね」

「無理ですよ！？ シャノンさん料理したことねえだろ！」

「文句ある？ 口動かすより、手動かしなさいよ」

サイカと凜は啞然とし、リリスは彼女に興味津々なようで面白そうに見えていて、紅音は笑顔を崩していない。それはそうだろう、いつもの大人しいシャノンとは様変わりしているのだから。

「リンっ」

凜の胸へとダイブするシャノン。

「シャノンちゃん元気だった？ まあ今日学校で会ったときよりは元気みたいね」

「うん」

おかしい、接する態度が変わっているのは俺だけだったりするか。かなしい運命だな……そう思いつつ、俺はハンバーグを焼くのだった。

みんな少しずつではあるが、食べ物を持ってきてもらったので、意外と満腹状態である。そして俺が苦勞して作ったハンバーグ軍団のおよそ半数をシャノン一人で壊滅させたのだ。おそろしや。

「ふいー……食った食った」

「紅音、お前はオヤジか」

「そんなことないよー？ あ、そくだ兄さん、今日泊まって行っても良い？」

「別に良いけど……はあ、俺の寢床は一体どこへ……」

「廊下？」

笑いながらとんでもないことを言う妹だ。兄にたまには感謝の気持ちを見せてくれたって……

「それか、一緒に寝る？」

「ば、バカか！？ お前！？」

「冗談だよ、冗談」

結構マジで焦ったぞ、今の。思春期の男子には心臓に悪い冗談である。おそらく俺は今、顔真っ赤だろうな……自分でも分かるほどに体が熱い。

「でも泊まらせてもらうのはホントだよ。パジャマも持ってきてるし」

「分かったよ、好きにしろ」

「やったー！ シャノンちゃん、一緒に寝よう」

「うううー……」

シャノンは困り果て、紅音はシャノンの頬に頬ずりをしていた。片思いもいいところである。

「……では、兄妹水入らずなようなのでわたしたちは帰るとしましょう。ハンバーグ美味しかったですよ」

「そう言ってくれるとありがたいな。それとリリース、あの黒い手袋の代えって無いかな？ 壊れちゃってさ……無いと困るんだよな」

「それなら、これを」

彼女のポケットからあの最強の手袋が出てきた。四次元ポケット

か、リリースのポケットって。

「ありがと」

「どういたしまして」

これで少しは自分の身を守れる。あの時はシャノンに救われたようなものだからな。自分の身は自分で守らないといけない。それは俺の問題なんだからな。誰も巻き込む必要は無い。

「天真、ハンバーグ、中々美味かったぜ。仕事にも……じゃない、勉強にも精が出そうだ」

「サイカが勉強なんかするわけないだろ」

「ちくしょう！」

凜は至って冷静なような顔で、

「あんた、紅音ちゃんにセクハラするんじゃないわよ？　したら…

…」

「したら？」

「ぶッ殺す」

あれ？　凜って女の子だよな。すごく女の子が使っちゃいけないような言葉を吐いたような気がするのは俺だけかな。サイカは至って冷静そうにしてるけど、あいつ、汗が噴出している。凜の死刑宣告は彼をも震え上がらせるほど威力があつたらしい。

「んじやなー」

「おやすみ、天真」

「さようなら、黒木さん」

ああ、皿洗い……。面倒だな……。食洗機に入れておこう。通販でつい勢いで買った無用の長物だと思ったがこんなときに役に立つとは、びつくりだ。

「ふう……」

ずいぶん詰めてしまったが、まあ大丈夫だろう。

「兄さん、シャノンちゃんと一緒にお風呂入ってくるね」

「あいよー」

「行こつ、シャノンちゃん！　背中流してあげるよつ。それが日本

の文化だからね、覚えておくんだよ？」

紅音は日本を勘違いしてるな。彼女に日本は一体どういう国だと思われているのだろうか。少し興味が湧いた。

「ふう……これで終わりか……」

食洗機のおかげで俺の労働量が三分の二くらいに減ったのだ。やはり文明の利器は使ってこそ実力を発揮するってもんだ。食洗機、万歳。そんなこんなで休みついでに俺は少したそがれているのだが

……

「シャノンちゃん、髪の毛綺麗だねー！ お手入れどうやってしてるの？ 答えてよー……えいつ」

「うきやあ！ な、何を……」

「良い声を上げれるじゃないかお嬢ちゃんぐひひひひ……えいつえいつ」

「ふわっ！ ホントにやめっ……きやあ！」

バスルームの扉越しに聞こえる女の子の戯れている声に耳を傾けてしまっていた。それと紅音にあのセリフを覚えさせた奇人天才少女、出て来い。まあ予想ではあるのだが。

というか、これは拷問ですか？

思春期真っ盛りの男子にこんな生殺しの刑ははつきり言ってきつすぎる。しかし、俺は決して変態ではない。そもそも思春期の男子「変態で結び付けることが間違っているのだ。それに該当する人物は俺の頭の中では金髪のイケメン野朗しか浮かび上がってこない。」

「そうだ……俺は変態じゃない」

ふははは、女の子の戯れている声ごときで惑わされる俺ではない。何せ、俺は変態ではないのだからな。あ、今変態って思ったやつが変態だからな。

って俺は誰に語りかけてるんだ。というか俺この十分くらいで何回変態って思ったんだ？ こんなことしていると俺変態になっちゃいそうだ。今は変態ではないが。

「シャノンの好みのモノってなんだろう……休みの日に一緒に探してやろうかな……」

迷惑をかけたのは事実なのだから、ハンバーグ以外にもう一つ何かしてやらないとダメな気がする。ようはお詫びの品というプレゼントだ。

「はあ……気が重い……」

未だにドア越しからキャツキャツウフフな声が聞こえているがこの際、耳を傾けないことにした。明日から学校に行っていないらしいので、その準備をすることにした。

前のように、バスタオル姿の彼女たちを見ないようにすることを意識しながら部屋に入った。

「まあ、いつもの連中にはアイサツしてんだからいつものように登校すれば良いだけか……おおっと肩にはかけられないんだな。ちょっと違和感あるし……」

右肩には未だに包帯が巻かれてある。下手なことをするとまた傷口が開きますよ、ということなのだろう。銃弾に匹敵する速度で小石がめり込んだのだからしょうがない。しばらくは大人しくしよう。「兄さん、わたしたちお風呂上がったよ」

花柄の子どもっぽいパジャマを着て紅音がひょっこりと顔を出してきた。ホントに風呂上り直後らしく、顔が紅潮している。パジャマの少し小さいのか肌の露出が多い。

「何見つめてるの？ このパジャマはシャノンちゃんが貸してくれたの。少し小さめだけど、腹に背は変えられない、だっけ？」

「そこを変えてどうするんだ！？」 お前……背に腹は変えられない、の間違いだ。常識だろ……お前、本当に博士号持つてるのか？」

「当然だよっ！ わたしの先生はりっちゃんなんだから！」

まさに予想通りであった。これだからあの掴めない天才少女は困るのだ。こちらで一応天才の部類に入る類まれなる才能の持ち主であるが。

「そのエセ個人教師からはすぐに離れる。どんな知識を与えられて

いるのか分かったもんじゃないからな」

「ええええええ……」

「文句言わない。つーか俺風呂入るから邪魔だ」

「人がせつかく呼びに来てあげたのに……兄さんのバカ！」

こいつからバカといわれたら、心が折れてしまってもおかしくないだろう。俺はそんなバカじゃないのだ。しかし、今は紅音の捨てセリフかと思ったのだが、中々この部屋から出て行こうとしない。なぜだろうか。

「なんだ、紅音。まだ何か用があるのか？」

「い、いや別になんでも……」

「そうか。じゃさっさと寝ろよ」

俺なんとなくが頭をわしゃわしゃしてやると、

「うん！」

と、元気よく返事をした。まるでホントに犬のようだ。しつぽがあつたら、こいつは二十四時間しつぽを振り続けているに違いないと思つたのだつた。

ああ、肩に湯をかけないようにするのめんどくせえ……でもまあ、やらなきゃやらないで痛い目を見るので仕方なくやっているのだが。そして、俺はシャワーと激しく格闘し　できるだけ肩にかけないようにシャワーを浴びただけなのだが　たつた今バスルームから出て着替えたところだ。久しぶりにこの寮で身体洗つた気がするな。朝ではないが、なんだか清々しい。

リビングでテレビを見ていたシャノンに、

「シャノン、次の休みの日一緒に出かけないか？　なんか好きなもの買ってやるからさ」

「……そ、そこまで言うのならついて行く」

「そうか」

シャノンの口調がなんだかおぼつかない気がした。まあ、気にすることはない。そう思い、俺は自分の部屋に戻った。

今までの疲れがどつと出たのか、睡魔がいつも以上に激しく襲つ

てきて、俺はそのままベッドに倒れこんでしまった。

エゴな解答（前書き）

次で終わりです。

エゴな解答

「……さん！……きて！」

誰かに起こされてるのか。まあそんなことは万が一にもあり得はしないのでこれは夢だろう。だったらもう少し楽しませてもらおうではないか。

「ねえ！ ねえってば！ 朝ごはんー」

お腹の辺りに柔らかく、そして少し温かい軽いものが置かれた。夢にしてはずいぶんリアルだな……。

「おい！ 聞こえてるのー？ こうなったら……」

おお。

「うりゃ！」

ゴーン。頭の中で除夜の鐘が鳴らされているような感覚だ。そして、鈍い痛み。もしかして夢じゃなかったりするのか。

「痛てっ！？ あ、紅音！？ なぜここに！？ とうかまずは俺の上から降りろ！」

馬乗りという状態になっていた。これはアレだな、シャノンが来て変態扱いされるパターンだな。しかし、それは予想に過ぎなかったのか、扉が動くことはなかったので安堵した。

「で、お前はなぜ俺の上から立ち退こうとしないのか。このままだと遅刻してしまうんですがあと俺は一応まだケガ人なんだが」

「なかなか起きなかったから罰ゲーム」

「降りろ」

「いやだ」

「降りろっ」

「いやだっ」

「降りろったら降りろ！」

「いやだったらいやだ！」

不毛だ。俺たちはいいい年こいてなんてくだらないことで争って

るのか、と俺は心の中で大きなため息をついた。ともかく寝起きのシャノンが来るという危機は一応去ったので少しは気が軽いのだが、「テンシン……あともう少しでガッコウ行く時間……朝ごはん……ってまた？」

慢心をしてはいけないという事が改めて分かった瞬間である。油断した瞬間に図ったかのようなタイミングで出てきた寝起きシャノン。これはイヤな予感……

「テンシン？ ええと……アンタ……あ、朝までアカネと……？」

罵倒されるかと思ったが、なんだかシャノンらしくないな。顔真っ赤にしてるし。これはこれで調子が狂うかもしれない。付け足しておく俺は決してMでも変態でもない。

「何を勘違いしてるんだ。なんだ、熱でもあるのか？」

「そんなワケない！ ただ目の前で不純異性交遊が繰り広げられていたから……」

「そんなのやってないからな？ というか紅音、お前いい加減降りる。苦しくなってきた」

シャノンは少し焦った様子で俺の部屋の扉をバタンと閉めて、出て行ってしまった。ホント、どうしたのだろうか。いつもの寝起きらしくない。毎日彼女の寝起きで精神的ダメージを毎朝受けていたのがウソのようだ。

「しょうがないなあ……朝ごはんはどうするの？」

ようやく分かってくれたようで彼女は俺のお腹の上から降りてくれた。俺は制服を出しつつ、

「コンビニでパンでも買って来い。でもまあ、どうせ金よこせて言ってくるんだろ？ これやるからシャノンと一緒になんか買って学校行け」

「兄さんなんか冷たいー」

紅音はむすつとしたように頬をどんぐりを頬張ったりスのように膨らませている。

「良いか。ここは一応男子寮なんだ。男子寮から女の子が出てきた

ら色々面倒なことになるだろうが」

「良いじゃん別に」

「お前はもう少し兄を大切にしような……」

はあい、と彼女は軽く受け流すと、話を切り替えた。

「そういえば、シャノンちゃんってさ、なんだか会ったときより女の子っぽくなってきたよね……ほらさ、会ったばかりの時はちょっととんがってたじゃない？」

「ん……まあそうだな。ただ寝起きはすごいぞ……」

「まったく……兄さんはそのことばかりしか言わないんだから。シヤノンちゃんの他の所も見てあげるんだよ？」

「お前は親かっつての。分かったよ、今度からはそうする。だから、もう学校行け。そうしねえと遅刻するぞ。お前もお前でシャノンを困らせるなよ」

「分かった！」

紅音はひまわりが咲いたのような笑顔を俺に向け、扉を閉じた。少し紅音も成長したのかなと思いつつ、時計を見ると、ホームルーム開始まであと五分。世界最速をたたき出す勢いで俺は身支度を始めた。

俺は寮の部屋の鍵を閉めつつ、最近のことを思い返す。確か来栖にこの肩の傷をつけられたときに俺はシャノンに対して何か重要なことをいった気がするのだが、どうも思い出せないのだ。

（俺、なんて言ったんだろ……シャノンに聞いてみるか……）

傷口が開かないギリギリの速度で走って門に入る。息を切らしながら腕時計を見ると、ホームルーム開始まで残り一分というところでゴールした。しかし、まだ空席がある。今日は休みが多いのか？

「ぜえ……ぜえ……」

「お、天真。おはよ……って、どうしたんだ、そんな息切らして」

「ぜえ……そういうお前はなぜそんなに余裕ぶっこいてんだ……もうすぐホームルームだろ……」

「ホームルーム開始五分前だからな、まだまだ余裕だぜ」

「は？ 一分前じゃなくて？」

「もしかして時計がずれていてそれで来ちゃったりした感じですか？ 黒木くん？」

俺の腕時計は八時三十分を指している。一方、学校の壁掛け式の時計は八時二十五分を指していた。要するに、俺は完璧に勘違いをしていたということらしい。

俺は窓側の席へ行き、机に突っ伏した。

「チクシヨウ……無駄骨かよ……」

「まあ、そう落ち込むなって。紅音ちゃんと一緒に一夜過ごせただけでも良いだろ？」

「うるせえ、変態……今日は今日で調子狂ったぜ……」

「キサマ、一体何があったって言うんだ！？ このリア充め！」

サイカが叫んだところで教師が入ってきたため、この話は一旦切ることにした。

（この腕時計誰がずらしたんだろ……）

という事は俺の部屋の時計もずれていたのか。なんていやらしいことをするやつなんだ、やった奴は。

シャノンに凍としゃべっているし、俺は今とかくやることはないので、寝ることにした。

休み時間にはクラスメイトから定番のどうして入院したの、みたいな質問が俺に向かって一日中飛んできたので懇切丁寧に答えてやると、ふーん、と言って去って行ったのだった。いや、事実をそのまま話したわけじゃない。

バイトの作業中に釘が肩に入った、と言っておいたのだ。来栖のことは話してもいいのだが、どうせ信じる奴はいないだろうし、何よりも俺が痛い子として見られるような気がするのでやめておいた。まあ、言ってしまうえば特に変わったことはない、だ。授業して、居眠りこいて、教師にぶっ叩かれて、何ら変わらない。それこそ来栖との戦いがウソだったようにも感じ取れるぐらい平和な俺の日常を過ごしていた。

そんなこんなでいつの間にか週末になっていた。

「シャノン、どこか行きたいところあるか？ 今日はお前に対するお詫びでもあるから、ワガママなら聞いてやるよ」

今日の彼女の服装は白いワンピースである。ワンピース以外持っていないのかというツツコミはこの際控えることにした。前の水色のより涼しそうで、夏が近づいていることを示しているようだ。

「……遊園地つていうところに行きたい……」

この言いようは遊園地には未だに言ったことがないという事か。箱入り娘だったりするのか。

「オーケー。お安い御用だぜ。こんなこともあるつかと今日は少し貯金を崩したんだ！ じゃあ行くか！」

「うん！」

海沿いのほうの遊園地、『横浜コスモワールド』が有名なのでそこに連れて行くことにした。シャノンにはこの時を楽しんでもらいたかったから。

「で、なんでお前がいる？」

「いやーなんでって言われてもちよっとバイトをしてるだけなんだけど……そんな見つめるなよ」

「睨んでるだけだバカ野郎」

金髪イケメン野郎がなぜか遊園地で風船配りをしていた。こうしているのと、なんか近くから目線を感じるぞ。くそ、これだからイケメンは……。

「あー、そうだ。天音さんと紅音ちゃんも見かけたぞ。あえて声はかけなかったけど」

「見つかったらめんどくさそうな二人だな……周りに気をつけて歩かないと……」

「別に警戒する必要はないんじゃない？」

シャノンは凜になついているから、逆に会いたいぐらいなのだろ

う。

「見つかったら見つかったで面倒なんだ。まあ、シャノンが気にする必要はねえさ」

「一ついいか」

サイカの口調が変わる。そして神妙な面持ちで俺を見つめ、
「なんだ」

「お前、まさかシャノンちゃんとデートだったりしてるのか？」

「まさか。俺はそんなつもりじゃない」

「そういうイベントに限って女の子のほうは、『これってデートって思っているんだよね？ 良いよね？』みたいな気持ちになっているのが定石なのだ！」

「はいはい熱弁本当にありがとうございました。それと、お前、妄想と現実にいい加減境目をつける。じゃあな」

俺は後ろでなにやら喚いているサイカに別れを告げると、俺たちは面白そうなアトラクションがないか受付で貰ったマップを頼り園内を歩いた。

それで、最初が、

「きやああああああ……」

ざぶーん。

ここの遊園地のシンボルにして最大の絶叫アトラクション『ザ・スプラッシュ』に乗りたいたいとシャノンが言ったのだ。名の通り、このジェットコースターのレールの最後には池があり、車両がその中に突っ込むと、盛大に水しぶきが上がるというコンセプトの上で作られているらしい。

というか最初から本番行きますか。

「うわあああ……」

「うわあ……」

目を輝かせているシャノンと気だるそうにため息をついている俺であった。ジェットコースターが苦手というわけでもない。ただ、このあととてもイヤ予感がするのだ。しかも大抵こういう予感がし

たときにはそれが当たるといふ謎のジンクスがあるのでと怖い。
「行こっ！」

「分かったよ！ だから走るなって。転ぶぞ！」

シャノンのあとをついていき、アトラクションの列に並ぶのだった。

最初に『ザ・スプラッシュ』の列に並んでから、三十分後だ。

「ああ、楽しかった！ もう一回！」

あの『ザ・スプラッシュ』を乗り終え、出口に出る。ワンデーパスというのを買っていて全てのアトラクションが乗り放題なのであるのだから、出し惜しみをする必要は全く持っていないのだが、

「いい加減にしろ、次で十四回目だぞ？ 流石に頭がくらくらしてきてるんだ……他のアトラクションも行かないか？」

「ここが良いのっ！」

シャノンの髪の毛はこのアトラクションの水しぶきの影響でシャワーを浴びたあとのようにずぶ濡れだった。

「分かった。ここでいいから、一回休憩しよう。それじゃないと吐いちまいそうだ……シャノンはよく大丈夫だな……」

「テンシンって虚弱」

なんとでも罵ればいいさ。はははっ、と心の中で高笑いしたとき、

「あら、天真？ 来てたんだ。シャノンちゃんも一緒みたいね」

「兄さんとシャノンちゃんがデートしてるー！」

アレだ、これはさっさと話を切り上げて退散したほうが良さそうだ。ああ、俺って今日ついてないな……占いが見たい。今日の運勢はなんだっただろうか。しかし、俺がいつも見ている占いはここ一週間やっていない。沙雪さん、一体どこで何をしているのだろうか。

「天真たちもこのアトラクションに乗るの？ どうせなら一緒に乗りましょ！ 良いわ、これ名案じゃない！」

「あたし、これ乗りたい！」

「じゃあ、わたしシャノンちゃんと一緒に乗るー！」

「じゃ、じゃあ、わたしは天真のとなりになるってことで良いの……？」

そしていつものクセである手いじりを始めた。どんどん話が俺を介さずに進んでいる。

「話を勝手に進めるな。誰も乗るとは言ってな……」

「さ、行きましょ」

妙に上機嫌な凜に首根っこをつかまれてやや引きずられるような状態で列に並ばされるハメになってしまった。もう抵抗する気力すら起きなかったよ。ああ、まさか遊園地がこんなにつらいとは思わなかった……。

結局、追加で二回乗せられた。

流石にもう限界になってきたので今はみんなで休憩中である。俺はテールに突っ伏し、

「若いな……シャノンは……」

そんなことをぼやいた。

「天真だってまだ十分若いでしょうがっ。何おじいさんじみたこと言ってるの」

「そう。テンシンの気持ちの問題。あたしは至って普通の……」

そう言った瞬間、彼女の顔が少し曇った。なぜだろう、とても悲しげに見える。

「うつん。なんでもない。気にしないで……だからもう一回乗ろう！」

「まだ乗るのか！？ 流石に他のアトラクションに行こう……もう限界だ……そうだな、観覧車なんかどうだ？」

「カンランシャ？ あの大きな円のこと？」

「そうだ。あれに乗ろう」

シャノン少し考えているようだ。というか十六回も乗ってあきないほうがおかしい。それに凜たちは二回で十分だとい痛げな顔をしている。

「わかった。カンランシャに行く」

「おう！　じゃあ、そうとなれば行くぞ！」

「兄さん、何でそんな嬉しそうなの……？」

凜と紅音は訝しげな目で俺を見てきているがそんなことは気にしない。ついに水浴びジェットコースター地獄から解放されるのだから！

俺は歩きながら思う。今の俺の状態は両手に花なのか、と。一人は妹であるし、一人は幼馴染であるし、一人は預かり少女であるし、なんだか不思議な境遇だな、と考える。

「四名様ですか？」

「はい」

愛想の良いおっちゃんが観覧車の扉を開いて俺たちを乗せてくれた。観覧車は俺たちを上へ上へともって行く。

横浜を高いところから一望できる。右を向けば横浜の町、左を向けば海が見える。俺は純粹にこの景色を美しいと思った。シャノンはそれを子どものように見つめている。

「天真、何笑ってるの？」

「いや、なんでも……」

六月は日が暮れるのが遅いな。こうしているといつまでも遊んでいたくなる。こういうことを考えるってことは俺も人のことは言えないぐらい子どもだな。

「わたしたち、この遊園地の後行くとこあるから、これ降りたら帰るわね」

「おう。シャノン俺たちはこのあとどうするよ？」

「うーん……あとで言う」

シャノンもシャノンなりにリクエストがあるようで助かる。俺はあんまり女の子を引っ張っていけるほど気配りが出来ないから、本

当に助かる。

観覧車が一番上まで行くと降下を始める。景色を見ているといつの間にか地上に着いていた。

「じゃ、わたしたちはこれで」

「じゃあね、兄さん」

「おう」

彼女達が遊園地に出て行った後、シャノンは考えついたようで、

「ハンバーグ食べたい」

「またか……まあワガママ聞くて言ったんだ。連れて行ってやるよ」

彼女はとても満足そうな顔をしている。シャノンのこういう顔を見ているだけでも結構幸せかもしれない。ハンバーグを食べに行くため、俺たちは遊園地を出る。

「らんらら……」

シャノンが鼻歌を歌っている。そこまでハンバーグが好きなのか。それで、タクシーなどというセレブが使うような乗り物には乗れないので歩きで行くことにした。ただ、イヤな予感がした。さっき感じたモノよりももっと悪質で、もっと気持ちの悪いモノ。

ふっと気が付いて横を見ると、さっきまで俺の横を歩いていた少女の姿は既に無く、後ろを見た瞬間には俺は、白いしめったハンカチで、口をふさがれて、意識を失っていた。

あれ、ここどこだ？ 俺は一体何をしていたんだっけ……。ああ、そうだ、シャノンと遊園地に行つて、ハンバーグ食べに行こうとしてたんだっけ……。意識が朦朧としながらも、覚醒を始める、寝起きのような感覚。

手が動かない。足も、目も右目が暗くて見えない。目もほとんど見えていない。

「うあ……」

ぼうつとする目で天井を見た限り、車の中のようなようだ。移動しているのも分かる。

「意識を回復したようです」

「もう一回眠らせるか？」

片方の声はすぐく、親しくて聞き馴染んだ声だった。もう片方は師匠のような渋い声だ。この車にいる人間なのか？ で、これって拉致だったりするのか。

「その必要はありません。なぜなら」
「聞き馴染んだ声が言った。」

「アンタはここで死ぬからだ」

バン！ バン！ と乾いた甲高い音が二回鳴り響いた。直後、喉がはち切れんばかりの絶叫がした。まさか今の音って……銃声か？ 最近聞いたことのある銃声に非常に似てたというか、そのままだった。

「天真、しっかりしろよ、今降ろしてやるからな！」

車はゆっくりと減速し、やがて動きを止めた。

「世話焼きもほどほどにしろっての。後々処理が面倒じゃないか……まあ無事なんだし、いつか」

「だ……れた……」

脳内と耳だけ働いて、見たものの処理が出来ていない。こいつ、誰だっけ……

「どんだけ強いクスリで眠らせたんだ、このおっさん」

「もしかして……サイカか……？」

金髪のイケメン。その顔がはつきりとしてくる。彼が俺の身体の拘束を解いてくれたようで、手も足も自由になった。助手席にもたれるようにして座っている、死んだ中年の男は、俺たちを観覧車に乗せてくれたあの人だった。

「一体、俺は何を……」

身体が楽になってきた。

「良いか、耳の穴かつぽじってよく聞けよ。俺は『研究者』の下働きのようなモンでな、お前をある場所まで運ぶように頼まれてきたんだ」

「何言つてんだお前……？」

「んで、俺がたまたま居合わせたから助けたワケなんだが……アンダスタン？」

「いや、急にそんなこと言われても頭の処理が追いつかねえっての。しかもお前、なんでこんな危ない仕事してんだ？ それに俺はどうやってここに運び込まれた？ しかもこの車はなんだ」

頭の処理がホントに追いついていない。サイカが俺を助けてくれたのまでは、理解が出来た。しかし、なぜ彼がこんな裏社会みたいなところに首を突っ込んでなおかつ、なんであんなにも簡単に銃が使えるんだ。

「俺は自分で食っていけるように万屋 要は何でも屋だ。それをやってる。それで高額報酬の仕事が流れてきたもんだからつい、ね寮を出て行ったのも何でも屋をやることになったのが原因だ」

「そういえば、シャノンは……！？」

「……おそらく、再調整つてのを受けてるはずだ。詳しくはよく知らないけど、相当ヤバイことだろうな」

「連れて行け」

自分でもびっくりするぐらい、低い声で俺は言った。

「どこに？」

「その『研究者』の所に」

「料金高いよ？」

「構わねえ」

「あいよ」

サイカがなぜこの歳で運転が出来るのかはあえて突っ込まないでおくことにしよう。そんなことよりもシャノンが心配なのだから。

その『研究者』たちがいる場所は赤レンガ倉庫の地下にあるのだという。サイカ自身確認はしていないが、そこが指定された場所らしい。

「サイカ、そういえばお前なんで赤レンガに近づけるんだ？ 変な電波が流れて近寄れないとか聞いたけど……」

「ああ、それなら」

彼は胸のポケットのあたりからトランシーバーのようなものを取り出した。

「これがその変な電波つてのを妨害してくれるらしいんだ。『研究者』の連中からの支給品だ。それにしても……皮肉なモンだよな、仕事相手を裏切るんだぜ？ 仕事が減らなきゃいいけど……」

彼はトランシーバー型の電波妨害機をしまつて、今度は物騒なおいのする黒い塊を取り出した。

「これくらいは持つておけよ。もしものときだ」

拳銃を渡された。ずっしりと重く、モデルガンとは全く違う。サイカからおおまかなレクチャーを受け、俺はそれをポケットに深くねじ込んだ。

「もしもの時が来ないことを切に願うよ」

「そうだな、こんなものはできるだけ使いたくない。人は殺したくない」

偽善かもしれない。独善かもしれない。だとしても俺はシャノンをつたつた一人の人間を助けてあげたかった。

「じゃあ、俺は警備を手薄にさせる。天真はシャノンちゃんを救ってきてくれ。俺はあんまあの子と面識ないから……お前が助けに行つたほうが良い」

「陽動つてことか？」

「まあな……大丈夫、死にやしないさ」

「お互いに死なないように気をつけようぜ」

「オーケー。じゃあ、行つて来い、主人公」

サイカは車から勢いよく飛び出し、俺の前から立ち去った。来栖のようなバケモノ人間や人造人間を作る場所だ。何か常識を逸したものがあっても不思議ではない。

「この地下……？　なんでこんなところに……」

来栖に殺されかけたとき、彼は赤レンガ周辺には特殊な電波が使われているとか言ったが、その中心地が赤レンガ自体だとは思わなかった。俺はてっきり来栖が何らかの機材で電波を撒いているのかと勘違いしていたようだ。

静かだ。水を打ったように静かだ。俺の足音以外には何も聞こえない。普段は人々の喧騒であふれかえっているここも今となっては違って見えた。

「誘われてんのか……」

さつきから上手く行き過ぎてる。サイカが陽動してくれているとはいえ、一度は殺されかけ、『D・D計画』を知っている人間だ。こんなに狙われていないのはおかしい。

物音一つ立てていない赤レンガに入る。しばらく進むと、いかにも怪しいエレベーターがあった。それはどこかの工場にでもありそうな一人乗りのエレベーターというか、リフトだ。

「乗るつきやない……」

それに乗ると、ひとりでに下がっていった。ゆっくりと下がってゆく。時間をもったいぶっているようにも感じられた。焦りが募る。しかし焦るうにも下が見えないのだから飛び降りられないのだ。だから、余計に焦るが募るのだ。

（もっと速く動かないのかよッ……！？　しかも再調整ってなんだよ……！　いい加減にしろよ……！）

ゴトン、と揺れてやっとリフトが止まる。先に見えたものは、無数のカプセルと気持ち悪い色の液体。いかにも生体研究所という雰囲気のところだ。その液体の中には人間の脳だけ切り出したものや、動物などが入っている。そこにいるだけで寒気を感じるほどに不気味。リフトから降りて第一歩を踏み出した。そこで周囲を見回すと、

「なんだよ……これ……」

声に出してしまうほどの驚愕だった。ダストシュート、だったのだろうか。そこからは腹を空かした子どもがたらすよだれのように血がだらだらと溢れ出てきていた。もう少し奥に進む。人の気配は感じ取れない。ただそこにあるのは不気味さだけ。

「あ……があっ……タスケテ、シニタクナイ……！」

俺は急に足をつかまれた。そこには右足の無い、白衣を赤色に染めた男が俺の足を神に祈るように、掴んでいた。男の顔はひどくやつれ、生気がどんな精神疾患を持った人より、生気がなかった。そして手はまるでが骨の様に細かった。俺は恐怖で声を上げることすらままならなかった。

「いやだ……！ イ……ヤダ……。死にたくナ……イ」

男の手から力が抜ける。彼は死を拒みながら死んでいった。最後までがきながら、苦しそうにして。そうして、俺は人の死を始めて目の当たりにした。

「あ……あっ……」

俺の喉から漏れた声だった。俺は男に手を合わせることすら出来ず、前へと進んだ。いや、それを余儀なくされた。あんな絶望しか見えていなさそうな顔つきを持った人は初めてだったのだ。

こんな生々しいところにもう居たくなどなかった。世の中の全ての悪、全ての死、全ての絶望、生きてることがイヤになるほどの光景だ。師匠がおかしくなりつつある、と言ったのはこの設備や身体などではなく、人間の精神だった。たった今、分かった気がする。「黒木くん……」

体が震えた。ここにいる者は全員イカれているやつばかりのようない気がするからだ。しかし、俺が感じたのは恐怖ではなく、憤りと絶望だった。

「沙雪さん……？ どうしてこんなところに……」

「お話してあげよっか？」

目の前に沙雪さんが白衣姿で立っていた。彼女から発せられる、

前にも一度だけ感じたことのある圧倒的な気迫、圧倒的な恐怖。それらが今の沙雪さんから感じられた。

「この名前は知ってるよね？　っていうかレポート見たんだよね……分かるはずだよ？」

「……『研究者』だろ？」

「大正解ー！　そしてこの研究者……ようはわたしの同胞だね。で、わたしがこのリーダーってワケ。研究者も結構いたんだけどさあ、全員精神疾患で壊れちゃった」

壊れた。まさにさっき見たような男が何人も何人もいたっていうのか。

「改造した来栖がいるところにおびき寄せたのもわたし。よくもまあ、まんまと騙されてくれたよねえ……大助かりだけど、来栖を殺したね……？」

まあ、いいけどさ、と彼女は付けたし、話を続ける。

「いやいや、まさか雨宮のヤツ、わたしのレポートと未調整の十二号を持って行くななんてね……予想もしなかったよ。しかも十二号のヤツ、わたしのこと嫌ってたんだよね……どうしてだと思う？」

十二号。おそらくシャノンのことだろう。シャノンが沙雪さんに苦手意識を持っていたのは本能的だったのだろう。今の口調からするとシャノンの扱いは決して良くはなかったはずだ。

「それで、その師匠は……？」

俺が問うと、彼女は口が裂けたように笑みを浮かべた。彼女の心の奥にある嗜虐心が見えるような笑顔だった。

「アハハハハハッ、さあ？　どうかな！？」

「シャノンは……？」

「調整中だよ」

「調整つてなんだよ！　さっきから人を道具みたいに使いやがって！」

血が頭に上る。拳銃の撃鉄を起こされたように、俺の中で感情のスイッチが入った。

「レポートと来栖に聞いたでしょ？ アレは元々殺戮兵器なんだよ。ああいうカプセルの中で記憶を植えつけたり、身体能力を高めたりしなきゃいけないんだ、何度もテストした上でね」

彼女はいかにも楽しそうに続ける。

「それを雨宮がちょうど十二号が不安定な時期にカプセルを壊して持っていたんだ！ わたしの所持物なのにね」

「それで、再調整つてのをやってシャノンに殺戮人造人間に戻そうつてのか……！？」

「うん、そうだよ。ああ、それと君の脳を銃弾でぶちまけようとしたのはわたしだよ。スナイパーライフル使ったせいで右肩をすこし怪我しちゃったんだよね……」

彼女に罪悪感の欠片も無かった。それがさも当然のことのように、何の躊躇も無く答えたのだ。やはりこの人間は壊れている。おかしくなっている。

「それで、あれがただの殺人人形に戻れば、感情も無くなる、今までの記憶も無くなる。わたしのいう事だけを聞く人形になるの。アレにとってそれが幸せなんじゃないの？」

俺は意識しないうちに右目のモードを変え、両手には黒い手袋をはめていた。

「ふざけんな！ アンタら大人の問題にシャノンを巻き込んでんじやねえ！」

「これはアレの問題でもあるんだけどな」

「アンタがこのリーダーなんだろ？ 他に人はもういないんだろ？ アンタを殺してここを壊せば、シャノンは何もされずに済むはずだ！」

「できるものなら、だけどね」

「活路を見つけてやる！ アンタを殺してでも……！」

「それともう少し良いことを教えてあげようかな？」

沙雪さんは後ろにあった機械で作った巨大な腕を自分の腕にはめた。それは大きなスキであり、先攻を決めるチャンスだった。俺は

すかさず、彼女の顔面にストレートを叩き込む。

しかし、それはその巨大な腕によってふさがれた。鉄骨をも持ち上げられるほどの力で殴ったのだ。鉄の塊ごとき潰れてもおかしくは無いはずなのだが……。

「ッ!？」

「まあ焦らずに聞いてよ……君の義妹さん、紅音ちゃんだっけ？」

あの子の首に巻いてあるチョーカーにはちょっとした爆弾が仕掛けであるんだ」

「ガセで精神的に揺さぶるつもりか？」

「ガセと見せかけて実はガセじゃないんだよね、この情報。まあ爆破範囲は狭いから彼女の首が飛ぶくらいの爆弾だけど。どうする？」

このまま大人しく殺されてくれるかな？」

「うるさいんだよ!」

もう一度、力いっぱい巨大な機械の腕を殴る。ギン! という音だけがして、機械の腕にはへこみ一つ、傷一つもついてはいなかった。紅音の首に巻いていたチョーカー。それが爆弾になっている? ふざけやがって。

「戦いながら、もう少し雑談でもしようか。黒木くん？」

「紅音の爆弾の起爆条件は？」

「わたしが持つているこのスイッチを押すこと」

白衣の内側に、飛行機の操縦桿のような形にボタンをつけたような形のものがあった。

どうすればいい……どうすれば、シャノンと紅音、二人とも助けられるんだ。目の前の相手をコロシてしまえば問題ない。

「まあ、話は変わるけど……あの人造人間は今まで十一体作られてきたんだ。でもどれも失敗した……動かない物、身体の一部が機能してない物、目から腕が生えた物……いっぱいあったけどやっと成功したんだ。いい加減良いでしょ？」

「物じゃねえって言うてんだろ! アイツはシャノンⅡフォンⅡフォスターっていう世界でたった一人の女の子だ!」

「失敗作は十一体いるけど？ ああ、それとこの人間達が壊れた理由を教えてあげるね……」

彼女はまるで怪談を語るかのように話していた。

「関東地方の行方不明の事件っていうのはよくわたしたち『研究者』が関わっているんだ。人間のサンプルを取るためにね」

「サンプル……？」

「生きた人間で実験する。一番重要だったのは感情を持たせないこと、だったからね。雨宮も賛同したんだ。麻酔も打たずに、脳を開いてみたり、腕を切り離してみたり……そんなことをやらせていたらどんどん壊れていったんだよ」

「なんなんだよ！ いい加減にしがれ、このっ！」

競馬の馬のように飛んでいるに近い走りで距離を詰める。今度は最初からあの機械の腕に当てる！

「その手袋、面白そうだねー。どうやって作ってるんだろ？ わたしも科学者だから気になるんだよね……」

ギン！ と金属が奏でる高い音が気味悪い空間に響いた。へこみもしなければ、傷もつかない。どうなっているんだ？

「これはかわせるかなあ？」

突如、機械の腕から光が瞬いた。俺は本能的にその光線を横に転がって避ける。そしてその光線が当たったところは、溶けていた。

「ビーム兵器だよ？ アニメみたいでしょ。これ、何でも溶かすんだ。このアーム名つけてビームガン・アーム！ かっこいいよね？」

「はあっ……はあっ……」

「それにしても今のビームをかわすとはね……来栖の言ったとおり、生きることに関しては才能があるみたいだね。どちらにしろ殺すけど」

どうすればあの機械の腕を壊せる？ 何か活路はあるはずだ。この世に完全なものなど存在しないはずだ。必ず物には一長一短がある。ダイヤモンド然り、化石燃料然り。

「さあて……これ以上奥へは進ませないよ？ 再調整中なんだから。」

あと少しで完成なんだからさ！」

次に取り出したのは巨大な剣だった。左手からは刃渡りが長い、巨大な両刃剣が握られ、右手にはビームを備えている。近づけば、斬られ、遠ざけば、溶かされる。

すかさずビームが飛ぶ。それを再び横に転がり回避。光の速さよりは若干遅いようだ。

「そらそら！　いつまでかわせるかな！？」

次々と床が溶けてゆく。溶かされた床はどろつとした液体になっていて、水蒸気を上げている。あれがもしも俺の体に当たったとするならば　考えるまでもない結果になる。

「しまっ……」

回避したものの、次の行動に入るまでのタイムラグが大きかった。顔面にビームの発射口が見えて　。

今、この瞬間に俺は死の恐怖を知ったのだ。光線を吐き出す銃口を今、向けられている。このままでは　！

そして、俺はたった一つのギリギリの活路を見出した。

「うおおおおおおおおおおお！」

ポケットから拳銃を抜き、普通では考えられない速度でハンマーを起こす。これも手袋のおかげだ。そして、その拳銃をビームガン・アームの銃口に突きつけ、引き金を引いた。

バン！　銃声が響き、そして同時にアームから火が吹き、壊れた。「ぐわあああああつ！？」

俺はこう考えたのだ。外側から破壊できないなら内側から破壊してしまえば良い。外側の装甲がどうなっているのかは知らないが、この手袋の拳を受け止めたほどのだから銃弾など跳ね返るに決まっているのだ。

「あつ……ぐがっ……」

沙雪さんの右手にはアームの破片が数十も突き刺さり、流血していた。右手は赤いペンキを腕につけたように真っ赤に染まり、痛々しさを物語っている。　今ならコ口せる。ヤレ。

「さつきからうるさいんだ！ 俺はアンタを殺したりなんかしないッ！」

「だまれっ！ わたしの……右腕を失くしてでも、あの十二号には触らせない……！」

「なんでだよ！？ なんでそうまでしてシャノンに固執するんだ！ 恨みでもあるのか！？」

「わたしにはこれしかないんだ！ 巫女としての役目を真面目に果たす気になれなかった……。興味が湧かなかったし、第一わたしはあの神社が嫌いな……。それで、他に何のとりえもないわたしだけが唯一、思春期を投げ捨てても、没頭した研究課題なんだよ！？ 君に何が分かるっていうんだ！」

「だからってなんで、そんな人を道具みたいに扱うんだ！ それになんでシャノンが殺人マシーンになっちまうんだ！？」

「分からないッ……分からない、分からない、分からない分からない、その問題には答えられないよ……」

彼女が何の理由で道を踏み外したのか分からない。ただ、分かるのはこここの人間は壊れているという事だけだ。『研究者』たちのリーダーでさえも壊れてしまうほどの狂気で汚染されている場所。こんなところは

「こんなの問題でもなんでもない！」

「だから、もう近づいてくるなああああああああああああああああああああ！」

ホントの彼女はどつちなのだろうか。あの俺に見せていた、少しドジなところなのだろうか。それともこっちの研究者としての彼女なのだろうか。どちらにしても、まずはここから助けないと始まらない。殺しは救いにならない。

ビュン！ と沙雪さんの左手の斬撃が俺の髪を二、三本持つて行く。機械といえども、中々に速く正確な攻撃ではあるが まだ遅い。しかし、下手に攻めに出ると、攻撃範囲が大きい剣に腕ごと斬られてしまうから、防戦一方になっている。

「君に何が分かる！ 君にっ！ 何がっ！ 分かるっ！？」

俺にかわされた剣はことごとく、実験用であろうカプセルを粉碎していく。それくらいに彼女は壮絶な痛みと狂気に当てられて混乱している。

「あれは！ 私の、人生の、結晶だ！」

「関係あるか！ それはエゴだ！」

どうしても避けきれず、右手でガードすると手袋が負荷に耐えられず内側からはじけた。少し手がひりひりとする。これでもう後は無くなってしまった。

「じゃあどうしろって！？」

高速で迫ったアームの肘うちを喰らってしまい、俺の身体がカプセルに当たり、数十もののガラスの破片が背中に突き刺さる。

「がああああああああああっ！？」

意識が飛びかけるが、何とかこらえた。剣の攻撃が迫るが、頭を少し動かしてかわした。剣をかわすと、続けてまた肘うちが迫り、手袋をしていないほうの手でガードした。

「ッ！？」

骨は折れてはいないようだったが、想像を絶する痛みが全身を駆け巡った。よろけてしまい、追撃を受ける。俺は本能的に右手で剣をガードした。それに連なって左手の手袋もはじける。

「クソおおおおおおおおおおおおお！」

たった一秒にも満たないスキを突いて、彼女のアームの腕部分を掴み、動きを停止させる。壊すことは出来なくても動きをとめることくらいならできるようだ。左腕がいつ折れたっておかしくはないぐらいの負荷がかかっていた。

「ぐうっ……！」

「アンタはD・D計画のことを後悔してんのか？」

彼女は最後の手段として、白衣の内側にある紅音の爆弾のスイッチを取り出そうとしているのだが、

「してない、よ……」

俺はぎりぎりとアームを持ち上げていく。自分自身、どうやって生身でこの力を発揮しているのか分からない。

「アンタのその才能はちゃんとしたことに使えば役に立つはずなんだ。だから……上にながって罪を償ってこい！」

俺は空いている右手のほうで彼女のみぞおちに拳を叩き込んだ。

「うっ……この偽善者……」

彼女は倒れ込み、アームからも力が抜ける。そして俺は沙雪さんを引きずるようにしてリフトの中へ収容した。ついでに白衣の中にあつたスイッチも俺がとっておいた。

「偽善者だろうがなんだろうが、構わない。なぜなら俺はエゴイストだから」

この人は他人をたくさんサンプルにしてきたことだろう。俺の手で殺すのではなく、彼女自身の力で活路を見出だしてもらわなければ償いにはならない。

ようは生き地獄を味わってもらう、ということだ。

殺人を正当化するわけじゃない。誰かに救ってもらうのか、法廷で裁かれるのか、行方をくらませるのか。どれをやるのか分かったもんじゃないが、それも彼女が決めることだ。

エゴの押し付けかもしれない。それだったとしても沙雪さんには反省して欲しいのだ。俺は彼女のことを信じていないし、許しじゃない。矛盾しているかもしれないが、そうなのだ。

あんなバカげた計画を作ったのだから。

「そんじゃ……もう一人助けに行きましょうか……」

シャノンを手助けしなくてはならない。彼女は自分が作られた存在だと。人造人間であると、分かっているはずだ。記憶を操作できるなら、それを消したい。

俺は携帯を取り出す。地下深くではあるが、どんな機械を使っているのか分からないが、アンテナはしっかりと三つ立っていた。俺は玉砕覚悟で電話を掛けた。

通話相手は二コール目で出た。

「師匠？」

『天真……どこからかけている？』

変なところで鋭い人だな。やっぱり師匠には一生勝てそうにもない。

「師匠は大丈夫ですか？ 俺は……言わずとも分かるでしょ？」

『俺は大事な。それで、用件はなんだ？』

俺は研究所の中をゆつくりと歩く。研究所の中は沙雪さんが暴れて壊したせいでめちゃくちゃになっていた。カプセルは割れ、危ない色をした液体は床にぶちまけられ、コードは切れて火花を散らしていた。

そして、一番奥に、唯一壊れていないカプセルがあった。透明な液体の中にヘッドギアをしたシャノンがいた。そしてその横にはグラフや%で記された何らかの数値が映し出されているモニターが二、三台あるだけだ。そのモニターには残り十分と書いてあった。

「今、シャノンが再調整つてのを受けてます。それを止めるにはどうしたら良いですか？」

『まったくこのバカ弟子が……どこにいる？』

「赤レンガ倉庫です」

『赤レンガ倉庫……？ どこだ、そこは？ 新しく出来た開発地か？ 研究所の位置は……どこだ……？』

やはりだ。俺みたいな特殊なやつじゃないと、一般人にはここが認識できないようだ。来栖の言っていたことは師匠にも通ずるらしい。

「とにかく。今シャノンの頭にヘッドギアが被せてあるんです。それと変な数とグラフが表示されてるモニターとキーボードがあるんですよ。どうしたら良いですか？」

『……分かった。そのヘッドギアはおそらく壊せないようにできているはずだ。だから別の手段を使う。ただ、お前だけでやるのはほぼ無理に近い。誰か助手を連れて来い』

「時間がないんだ！ お願いします、早く！」

「分かった……バカ弟子が。良いか、今からやるぞ。たいていはタイピングだ、お前パソコンは出来たか？」

「人並みには」

タイピングか。キーの位置を正確に把握し、大体の位置を覚えていないと早打ちは出来ない。だから俺は、右目に意識を集中させて、一度もやったことのないことを試みた。

視覚の拡張。できた。一八〇度全て見渡せている。成功だ。まあ、成功したのは奇跡だろう。いくら、可能性を持っている目だからといって一発でこの芸当を可能にしたのは数々の偶然が重なったからだろう。

（神様って本当にいるかもしれないな……信じたくなった）

『グラフの横に何かを書き込める場所があるはずだ。そこをクリックしろ』

すると、大量のテキストが画面に表示された。

『それに表示されたのはいわばシャノンの脳内の情報だ。そのヘッドギアは今それを書き換えているはずだ。今までの記憶を全てなくすためにな。今から言う英文字を全て付け足せ。俺が研究所を抜けた際に持ち出した脳内データだ。成功すれば、お前と出会う前の記憶が戻る。自分が作られたものであることも忘れる。ただし、一つでも間違えれば……』

俺と出会う前の記憶……ほんの二週間くらいの出来事は全てなかったこと、になる。それは俺にとって悲しいことだ。しかし、自分のエゴにも限度があるってもんだ。だから俺は、

「間違えれば？」

冷静に答えた。自分を押し殺してまでも、彼女を救いたかった。理不尽な出来事に巻き込まれたシャノンを。

『彼女は彼女の全てを失い、二度としゃべれなくなり、二度と怒らなくなり、二度と泣かなくなり、二度と歩かなくなる……ただの人の形をした人形になる。それでもお前はやるか？』

師匠は今までにないほど切羽詰った声でたずねてくる。

『お前の手に一人の女の子が託されているんだ。人形になるくらいだったら、まだ殺人マシーンの彼女を止めたほうがまだ楽かもしれない……それでもお前はやるか?』

俺の手は嫌な汗でぐっしょりと濡れていた。手だけではなく、全身からも嫌な汗が噴き出している。そして俺は師匠の問いに答える。『やってみせる。元々彼女の問題じゃないんだ。巻き込む理由なんてなかったのに』

ヒーローになりたいとか、カッコつけたいとか、そんな理由じゃない。ただ大人の問題にこんな可愛い女の子を巻き込むのは間違っているという当然のことを示すだけ。俺の行動を突き動かしている思いはただ、それだけなのだ。

「じゃあ、師匠……言ってください……!」

俺は深呼吸をし、自分の肺の中の全ての空気を交換した。手を握り締め、そして離す。さつき喰らったアームの攻撃はもう問題ないようで、しっかり手は動いた。そして、

『行くぞ……os/a eum s a n e i a u i 4 n h a i s y a o
m o n o 2 a s a a e i t e s i a o s a ! n o i s a j + d a
k a m s 「 a o e a w a w q ; m m o s a d d @ : n a i o ……」』

無数の記号が画面上に映し出される。

キーボードは視野が広がった目で全ての位置が分かる。なんとかついていける。アドレナリンがすごい量出ていることだろう。ブラインドタッチがやれる人間はいつもこういう感覚なんだろうか。

それに心拍数が尋常ではない。

もう一つのモニターには、WARNING! と警告を表すウィンドウが消えては現れ、現れては消え……というのを繰り返していた。

『そこから改行して・adqmd・vgmdajgagg-ag・j/adjt0gPdjPDAG……』

あれ、少し頭がぼうつとしてきたな……。タイピングはできているから大丈夫か……。残り時間を示すモニターには『あと三分』と

表示されている。

俺のタイピングのペースはあのヘッドギアがシャノンの脳のデータを書き換える早さに追い付いているのだろうか。

もし三分以内にシャノンの脳内データを全て書き換えられなかったらどうなる？ 俺の書き換えデータが半分とヘッドギアの書き換えデータが半分、ということになるのか？

師匠に聞けばいいのだが、今はそれどころではない。

『天真、あともう少しだ……別のモニターに残り時間が表示されているはずだ。あと何分だ？』

「あと……二分ですね……」

『よし、ではやるぞ。 g p g j a p a e g @ 0 0 0 k d w t p g b g j d h / j n - m j p j m t h ……』

あれ、右目の視界がコンマ一秒にも満たない一瞬だったけど、ブラックアウトしたような気がする。問題はないと思う。少し疲れただけなのだろう。

疲れたが愚痴っている暇はない。

あと、もう少しで活路が拓けるんだ。

そして、

『……で終わりだ。どうだできたか？』

終わったらいいのだが、俺は残り二行のところで手を止めていた。

壮絶な、頭が今にも内側から膨張して張り裂けそうな痛みのする頭痛が俺に襲いかかったのだ。

「がっ……ぎあああああああああああああああああああ
！」

痛みของあまり思わず絶叫してしまう。今までのどんなフィードバックよりも痛い。こんな痛みを味あわせ続けられていたら頭がおかしくなりそうだ。まだ能力は使いきっていないはずなのに……。俺の視界の隅に残り三十秒という文字が見えた。絶望的。その言葉が相応しかった。

どんな活路も見えやしない。あと、二十五秒。

覚えてる範囲だとたったあと二十三文字だ。二十三個の記号をあのモニターに打ち込めば、シャノンは助かるはずなのに。右目のモードを通常モードにすれば少しは痛みが緩和するだろう。しかし、それをやったらタイピングが間に合わない。

あと二十秒。

頭でも、手でも、目でも、神経でも、精神でもなんでも持っていて良い！ お願いだから、俺の言う事を聞け、俺の身体！

あと十七秒。

「ちくしょうがああああああああああああああああああああああ
ああ！」

指を動かす。あと十秒。あと十一文字。

「止まれエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
えええええ！」

カタタタタ……3、2、1、0。ビー！ というあからさまに機械から出力しているようなノイズが部屋に響いた。

俺の身体はもう、何も、動かせない。指一本でさえも動かない。そして、目だけで打ち込んでいたモニターとは別のモニターを見ると、

『再調整再構成は共に原因不明のエラーにより実行を中止されました。検体を排出します（エラーコード241）』

「はははっ……良かった……」

カプセルからシャノンが出てきた。服までもが濡れていて、いつものように眠っていた。

（こいつはホントに寝てばっかだな……赤ん坊みたいだ。少しは活動しろっての）

俺は横たわりながら、そんなつまらないことを思った。これであとはここを失くしてしまえば、シャノンが危険に晒されることはな

くなるのだ。

そして、俺は気が付く。右目が見えていない。一面の黒。何も見えない。何も、見えて、いない。

「あ……ああ……」

見えなくなつて構わない。シャノンが助かつたのだから。

しかし、弱り目に祟り目、泣きつ面に蜂とはよく言つたものだ。今、このカプセルより奥の部屋で、火が上がった。原因は不明だ。カプセルの水が床に浸水しているから、それが引火性であつた影響かもしれない。もしそうだったとするならば、ここも浸水をしている。時期に火の手が回つて、俺たちまるごと焼死体になること間違いない無しだ。

シャノンを抱えて運ぶほどの余力は残っていない。こうなつたら引きずつてでも、助け出してやる……！

ほぼ、意識が朦朧とした状態でシャノンの首根っこを掴み、引きずりながら、あのリフトを指す。シャノンは小柄だから沙雪さんがいてもギリギリあの中に入るだろう。

「はあ……はあ……」

俺の右目はどうなっている？ 俺は今どう歩いている？ 火はどれくらいまで迫ってきている？ あとどれくらいでリフトに着く？ 死ぬのか？ どうすればいいんだろう？

様々な思いが頭の中で交錯し、爆発しそうになる。ちゃんとリフトの方向へ向かつているのかどうかさえ分からなくなっている。

この空間が真夏の昼間のように暑くなっている。ああ、火がすぐそこまで来てるのかな……。そう思っていると、沙雪さんが倒れて収納されているリフトの前に着いた。

投げるようにしてシャノンをそこにに入れて、リフトのボタンを押す。すると、すぐさま上へと行った。これで彼女達が火の海に飲まれる可能性は消えた。リフトの前に扉をしてワイヤーが切れてしまわないようにしたかったのだが。そうもいかないようだ。

俺はその場に倒れた。頭痛という範疇を超えた痛みで、目さえも

動かせなかった。そして、俺は火がこの床に溜まった液体を便りにして迫る中、俺の意識はプツリと途切れた。

問題終了（前書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございます。

問題終了

シャノン「フォン」フォスターは病院の一室で目を覚ました。

なぜ自分がここにいるのか彼女には分からなかった。シャノンは確か、雨宮という男と行動を共にしていた、と彼女は記憶している。ただ、そこには妙な違和感があった。

雨宮に連れられて、『横浜』というところに来たのは六月の初頭だったはずだ。しかし、横にあるデジタル式の時計の日付けを見るともう、六月の中旬であった。タイムリープしたわけでもなければ、丸々二週間眠り続けたわけでもない。

何か、違和感がある。とても切なくなるような、とても悲しいような。

「シャノン、元気になったか？」

病室に入ってきたのは雨宮だった。

「うん。別に……。イサオ、あたしってどのくらい眠っていたの？」

「一日だ」

「本当なの？」

「ああ」

「あたしは六月の最初から今まで何をしていたの？」

「……………」

彼は答えなかった。苦虫を噛み潰したような表情だ。そして、しばらくの沈黙の後、

「お前は、夢を見ていたんだ」

「夢？」

「そうだ。その違和感はおそらく夢なんだろう」

「ふうん……そうなんだ」

雨宮はそのままシャノンに背を向け、病室から出て行ってしまった。彼女も気分転換に、と思い、病室の扉から出た。医者からの許可は出ていなかったのだが、身体を動かさないといってもたつてもい

られなかったのだ。

彼女のとなりの病室には『中松 沙雪 様』と書かれた病室らしかった。そこには近寄らないで置こう、とシャノンは本能的に思ったのだった。

その病室を通り過ぎると、黒い短髪の少女とすれちがった。

「……シャノンさんじゃないですか。無事で何よりです。早く彼のところへ行って来て下さいね」

彼女はそう言い残すと、いつの間にかどこかに消えてしまった。

（あたしの名前を知ってたみたいだけど……あの人は一体誰なんだろう……しかも誰かに早く会いに行け……）

あの少女が違和感の正体なのだろうか。シャノンは兩宮の言ったことがいまいち信用できていなかった。やはり、このモヤモヤした違和感は夢などではない。

ただ、今通り過ぎた病室から女性の罵声が聞こえてきたのだ。

「なんでいつもいつもそうやってケガを作ってるのかしら！？他人に迷惑がかかってるじゃない！ 何回経験すれば気が済むのかしら！？」

興味本位で、その病室の中をドアの隙間からそつと覗いた。中には、おそらく言葉をまくしたたている少女とベッドに座っている人がいた。ベッドに座っているほうの人の顔はちょうど死角に入って見えなかった。

「お詫びとしてハンバーグ作ってよ、ハンバーグ！」

とても、いい響きの言葉だ、とシャノンは思った。ハンバーグってどんな食べ物なのだろうか、おいしいのだろうか……シャノンの頭はそれでいっぱいになった。

なぜかわからないが シャノンがその言葉に反応したのかどうかは彼女自身分かっていなかったが、その病室のドアに手をかけていたのだった。

黒木天真はその時、死の淵に立たされていたらしい。

らしいというのは、俺が研究所の中でシャノンたちを上を送って倒れた後、あの研究所に火が回るほんの少し前にサイカが排気口から俺を拾い上げてくれたらしい。彼は逃げているうちに排気口にたどり着いたとか。サイカには命を救ってもらった借りができてしまったようだ。

その後のことだが、俺の右目の見た目は至って変わっていないかった。気持ち悪い目になっていなくて良かった、と一安心したいところなのだが未だに失明状態であるのだ。ようは、ただの義眼になっってしまった、というわけだ。使いすぎによる問題なのだろう。少しは不便になるであろうが、慣れれば問題ない。

「いやあ……平和だ……」

赤レンガの地下はその後、爆発。資料から機械まで全てがなくなってしまう、事件の解決は難航しているそうだ。じきに研究所にいなかった『研究者』のメンバーが捕まるだろう。それで、そのリーダーの沙雪さんかというと今はまだ病院で治療中だ。俺は彼女を許したわけじゃない。ただ、同等の代償は払ってもらうつもりだ。

事件の一抹はこんなところだ。俺、今までの出来事書籍化したら小説家になれるんじゃないか。左腕骨折してるけど。

ベッドの横の机においてある携帯を見る。携帯はどうやらちゃんと機能するらしい。

「……黒木さん、お見舞いに来ましたよ」

「リリース……お前はドアをノックすることを知らんのか」

「何かやましいことでもしていたのですか？　つい、ムラムラしてしまっただか」

「しらんわ！　しかも女の子がそういうこと言っちゃダメ！」

彼女は少し、ハツとした表情になり、すぐにもとの表情に戻った。

「まあ、変態が変態であることには変わりはありませんが……わたしの用件を言っただけですか？」

「なんだ？ また口クでもないことなんだろう……」

「約束は守ってもらいますよ？ あなたの目を研究するという……お忘れになっていませんか？」

「あ……」

完璧に忘れていた。しかも俺の今の義眼は機能していないのだ。それがバレたら代償としてどんな生体実験をさせられるか分かったもんじゃない。

「わ、忘れてるわけ無いじゃないかあはあはははは……」

ジト目でリリースが俺を見つめる。はあ、どうして俺ってこう蔑まれるハメになるのだろうか……。

「まあ、良いです。あなたが無事であればわたしはそれで」

「え……今なんて？」

すぐくご褒美級の言葉を聴いた気がしたのだが。俺は難聴でもないし、空耳でもないと思うのだが。

「大事な実験動物に死なれては困りますからね」

「やっぱりこの人サイテーだ！ はあ、いい加減うつ病になっちゃまいそうだ……」

「用は済んだので帰ります。さようなら」

そう捨て台詞を吐くと本当に病室から出て行ったのだった。一体何がしたかったのだろう。迷宮入りになりそうなほどの謎だ。

そんな気を晴らすべく、晴れ渡っている青空を見上げようとしたとき、

「天真っ！」

「げっ、凜……」

「人を見た瞬間げ、とは何よ！ げ、って！」

「ここは病院ですよ！ 静かにしましょう、シー」

俺が顔の前で人差し指を立てると、凜はゆでだこのように顔を真っ赤にし、

「人が心配してやってるというのに！ それに……なんでいつもいつもそうやってケガを作ってくるのかしら！？ 他人に迷惑がかか

つてるじゃない！ 何回経験すれば気が済むのかしら！？」

「他人？」

「わたしよ！ わたし！」

「なんで？」

「なんでって……そんなことは良いのっ！」

彼女は今まさに、俺にとって恐怖の権化であった。この説教癖と世話焼きが彼女の特徴である。昔から面倒なのだ、これが。

「お詫びとしてハンバーグ作ってよ、ハンバーグ！」

「ええええ……」

ハンバーグというついで、シャノン思い出してしまう。彼女の部屋に見舞いに行こうかと思ったのだが、今のシャノンは俺の知ってるシャノンではない。俺に会う前のシャノンなのだ。だから、見舞いには行かなかった。

そう思っていると、病室のドアガラツと開いた。そこにいたのは、

「……あ」

彼女が気付いたように声を出した。純粹な金の輝きを放つ金髪、くりくりとしたサファイアを連想させる瞳、小柄な身体。

「シャノンちゃ……んんっ！？」

俺は立ち上がった彼女の口を塞いだ。

「どうしたんだ？ こんなところに用か？」

「えと、うんと……」

凜がいつもするクセのようにモジモジして、彼女はぼそりと呟いた。

「ハンバーグ……」

「ぶっ……」

彼女の記憶は変わってしまったのかもしれない。俺たちのことは何一つ覚えて何のかもしれない。でも、時間はまだある。やりなせる。

「じゃあ、今度俺の寮に来いよ。作ってやるから」

彼女の目はもう、
儚げではなく、
元気な一人の少女の目つきにな
っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777v/>

この問題、答えられますか？

2011年8月18日03時28分発行